50th
Anniversary

CSF

Chiba Sailing Federation

創立50周年記念誌

千葉県セーリング連盟

千葉県セーリング連盟創立50周年記念誌

50年の軌跡

千葉県セーリング連盟
会長 荒川 昇

千葉県セーリング連盟の前身である千葉県ヨット連盟は、昭和24年4月、石津四郎初代会長の下に、県内のヨットマンが結集し設立されたものであります。敗戦によって混乱する社会情勢の下で、ヨットを愛好し、スポーツによる国土の復興を願った先人の情熱には敬服するしかありませんが、以来50年の星霜を経て、2代川名正義会長、3代松戸節三会長をはじめ数多くの関係者の方々の熱意と努力によって着々と発展し、今日の隆盛を見るに至りました。

ここで本連盟の50年の軌跡を振り返ってみますと、昭和57年までの館山湾を活動の拠点とした時代と、58年以降現在に至る稲毛ヨットハーバーの時代とに大きく二分することができますが、この間、国体2回、全日本選手権5回、そして平成5年のFJ級世界選手権大会と、数多くの大会を開催し本連盟の名を内外に高らかしめたことは衆目の一致するところであります。

県域の大半が海に面している本県にとって、海に親しみ、海と競うセーリングスポーツの普及振興を図ることの重要性は申すまでもありませんが、競技としてのヨットから、楽しむためのヨットまでその範囲はきわめて広いものがあります。

本連盟の加盟団体は、現在市町村を単位とするもの。大学、高校、中学のヨット部、実業団のヨット部、クラブ団体など33の加盟団体で組織されておりますが、今後、少子化、高齢化の時代を迎えるにあたって、連盟の一層の発展を図るためには、従来の枠にとらわれない幅の広いクラブ組織の充実が必要になってくるものと思われます。

ハーバーに集まってきたさまざまな年齢層の人々が、ヨットに親しみ、クラブライフを楽しむことのできる環境条件を整備することが、これからの私達に課せられた使命といっても良いかも知れません。本連盟はかねてから、ヨット入門コース、ヨット教室、女性ヨット教室等の普及事業に力を入れてまいりましたが、このような教室の参加者が、やがて潮風に鍛えられ、一人前のヨットマンに成長していくことを見ることができるのは、関係者の何よりの喜びであります。

また普及と振興は車の両輪でありますが、本連盟は国民体育大会を強化事業の集大成と位置ずけ、国体の上位入賞を目標に選手、指導者が一体となって努力してまいりました。過去に数度に亘って優勝の栄冠に輝いた本県ですが、ここ数年は不振をかこつ状況にあります。これは本県の中心勢力であった高校勢の競技力が、部活動に参加する生徒の減少という現在の高校運動部に共通する現象によって低下したことにあるものと思われます。

本県は平成17年に全国高校総体の開催を、更にその5年後の平成22年に二巡目の国体開催が予定されております。

50年という節目の年を迎えた本連盟が、新しい世紀の大きな目標に向けて、更に大きく飛躍することをお誓いするとともに、関係各位の御支援をお願いいたしまして、50年史発刊のことばといたします。

ごあいさつ

(財)日本セーリング連盟
会長 **秋田博正**

半世紀に亘る輝かしい歴史と伝統を誇る千葉県セーリング連盟が、ここに創立50周年の記念すべき日を迎えられ、誠におめでたく心からお祝い申し上げます。

千葉県ヨット連盟は、戦後間もない昭和24年に他県に先駆けて創立され以来今日に至るまで幾多の困難を乗り越えられ、明日に夢を託しながら健全なヨットの普及や海事思想の啓蒙助長等に素晴らしい成果を収められ、輝かしい発展を遂げてこられました。

このことは、多くの諸先輩によって果たされた数々のご業績と、現在も尚ヨット界発展のために尽くされている方々のご努力の成果が、今日に見る不動の千葉県セーリング連盟を誕生させたものであり、心から敬意を表する次第であります。

私ども当連盟も、このたびの組織統合以来既に八か月の時日を経過いたしておりますが、お陰をもちまして関係各団体皆様のご協力を得て諸事順調な歩みを続けております。

貴連盟に対しましては、今後ともわが国ヨット界の更なる発展を図るための推進力としてのご活躍に大きな期待を寄せております。

皆様におかれましては、今日まで脈々として流れる素晴らしい歴史に、より一段の輝きを増すよう、セーリングスポーツのメッカたるにふさわしい千葉地域ヨットの発展に務められ、日本セーリング連盟と共々に限りない前進を続けられますようご祈念申し上げお祝いのことばといたします。

あいさつに替えて

回想：房州館山

関東ヨット協会 会長
(社)日本ジュニアヨットクラブ連盟 副会長
佐藤　精知夫

昭和23年館山の海は輝いていた。A級デンギーが沖をはしり、海水浴客を乗せたドン亀がその回りを走つていた。その数の多さに驚いたものであった。立教大学の合宿、館山金台寺に50名、今日から思うと羨ましいくらい数が多かった。終戦後食糧難の時代、米を持参で合宿に参加した。艇は各大学横浜貯木場より出航、艇団を組んでそれぞれの合宿所に向うのである。即ち千葉県は我々ヨットマンを育ててくれた処であった。

慶応岩井、早稲田船形、法政富浦、立教館山、日大館山、東大富浦、各大学館山湾に会してレースを行った。即ち館山湾レース、地元の大将は県連会長川名正義先生、若かった。元気に溢れていた。

世話役に、安房水産高校の川名勘之助先生、保健所の斉藤誠氏、長須賀の島野氏が居た。現在の県連の幹部では小川君が高校生かと思う。レースの打合せで川名先生のお宅に伺う機会が多かった。

何か先生に気に入られて佐藤君、佐藤君と、何時も酒とか甘い物を頂いたりもした。

思い出すと懐かしくなる館山国体の折、川名先生を長に千葉県連一丸となって館山国体を迎えた。その準備に私も直接携わる事になり、斉藤明氏と友にリーダーを作り指導する事になった。既に県連の指導者であった、吉原章雅君と初めて会ったのである。そして彼にお願いして国体を立派に成功させ、稲毛国体を通して今日の稲毛ハーバーが出来たのであり今日の磯辺高校があるのです。川名先生のお宅からお米を持って来たり、当時無いジヨニ黒を頂いたり、清川先生と共に料理屋に上ったり川名正義先生の思い出はつきません。又、川名勘之助先生は、ご自分で魚を捕って来て料理をして私に酒をつぎながら、館山にはハーバーは出来ないと愚痴を云っていたのも房州でした。千葉県は私にとって大切な処となりました。

千葉県セーリング連盟創立50周年記念誌

●凡例／日ヨ：(財)ヨット協会は'99年４月、日セ：日本セーリング連盟に名称変更
県連：千葉県ヨット連盟は'99年４月、千葉県セーリング連盟に名称変更

目次（敬称略）

千葉県セーリング連盟のあゆみ

千葉県とヨット…… 8

歴代役員…… 10

1.石津四郎会長、斉藤(明)理事長時代…… 12

2.川名会長、吉原理事長時代…… 13

3.千葉理事長時代…… 14

4.森田理事長時代…… 15

5.小川理事長時代……15

6.國府田理事長時代……18

創立50周年記念式典スナップ…… 20

平成11年度　役員・組織図・加盟団体…… 22

普及指導部[活動報告]…… 24

競技部[活動報告]…… 30

強化部ボードセーリング委員会[活動報告]…… 35

強化部［活動報告］国体選手及び記録…… 36

千葉県セーリング連盟規約…… 42

回想:昭和24～29年　石津昭三…… 46

回想:昭和35～36年　林潔子…… 48

回想:昭和37～38年　中西ヒデ…… 50

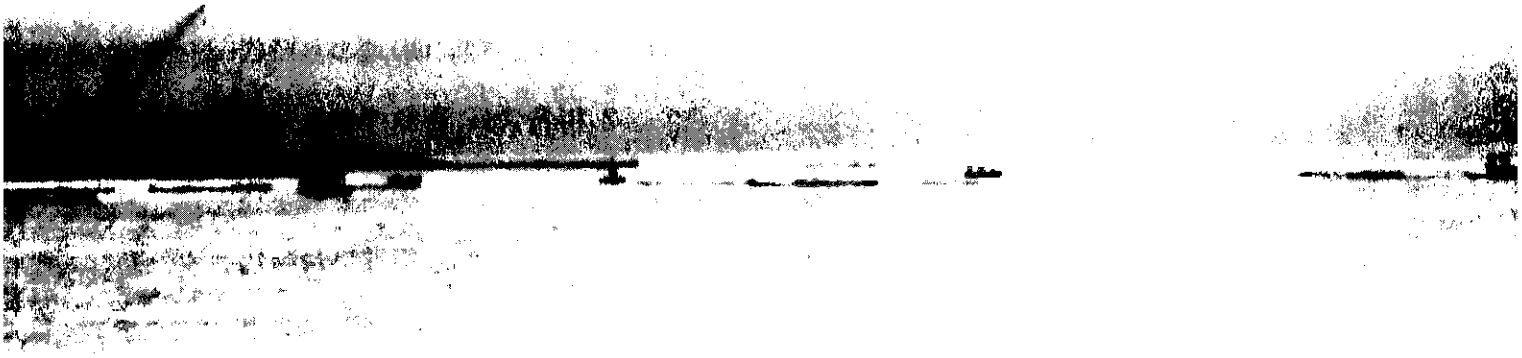
回想:昭和48年　斉藤威…… 52

回想・昭和54年～55年　森田芳樹…… 64

回想:昭和36年～平成11年　小川勝…… 68

回想:マイボランティア25年　前川清…… 72

加盟団体の歩み目次…… 75



千葉県とヨット

海洋国。日本といわれるなかでも千葉県は三面海に囲まれ、海上郡という郡名まである海洋県であり古くから漁帆船は見受けられたが、本格的なヨットは明治42年に吉田、伊東（詳細記録不明）により横浜港より館山湾へ回航され紹介されたところからはじまる。大正9年には館山海岸で貸ヨットが盛んとなり数多く見受けられる様になったが、競技としては古くから水泳競技が発展しており なかなか唯一の海岸スポーツであるヨット競技は なかなか一般に普及せず、日本全体の歴史も浅い。

日本ヨット協会（現日　現、セーリング連盟）が設立されたのが昭和7年11月であり、3年経た昭和10年5月に日本体育協会へ加盟（秋には国際ヨット競技連盟［IYRU：現、国際セーリング連盟：ISAF］に加入、認可された。）

その後横浜港において、各大学ヨット部を中心にして競技が盛んとなり当時より各大学ヨット部では夏期休暇を利用してクルーシング（遠洋航海）を兼ねた合同合宿に横浜港から対岸の千葉県岩井、富浦、館山海岸を選び来県していた。当時千葉県へ航海し房総内湾で帆走するということはヨットマンにとっては千葉県はひとつの目標として親しまれて来たのである。それ故日本におけるヨット競技の発展のあゆみとともに、県内にもヨット競技の芽は育っていったのである。

歴代役員

初代会長：石津四郎

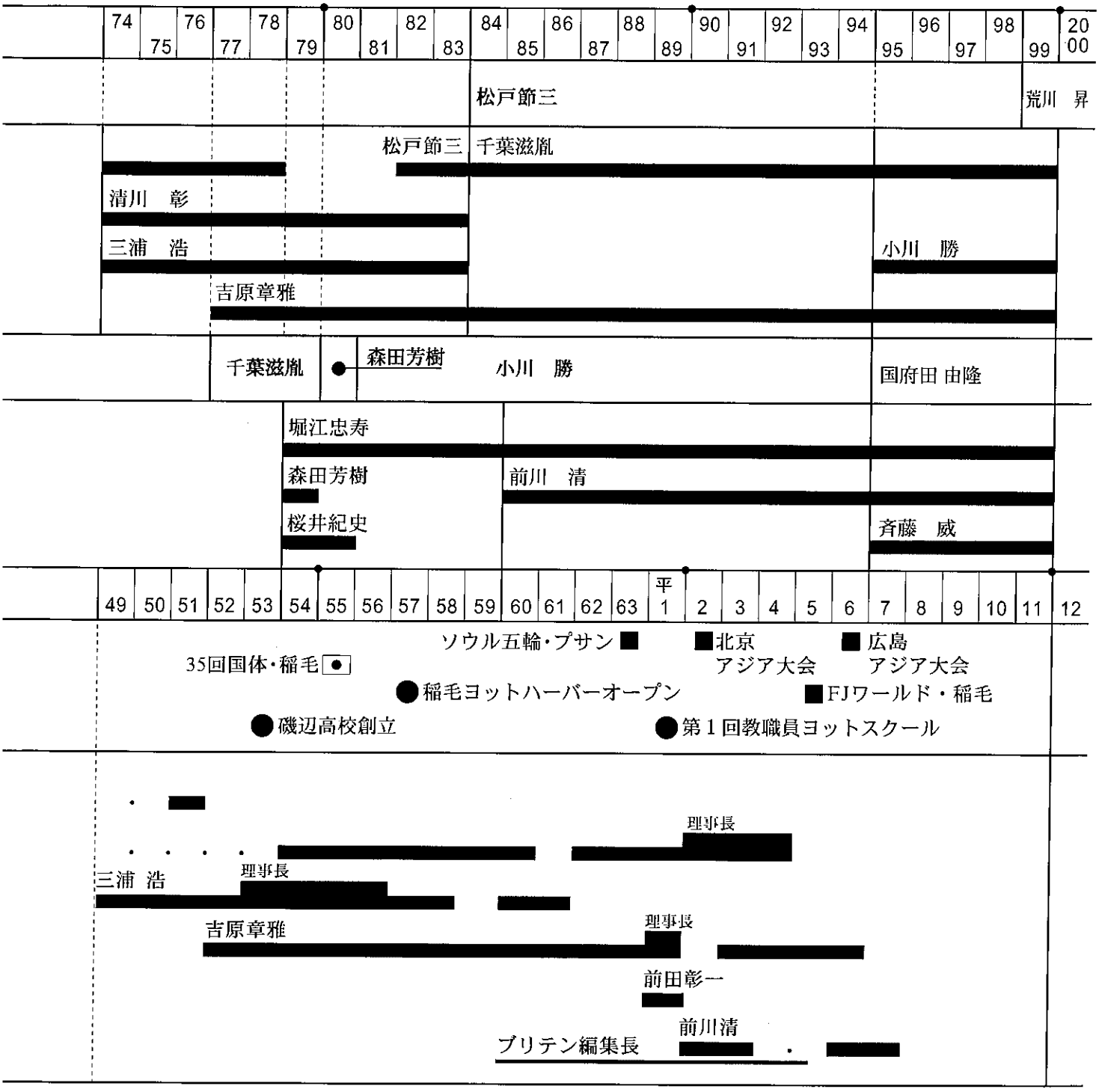
2代会長：川名正義

理事、顧問は本文を参照のこと。

西暦	49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60	61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73
会長	石津四郎	川名正義
副会長		斉藤　明
理事長	斉藤　明	吉原章雅
副理事長		
和暦	昭24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48	
大会その他	■東京五輪・江ノ島 28回国体・館山● ●20回全日本インカレ・館山 ●25回全日本インカレ・館山	
日ヨ理事経験者	斉藤　明 石津昭三 関東ヨット協会理事：吉原章雅	

3代会長：松戸節三

現会長：荒川　昇



1.石津四郎会長、斉藤(明)理事長時代
昭和24～35年
(1940～60)

千葉県ヨット連盟の設立と競技大会

本県出身の各大学選手が数多くでる様になった、昭和２４年５月斉藤明（日大OB）石津昭三（中大OB　現、連盟顧問）等により県内在住の各大学OB、現役選手をまとめ会長に石津四郎、理事長に斉藤明、理事に石津昭三、鵜飼恒（千大OB）、黒崎定篤（立大OB）が選任され、顧問に川名正義：元連盟会長、山口久太、加瀬俊夫、小高嘉郎を迎え創立され、２５年９月に県体育協会に加盟した。

昭和２６年に館山市、館山市ヨット協会の協力により館山湾を中心に来県する東都各大学によって第１回館山湾ヨット選手権大会（その後、館山オープンレガッタに受け継がれ、現在の千葉県オープン選手権大会として毎年開催されている伝統のレース）が催された。

昭和３１年関東ヨット協会に支部制が設けられ、千葉県支部としてヨット競技の技術指導及び海洋思想の普及に力をそそいだ。その後地区協会として館山市ヨット協会（会長白幡静夫、千大OB）、千葉市ヨット協会（会長和田平武、千大OB）が設立され、本連盟のもとに競技会の開催指導に当った。

翌３２年には石津昭三が個人として香港遠征に参加した。

館山湾ヨット選手権大会は、毎年参加チームも増加し昭和３６年７月には日大、法政、中央、立教、東大、早大、安房水産高校、７校の参加により１１回大会が行われたが、この大会は、秋に毎年行われている関東大学新人選手権大会の前哨戦として重視されるに至り、関東ヨット協会においてもビッグレースとして行事予定に入れられ、大会運営も毎年日本ヨット協会より小沢吉太郎副会長が来県され帆走委員長を勤められた。

また昭和３０年及び昭和３５年には館山湾において全日本学生ヨット選手権大会が参加１６校により開かれるなど、正しく「館山湾時代」を築いたと言える。

●昭和３５年６月会長石津四郎多忙のため辞任され川名正義が会長に就任、また斉藤明理事長が日ヨ理事に就任した。この年ナポリ湾で開催のローマオリンピック大会に、本県から初のオリンピック選手として穂積八州男（東大OB）がフィン級に出場した。

昭和３５年６月会長石津四郎多忙のため辞任され川名正義が会長に就任、また斉藤明理事長が日ヨ理事に就任した。この年ナポリ湾で開催のローマオリンピック大会に、本県から初のオリンピック選手として穂積八州男（東大OB）がフィン級に出場した。

2.川名会長、吉原理事長時代
昭和36～51年
（1961～76）

●昭和３６年役員改選。会長：川名正義のもとに顧問：石津四郎。副会長：斉藤明。理事長：吉原章雅。理事：白幡静雄、清川彰、石津昭三、川名勘之助、要籐覚。これより１０年間は、塩釜、玉野、光、両津、蒲郡等の国体ヨット競技の戦績が示すように安定した競技力を発揮し、千葉県ヨット連盟の名を全国に轟かせた。――それは、３３年第１３回国体(びわ湖)より安房水産高校の参加による、全種目参加と歴代の強化コーチによる着実な技術力の向上にある。３５年鹿児島国体で皇后杯２位。翌年の塩釜では天皇杯・皇后杯ともに１位の完全優勝。３年後の両津では天皇杯２位に入賞するなど実力をつけた。

同時にこの時期は、千葉国体［若潮国体］がスケジュールとして具体化されたときで成功の基盤をつくった。普及の分野では、実業団チームが大きく育ち旭ガラス、川崎製鉄、千葉銀行、東洋エンジニアリング、千葉日産、電通、千葉県水道局、奈良屋、日立製作所、三井造船等が加盟、強化の分野では、千葉大、明大、千葉工大、日大等の現役OBに加え、安房水産高を中心とした高校勢が激しいトレーニングを開始した。コーチングスタッフも福田（明大OB）から横谷（理科大）、そして斉藤威（千葉大）と受けつがれ、それぞれ強化向上に大きな成果をあげた。

●昭和４５年、日ヨは安全と普及を軸としたバッジテスト制度を各県連に義務づけた。（上・中・初級）この責任者は、当県連の石津理事である。この制度は、ヨット普及事業の骨格をなすもので座学と実技の二本柱で構成、現在も続けられており、国体の出場資格にもなっている。そして４年毎に改訂されるルールの勉強会や指導者講習会を併せて推進した。この頃、千葉市の水域は埋め立てからニュータウン造成中で、活動拠点は館山が中心であった。普及活動のヨット教室も館山で一泊するのが常であった。

●昭和４８年「若潮国体」は、それまでの努力の結果を如実に示すこととなり、天皇杯１位、皇后杯２位、という優秀な成績をおさめた。千葉県ヨット連盟としては第１６回大会につぐ２度の天皇杯受賞であり、地元開催の面目を果たし得た。国体優勝達成は役員・選手の総力の結果の賜であるが、吉原理事長の献身的努力が国体成功に大きく貢献したことは内外の高い評価からも特筆すべきことといえよう。

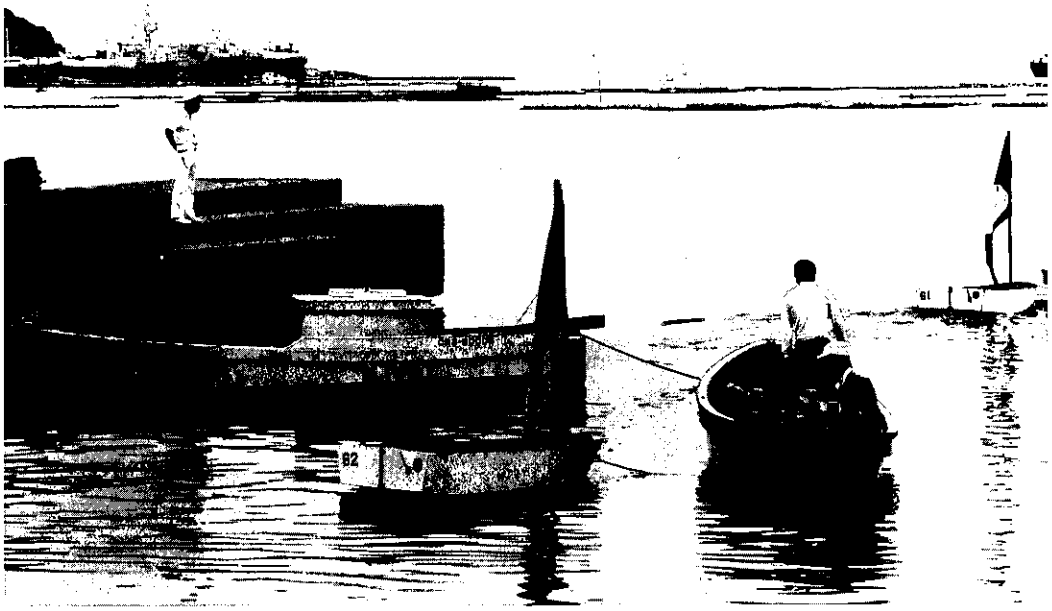
●昭和４９年国体終了の翌年、組織をさらに充実させた。各専門の分野の８委員会が、機能を発揮する処にあるが、全国的に注目を集めた。

総務委員長……森田芳樹　副：師田充夫
競艇委員長……小川勝　副：中村克重
競技委員長……富田浩之　副：大原末光
審判委員長……前田彰一　副：小磯和彦
選手強化委員長……斉藤威　副：長沢寿一
ハーバー委員長……佐藤正直　副：山口正則
安全普及委員長……堀江忠寿　副：桑田克典
バッジテスト……千葉滋胤　副：桜井紀史

副会長：清川彰、斉藤明、三浦浩。
顧問：森田勝彦、大浜博利、山本佐次郎、鈴木義久、中野操一、川名勘之助。
◎三浦副会長、日ヨ理事に就任。

●昭和５１年には「少年ヨット委員会」を設け９委員会構成で運営する。

3.千葉理事長時代
昭和52～54年
（1977～79）



●昭和５２年２月、吉原理事長日ヨ理事に就任、理事長に千葉滋胤が就任する。
副会長：清川彰、三浦浩、吉原章雄、斉藤明。
総 務 委 員 長……師田充夫
競 艇 委 員 長……小川勝
副委員長：中村克重
競 技 委 員 長……富田浩之
副委員長：大原末光
審 判 委 員 長……前田彰一
副委員長：小磯和彦
選手強化委員長……斉藤威
ヘッドコーチ：吉田豊　長沢寿一
ハーバー委員長……佐藤正直
副委員長：山口正則
安全普及委員長……堀江忠寿
副委員長：桑田克典
少年ヨット委員長…岡本正晴
副委員長：長谷川泰之助
バッジテスト……森田芳樹
副委員長：桜井紀史
元山登男
◎川名会長、清川副会長は県体協３０周年功労の表彰を受ける。
●昭和５３年４月、県立磯辺高校ヨット部創立。
１０月稲毛国体に向けて体制強化のため、国体委員会を設け競技運営の万全を期した。
総務：師田充夫、飯田秀夫、高橋一夫、前川清。
渉外：桜井紀史、國府田由隆、大嶋智一、
大原末光、斉藤威、塚田智之、吉田茂。
競艇：小川勝、大島博。
発着：神田章。
計測：池田盛一、中山和正。
記録：大森保次郎。
水路（含救助）：堀江忠寿。
運搬（含観覧艇）：元山登雄。
通信：桑田克則、加藤哲夫。
審判、ジュリーオフィス：前田彰一。
通報（対選手）：香取篤、占部裕二。
●昭和54年、桜井、堀江、森田の３副理事長配す。
会長推薦理事：坂田利夫、大原末光、桑田克則。
顧問：森田勝彦、山本佐次郎。鈴木義久、中野操一、大浜博利、鈴木正彦。
仮の稲毛で６月１５日第６回千葉県オープン。
８月２３～２４日、１都１０県対抗ヨットレース。
１０月４～７日、国体リハーサル大会の第６回全日本自治体職員ヨット競技を主管したが仮設プレハブの施設、本部宿舎は「だいご旅館」であった。

4.森田理事長時代
昭和55年
(1980)

第35回国民体育大会夏季大会
ヨット競技会

●昭和５５年、千葉理事長多忙のため森田芳樹が理事長に就任。稲毛国体本番の年、下図のように前年の１２委員会を継承した組織で運営。
副理事長：桜井、堀江。
９月５～１０日、第３５回国体。仮設の稲毛ヨットハーバーで開催。日ヨ公認マークの帽子（１号）とTシャツがユニフォーム。天皇杯、皇后杯とも２位の高成績を獲得。しかし、南風のハーバーの弱点が６日に露見、救助作業は夜まで続いたが、人命は守られた。開港までに貴重な体験を味わった。

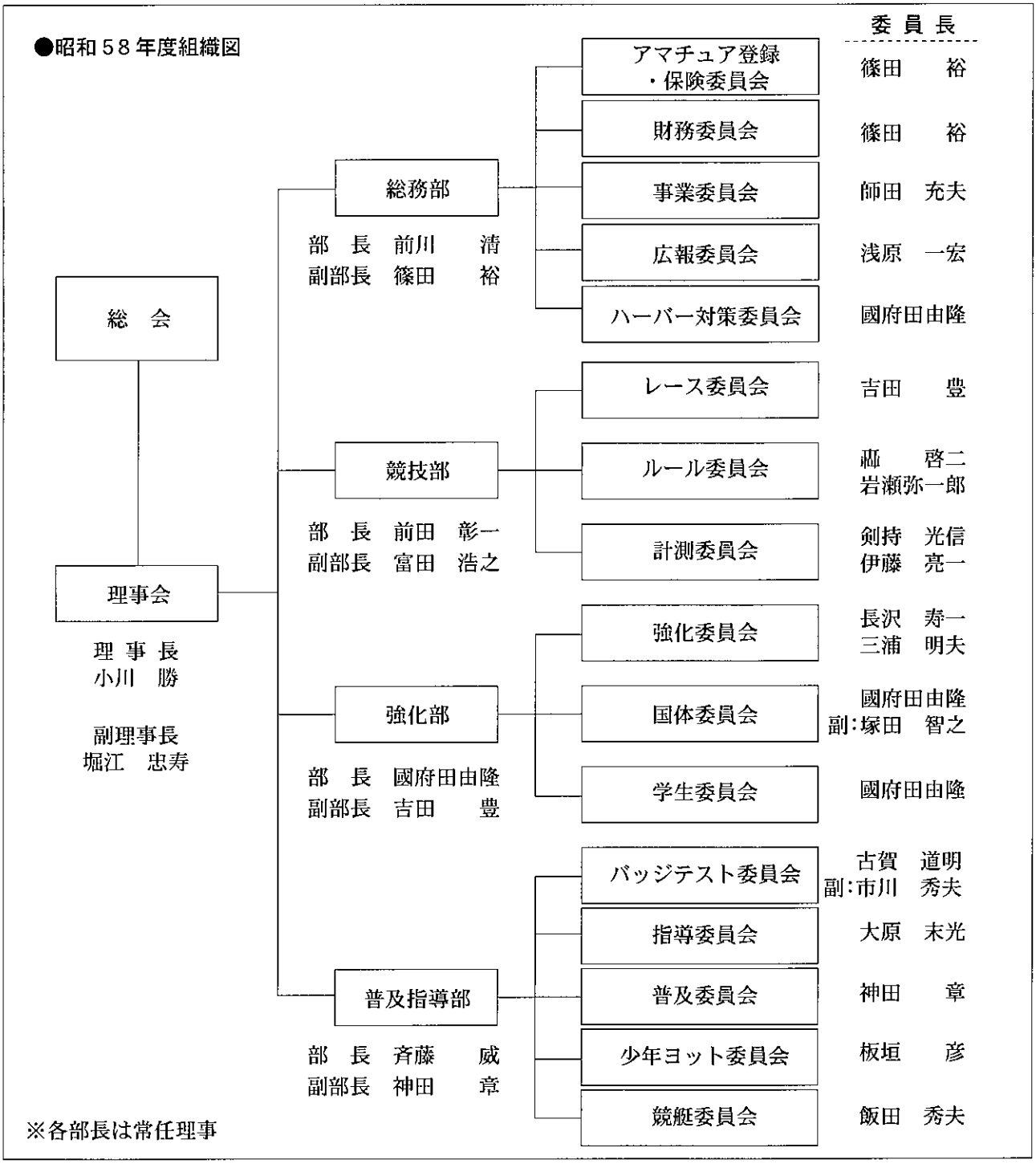
委員長：理事	昭和５４年	昭和５５年
総務	師田　充夫	留任
競艇	小川　勝	留任
競技	富田　浩之	留任
ルール	前田　彰一	留任
普及	神田　章	留任
計測	池田　盛一	留任
ハーバー	國府田由隆	留任
安全	堀江　忠寿	大原　末光
選手強化	斎藤　威	塚田　智之
バッジテスト	森田　芳樹	斎藤　威
学生ヨット	篠田　裕	田村　鉄雄
少年ヨット	堀江　忠寿	長谷川泰之助
会計監事	斎藤　正敏	

5.小川理事長時代
昭和56～平成6年
(1980～94)

●昭和５６年４月総会。安房水出身の小川勝を理事長に選出。組織改編、１３委員会と分科会を設置した。これは国体運営の実感を導入したものであり、稲毛ヨットハーバーの開港に備えたものであった。国体開催により日ヨの会員登録が６４３名に達し評議員が３名になり全国第３位になる。県連加盟団体が３１に増加、総加盟人員６６７名、登録艇数２６５艇。
総務委員長：前川清。分科会：財務・高橋一夫。
会計・篠田裕。渉外・阿部雅見。
事業・師田充夫。
広報委員長：浅原一宏
競技委員長：富田浩之
ルール委員長：前田彰一
競艇委員長：中村克重
選手強化委員長：吉田豊
安全委員長：大原末光
計測委員長：池田盛一
普及委員長：神田章
ハーバー委員長：國府田由隆
バッジテスト委員長：斎藤威
学生ヨット委員長：佐藤正直
少年ヨット委員長：大嶋智一、分科会：塚田智之
顧問：三浦浩、山本佐次郎、鈴木義久、中野操一、
大浜博利、鈴木雅彦、森田芳樹、堀江忠寿。
会計監事：桜井紀史。
活動の拠点は未だ館山であったが、各市体育大会や県民体育ヨット競技が盛んになった。
●昭和５７年４月、委員会３増と名称変更。分科会の一部を委員会に設置。１６委員会で運営
１．アマチュア登録・保険
２．財務

川名会長葬儀
58年7月15日館山市民センター。

●昭和５８年度組織図



※各部長は常任理事

３．事業	１０．指導
４．広報	１１．計測
５．レース	１２．普及
６．ルール	１３．ハーバー対策
７．競艇	１４．バッジテスト
８．安全	１５．学生
９．強化	１６．少年

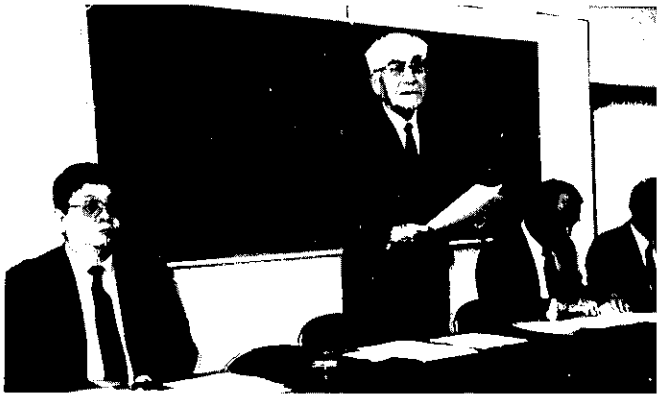
７月４日第１回若潮ヨットレース主催、県体協後援（外房勝浦湾でのオープンレース）。８月３１日川名勘之助顧問逝去（６５歳）。９月稲毛ヨットハーバー陸置募集開始。運用に関して全面的に協力、安全面から帆走技術認定の検定や事業に協力。

●昭和５８年４月、小川理事長再任。組織を４専門部、１６委員会に大きく改組。強化部担当副理事長を新設、堀江忠寿就任。組織図を左記に記載するが「稲毛時代」に相応しい総合力を持ったものであった。

６月、千葉市へ開港記念に完全艤装の海王丸ライフボート１隻を贈呈。７月６日川名会長逝去。告別式には、日ヨ最高顧問小沢吉太郎他、関東のヨットマンが参集。

◎９月２０日清川副会長逝去、日ヨより功労賞が贈られた。・県体協功労賞を山本佐次郎顧問が、優秀選手表彰に磯辺高校（高校総体FJ級優勝）。東京国体：天皇杯３位、皇后杯２位の高成績。

昭和５９年川名会長から松戸会長へ



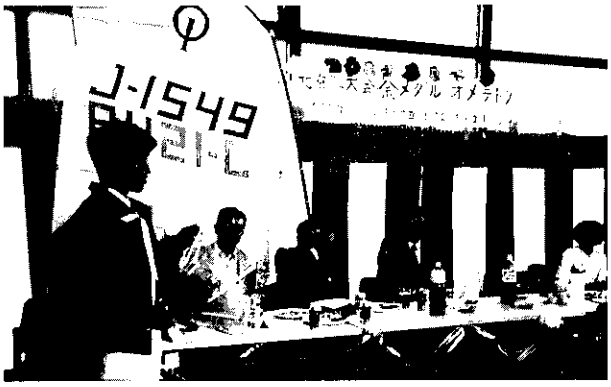
●昭和５９年。川名会長から松戸節三会長へ。少年委員会：県内少年ヨット活動調査。県連スナイプ１５艇整備、「はまゆうI」整備更新、IIを購入。芦屋国体：皇后杯３位。

●昭和６０年４月副理事長に前川就任、堀江と２人体制。１１月１～４日稲毛、スナイプ級３８回全日本、２０回女子全日本大会を主管。１２月、◎前川副理事長、日ヨ「Yacht」編集長に就任。（７年間）日ヨ功労賞に斉藤明、優秀選手賞に磯辺高校（全日本FJ級優勝・山中湖）受賞。●昭和６１年７月３１～８月４日稲毛、FJ級第４回全日本大会を主管、磯辺高校、小寺・野口組優勝。●昭和６２年、４部１６委員会継続。事務局を磯辺高校に置く。４月◎前田競技部長、日ヨ最高審判事務局長に就任。日ヨ功労賞に三浦顧問受賞、優秀選手賞に勝浦高校、長谷川・島津組受賞（境港FJワールド優勝）。沖縄国体：天皇杯６位、皇后杯２位。●昭和６３年。競技部、PC活用に関し調査。２巡目宮津国体：天皇杯３位、皇后杯２位。全日本FJ級、江差で磯辺高校、三浦・松倉組優勝（磯辺高校３年連続４回目）。

●平成元年。◎吉原副会長、日ヨ理事長に就任。初の冠大会sunwave CUP’８９８月１７～２１日稲毛、全日本のFJ級、女子S級jrS級大会。FJ級は磯辺高校、高木・浅利組優勝。一方、オランダFJワールドでは磯辺OBの葛西・土屋組が銀メダル。第一回教職員ヨットスクール７月と８月に実施、１３名参加。１１月８～１２日稲毛・スナイプ級全日本を主官。前年度優勝の県連チーム、神作・巽組も参加。江差国体：天皇杯３位。

●平成２年。◎日ヨ理事長に石津顧問就任、理事に前川副理事長就任。４月FJワールド千葉開催要請に６月受諾。８月１７～２１日稲毛・３回目の

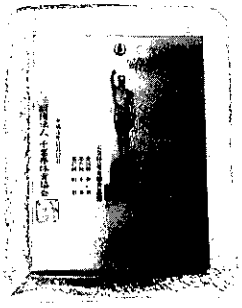
6.國府田理事長時代
平成７年～
（1995～）



FJ級全日本を主管、能登・橘組（磯辺高）３位。福岡国体：皇后杯６位。９月北京アジア大会OP級、関一人金メダル（磯辺一中、日ヨ優秀選手賞受賞。）事務所を国府田宅に移す。

●平成３年。７月２８日イタリア・FJワールドで葛西・小杉組、銀メダル。石川国体：不振。

●平成４年。顧問に種田一郎委嘱。山形国体：天皇杯優勝１９年ぶり３回目、県体協から特別表彰。



●平成５年７月２２～２８日、稲毛で'９３FJ級世界選手権開催。県連にとって国体２回、全日本５回の運営実績をベースに編成。バブルの崩壊による規模縮小、海域確保、要員の調整と運営委員会を設置し展開。ワールドは単に競技だけのものではない。海外７か国２５チーム国内１１１、多くのボランティア、関係者との交流の場でもある。交流の立役者、通訳・深川稔さんに感謝。優勝は県連チーム高木克也・浅利桂一組。

●平成６年３月国体成績ソフト開発に対し、故・富田浩之部長に日ヨから感謝状。愛知国体：昨年の香川とともに不振。１０月３～１２日広島アジア大会、４７０級女子で磯辺OBの葛西・尾島組銀メダル。

◎日ヨ功労賞に松戸会長、初代理事・鵜飼恒受賞。

●平成７年４月、第６代理事長に國府田由隆を選出。副理事長に斎藤威を任命、堀江、前川と３人の副理事長による担務制で運営。３部門１４委員会を継承。特別小委員会として女性・高齢者・身障者の３対策委員会を設置した。◎日ヨ功労相賞に石津顧問、吉原副会長受賞。いわき国体：天皇杯２位、皇后杯４位（少年男女FJ級優勝）。

●平成８年。レース委員会：成績計算ソフト（YARROW）を新ルールに合わせ作成に入る。広島国体：天皇杯８位、皇后杯１２位。◎日ヨ功労賞に千葉副会長受賞。県体協功労者に大浜顧問受賞。

●平成９年、レース委員長会にて作成中の計算ソフト、全国頒布に踏み切る。全国１４県連・２艇種別団体より購入希望あり。日ヨ会員からの増加を図るべき具体策を立て、新たな申し込み方法に替え成果をあげる。７００余名の会員登録完了、全国第三位。

第５２回なみはや国体：成年男子ボートセーリング級及び少年少女FJ級の活躍で天皇杯８位となる。この年、日本FJ協会の派遣で'９８FJ級ヨット世界選手権大会日本代表選手に磯辺高校女子４名２チームが選ばれアメリカ・サンフランシスコに派遣され、レディース優勝、総合５位の成績を収める。

●平成１０年、体制継続。この年の課題である女性委員会主催の「第一回女性のためのヨット教室」を幕張新都心のホテル宿泊で開催、好評を得る。高齢者対象のヨット教室は、定例開催のヨット教室の参加者に高齢者が多く参加していることから単独事業とはせず支援する形をとる。

第５３回神奈川ゆめ国体：大会史上初の二地区（葉山市：葉山ヨットハーバー・藤沢市：江ノ島ヨットハーバー）で開催。葉山地区で実施した成年女

松戸杯をご遺族よりいただく。

子種別で、５位入賞。特に、成年女子スナイプ級に出場した関美恵子（旧姓葛西美恵子）の久々のレース復帰で大活躍、その存在が光った。７月に体調を崩し入院加療中の松戸会長、１０月にめでたく退院、自宅療養に入る。

●平成１１年２月、かねてより療養加療中の松戸節三会長が急逝、本連盟総力をあげて葬儀に取り組む。松戸会長は、故川名正義前会長の意志により、昭和５５年に会長にご就任していただき、以来１９年間、本連盟を支えていただいた。心から感謝しご冥福を祈る。３月、千葉県体育協会及び関係団体の合同葬儀の準備委員会設立、本連盟より吉原・千葉両副会長が委員となる。４月２９日、千葉県総合運動場体育館にて合同葬「松戸節三先生とのお別れ会」開催。（財）稲毛ヨットハーバーが、（財）千葉市スポーツ振興財団の一事業所に、稲毛事業所稲毛ヨットハーバーと呼ぶ。

４月４日総会。新会長に荒川昇千葉県体育協会専務理事に就任していただく。名称を千葉県セーリング連盟に変更、新たな歴史に向けてスタート、組織は一部変更するが継続とする。ここ２、３年積み残したことを一年かけて処理することを活動目標とする。併せて、本連盟創立５０周年記念式典について検討、承認される。７月、１９９９FJ級ヨット世界選手権大会に本県より日本選手団総監督として国府田理事長が、選手に磯辺高校より男女４名が選考されイタリア・ポルトサンジョルジョに派遣される。IFJOより国府田が表彰される。第５４回くまもと国体：大会史上初の大荒れ、各種別ともに二レースで終了。女子スナイプ級で優勝する。１１月２０日、ザ・マンハッタンホテルにて千葉県セーリング連盟創立５０周年記念式典を盛大に挙行、４００名を越す出席者。

3月27、28日関東ヨット協会総会が千葉で。海上より海ホタルを見学。

7月3日会長就任披露。

創立50周年記念式典スナップ

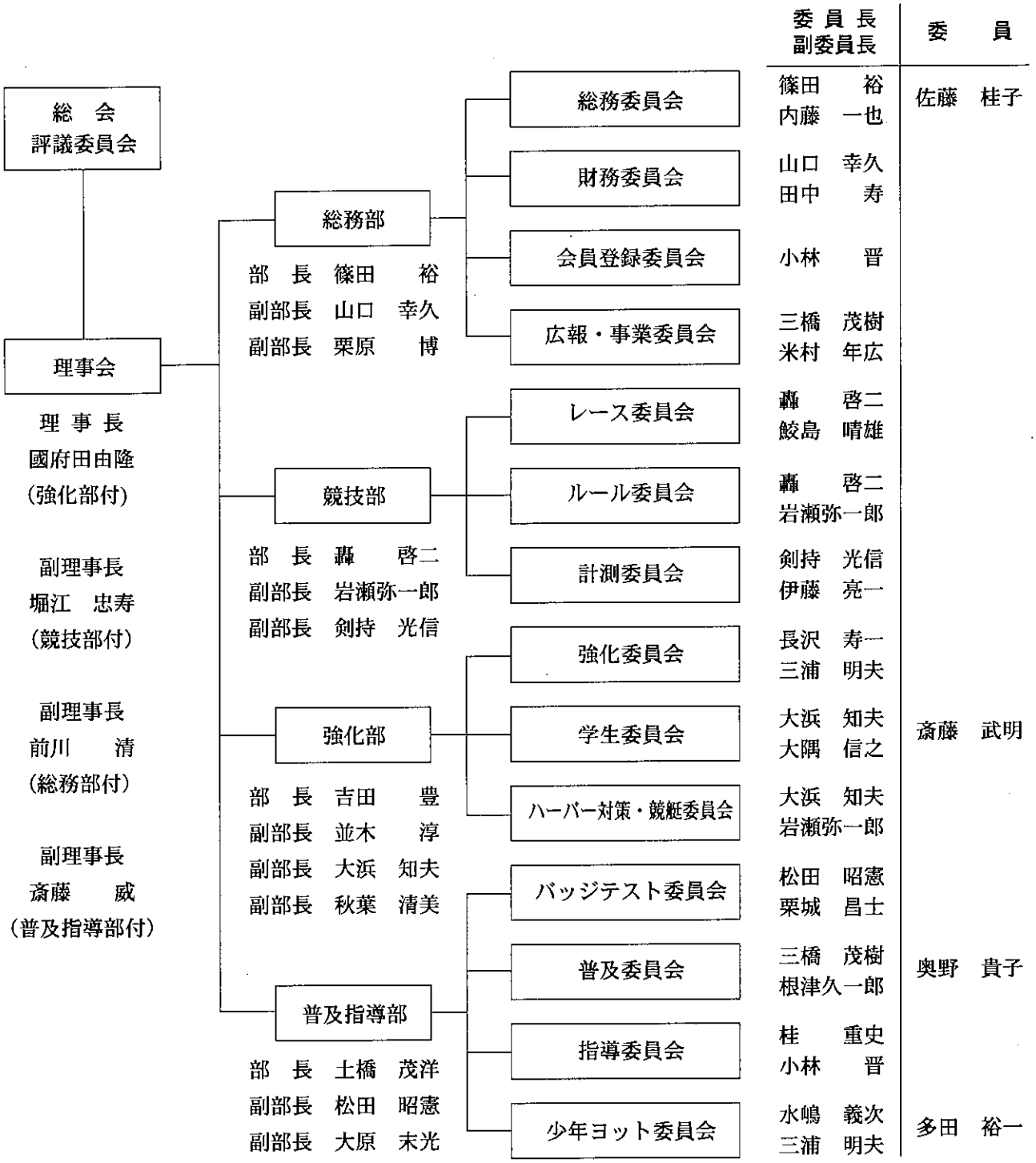
C S F

C S F

平成11年度　千葉県セーリング連盟　役員

会　長	荒川　昇	顧　問	鈴木　義久	監　事	桜井　紀史	常任理事	篠田　裕
副会長	吉原　章雅		中野　操一		池田　盛一		山口　幸久
	千葉　滋胤		三浦　浩				栗原　博
	小川　勝		森田　芳樹	理事長	國府田由隆		轟　啓二
顧　問	石津　昭三		山本佐次郎	副理事長	堀江　忠寿		岩瀬弥一郎
	大浜　博利		種田　一郎		前川　清		剣持　光信
	鈴木　雅彦		綿貫　弘一		斉藤　威		吉田　豊

平成11年度　組織図



常任理事 並木　淳	理　事 内藤　一也	理　事 鮫島　晴雄	理　事 鶴岡　昌史
大浜　知夫	佐藤　桂子	伊藤　亮一	根津久一郎
秋葉　清美	田中　寿	長沢　寿一	奥野　貴子
土橋　茂洋	小林　晋	三浦　明夫	桂　重史
松田　昭憲	三橋　茂樹	大隈　重之	水嶋　義次
大原　末光	米村　年宏	斉藤　武明	新保　栄一

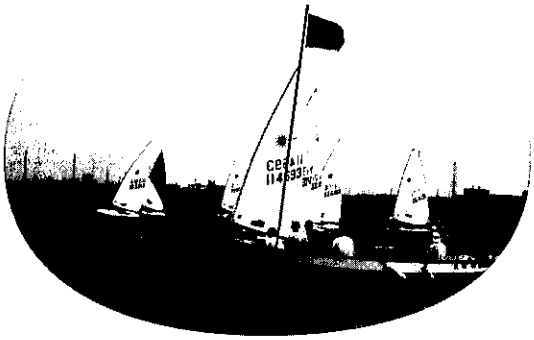
平成11年度　加盟団体

	所属団体	氏　名
●実業団のヨット部	川崎製鐵ヨット部	桂　重史
	千葉銀行行友会ヨットクラブ	山口　幸久
	京葉銀行ヨット部	三橋　茂樹
	東洋エンジニアリングセーリングクラブ	岩瀬弥一郎
	三井造船千葉ヨット部	松田　昭憲
	千葉県庁ヨット部	剣持　光信
	千葉日産ヨットクラブ	三橋　憲男
	三井建設ヨット部	米村　年宏
	TACTヨット部	内田　次郎
●クラブの団体	ほたて会千葉	斉藤　威
	千葉ヨットクラブ	土橋　茂洋
	ヨットエイドジャパン千葉	手島美恵子
	千葉ヨットビルダースクラブ	宮路　大作
	シーマンセーリングクラブ	吉本　一明
	ドルフィンクルージングクラブ	茂田　佳博
	ドルフィンセーリングクラブ	小川　勝
	稲毛セーリングクラブ	長沢　寿一
	磯辺ヨットクラブ	三浦　明夫
●市町村単位の団体	千葉市役所ヨットクラブ	小林　晋
	銚子ヨットクラブ	渡辺　富夫
	市原ヨットクラブ	岡本　啓介
	富津市ヨットクラブ	大山　泰弘
●大学、高校、中学の団体	千葉大学ヨット部	土倉　健太
	千葉大学医学部ヨット部	篠崎広一郎
	千葉工業大学ヨット部	篠田　裕
	千葉工業大学ウィンドサーフィン部	秋葉　清美
	東京歯科大学ヨット部	難波　徹
	明海大学体育会ヨット部	杉山　徹宗
	放送大学Yachting研究会	伊藤　健一
	東邦大学医学部ヨット部	香取　勧
	東邦大学理学部ヨット部	西岡　裕司
	順天堂大学医学部ヨット部	松澤　宏典
	安房水産高等学校ヨット部	高石　信
	勝浦高等学校ヨット部	斉藤　武明
	銚子水産高等学校ヨット部	三浦　弘行
	磯辺高校ヨット部	大浜　知夫
	磯辺第一中学校ヨット部	水嶋　義次

普及指導部[活動報告]

副理事長：斉藤威

1.レースは楽しい



●千葉県オープンヨットレース

昭和４８年若潮国体が終わり、昭和４９年から県民体育大会でもヨット競技が始まり、そして昭和５０年からは千葉県オープンヨットレースが始まった。国体選手から県内の実業団チームの選手、大学ヨット部、高校ヨット部、そして一般のセーラーまで幅広く参加者を募り、その年の千葉県一の選手を決めるレースという位置付けのレースで、館山で第一回が開催された。レース艇は多艇種にまたがり、成績は当時日本ヨット協会で採用し始めたヤードスティックナンバー(ハンディキャップ)を用い争われた。第一回の優勝は国体参加常連のスナイプの吉田豊選手であった。

以後レースは館山で開催されてきたが、稲毛ヨットハーバーが開設されると同時に千葉に移り、レース日程も６月第二週の土曜日曜２日間とし、土曜日はチャンピオンシップ大会でスナイプ、４７０、ＦＪ、レーザー、シーホッパー、国際１４Ｆなどが競い合いチャンピオンを決定することとし、日曜日はＹ１５、シーラーク、シカーラ、ミラー、トッパー、ＯＰなども加わりレクリエーションレースを楽しむことができる企画となった。

艇の性能、乗り手の技術の向上、ヤードスティックの固定や変更、艇の特性に合った風域などにより優勝艇は毎年変わることとなり、今までに優勝した艇種は、国際１４Ｆ、テーザー、スナイプ、レーザー、ＦＪ、Ｙ１５、シカーラ、ミラー、トッパー、ＯＰで４７０はハンディが大きくなかなか優勝できないようである。

このレースは木更津のセントラルボート、千葉の雄和など県内のヨット関係の会社などから賞品の提供もいただき、また一番大きくは日本ヨット協会を通じていただいている日本財団(旧日本船舶振興会)からの補助金である。これらにより大会の運営費がまかなわれ、参加者からはわずかの参加費をいただくだけですんでいることもあり、かつては１２０艇にも及ぶレースが行われたこともあった。現在はその半数、５０から６０艇の参加となっている。今後はこの伝統あるレースへの参加者が増えることを期待しているが、以下のとおりこのレースから発展してきた県内の各チャンピオンレース、レクリエーションレースも多い。

●チャンピオンレース

千葉県選手権

１１月に行われるシーズン最後のレースで、艇種別のチャンピオンを決めるレース。 今年で１４回を迎える。

賞品は『家庭を、特に奥様や恋人をほったらかしにしてヨット三昧だった』ことをお詫びして、衣類、靴、バッグ、装飾小物など、女性物としているが、エプロンは『家で飯作れ』と言わんばかりで、お渡しするときに要注意である。

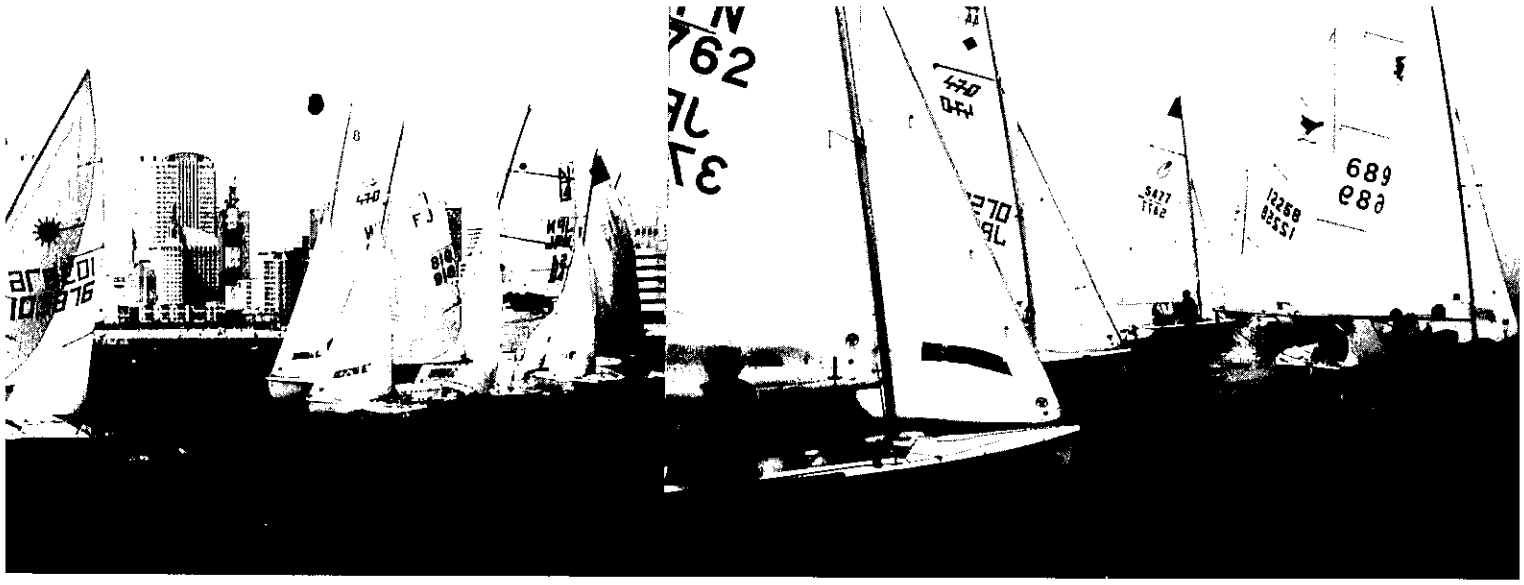
シングルハンダー選手権

７月に行われる主にレーザー、シーホッパーを中心とした一人乗りヨットの選手権大会。

国体の参加種目にシングルハンダー級がとり入れられた年から(二順目の京都国体から成年二部の種目に採用された)始まったレースで、国体選手選考の対象となることもある。 また、東日本や関東、東京湾のレーザー、シーホッパーの大会を兼ねて行われることもある。 今年で１２回を迎える。

ボードセーリングレース

稲毛ヨットハーバーのとなりの海岸は、人工海浜「検



'98オータムレガッタ・スタート　　'98.6.14　大雨の中の千葉県オープンヨットレース

見川の浜」となっており、千葉のボードセーラーのメッカである。千葉工大のクラブなどまとまった団体の活動も行われていることから、当連盟にも加盟している。

水域選手権は千葉県の国体選手選考会ともなっており、6月、7月にレースが行われている。

１０月にもレースが行われ、チャンピオンシップの表彰と初心者の参加者の賞も用意されている。

７月、１０月のレースは稲毛ヨットハーバー主催の記念日レースともなっている。

国体選手の成年男子松尾選手(元日本チャンピオン)滝島選手(大阪国体３位)成年女子松下選手(神奈川国体６位)などがこのレースで選ばれている。

稲毛Ｗｅｅｋ

五月の連休は４日が休日となったことから、この３連休を利用し、本格的チャンピオンシップを競う大会を固定化すべく始まった。

艇種はスナイプ、国際１４Ｆ、シングルハンダー(レーザー、シーホッパー)を中心に、ＦＪ、４７０、テーザーを加えたレースで、スナイプは関東選手権出場権が取得できる大会としての位置付けとなっている。

'99年の今年で５回を迎えたこの大会は、昨年は日本ユースの大会と、今年は東日本ＦＪ選手権をかねた大会として行われた。

●レクリエーションレース

スプリングレガッタ

４月に行われるシーズン最初のレースで、まだ水温は２０度以下ではあるが、もうヨットのシーズンが待ちきれないレース好きの人たちが集まる。

県連主催のレースはいずれも安全を期し保険に入るとのことで、日本セーリング連盟の会員登録をしていただいているが、このレース参加者は年度当初でもあり、会員登録をしていただくだけでエントリーフィーはもらわないこととしている。

(通常のレースは成年スループ３千円、シングル２千円、大学生千円、中高校生五百円)

なお、賞品は春一番のレースということで、草花の種や苗、観葉植物としている。

オータムレガッタ

夏が過ぎようやく涼しくなった秋風の元、９月半ばに行われるレースで、いわば海の秋の運動会。一夏練習を積んだ一般セーラーの腕の見せ所でもある。

国体を終えたばかりの選手などは一休み、大学生はインカレ、高校生は３年生が引退し２年生以下の新人が参加。

食欲の秋、文化の秋、ということで賞品は食べ物や手作りの陶芸品、工芸品(時々知能障害を持つ子供たちの施設で作っているケーキやクッキー、お皿や工芸品を参加賞にしている)などとしている。

スプリングレガッタとともに１７回を迎えた。

グリーンアンド＆フラワーカップ

稲毛ヨットハーバーが主催、千葉県連及び千葉市のセーリング協会が主管するお楽しみレース。賞品もふんだんで、参加料も無料。

レースの名前どおり４月２９日「みどりの日」に行われる記念日レースで、国民の祝日になった年から行われている。みどりや草花を愛し、そして海をきれいにの気持ちを大切にしようの掛け声で始まったレースである。

グリーンシンフォニーレース

１０月は都市緑化月間。「街にみどりを、窓辺に花を」の合言葉のもとで行われた「全国都市緑化ちばフェア」

'98.7.20海の日レース

を記念して行われているレース。
これもヨットハーバー主催の記念日レースで、１０月１０日「体育の日」に行われている。
以前は体育の日の記念日レースであった。

海の日レース

同じくヨットハーバー主催の記念日レースで、７月２０日「海の日」に行われ、もちろん国民の祝日になった年から行われているレースである。
梅雨明け、夏休みと同時に行われるレースでハーバー利用者がこぞってこのレースに参加し、最近では最も参加者の多いレースである。

●レースを運営して２５年

レースの準備は数日前からレースの賞品を用意することから始まる。たとえ安くてももらって役に立つ、喜んでもらえる賞品を、と考え考えデパートやホームセンター、ディスカウントショップに。京葉銀行の三橋さんにその役をお願いするまで、本当にいろんな店でいろんな物を仕入れた。

そしてレースの当日。ハーバーに早めに行き準備開始。受付の机、いすのセット。参加申し込み用紙、記録用紙、帆走指示書のコピー。レース運営用具、マークの確認、準備。運営艇の確認。そのうち連盟の役員が集まり始め、各ポジションの割り付け、参加者の受付が始まる。

後はしばらくみんなにお仕事をしていただきながら今日のレースの運営イメージをまとめるのが私の仕事。風向きと風の強さ、波の状況、参加艇数を考えレース海域とレースコースの長さを決めるのである。タイムキープも重要な仕事。開会式は１０時。第一レースは１１時。第二レースは１２時３０分。１時半レース終了。３時閉会式をしっかりイメージする。ここでキーポイントとなるのがレース運営と記録のまとめであるが、千葉県連では十数年来パソコンを使って記録をつけている。数年前にお亡くなりになった富田浩之氏（元東洋エンジニアリングヨット部）の開発されたソフトは、以後会社の後輩が改良に改良を重ね、今では「ＹＡＲＯＷ」というヨットレースの記録ソフトを制作、販売するまでに至っている。

開会式の後は海上本部を担当（陸上本部は国府田理事長）。本部船の「はまゆう」は元安房水産高校の実習船で、船も大きく操船できる人が限られているので（１級小型船舶操縦士の免許が必要）いつもこの船の船長さん。ここと決めたところにアンカーリングしたら、後は各マークボートがコースを設定。朝のイメージどおりのコースができているかの確認をするわけだが、ここ十数年は何も言うことは無くなった。私もそうだが、県連のみんなも稲毛のこの海で世界選手権、国体、全日本選手権の運営を経験してきたのだから。

レースはスタートの時がレーサーも運営も一番緊張し、また緊張しなければならないときである。この緊張が、「ドキドキ」が最高に楽しいのである。時にはフラッグの掲揚ミス、号砲の発砲ミスなどがあれば大きな声を出すこともある。もちろんそうならないよう何度も何度も大きな声で手順を確認するのであるが、決して怒っているのではなく所謂『気合』を入れて緊張を持続し、指揮、連絡を徹底しているのである。と、運営のお手伝いの高校生には言っているのだが。

そして誇らしげにフィニッシュするトップ艇の顔がすばらしく、２番艇の悔しい顔、以下レースを戦い終えたどの艇の顔もすがすがしく、この皆の顔を見るのが楽しくてレース運営が止められないのである。いつまでも高校生とマークを打ち、旗を揚げ、鉄砲を鳴らし、「本部船のおっさん」を続けるのが私の願いである。

2.ヨット教室の歴史

女性ヨット教室

'97年ヨット教室　プラモデルを使ってヨットの構造の講義

●ヨット教室のはじまり

現在行われている稲毛ヨットハーバーでの初心者を対象としたヨット教室は、今をさかのぼること４７年前、昭和２７年「千葉市ヨット協会」（会長和田平武氏：千葉市和田病院）が誕生したときから始まる。当時千葉市の寒川でヨットを楽しんでいた「千葉医科大学ヨット部」は中野操一氏（現在市原市ヨット協会会長、県連顧問）が主将となり、これを発展的解消。新たに他の学部、看護学校を加え全学的な「千葉大学ヨット部」が誕生し、その部員が中心となってインストラクターを行い、年１回ではあったが市民ヨット教室が誕生したのである。

その後昭和２９年、道路（橋梁）の新設に伴い寒川の係船場所からは出廷できなくなるとのことから、稲毛海岸にヨットハーバーを建設していただくよう千葉市ヨット協会の名において、県、市当局に要請し同年７月３０日にヨットハーバーが完成したのである。同じくヨット教室も以後は稲毛で開催されることとなった。

このハーバーは埋立地の前面に海防艦「こじま」を海洋公民館として固定（座礁）し、その脇を浚渫しポンドを作ってハーバーとしたもので、ヨット教室は公民館事業として開催され、千葉市ヨット協会がこの事業を受託していた。時には宿泊施設（簡易ベッドで所謂蚕棚と呼ばれるもの）のある「こじま」で泊まり込みながらのヨット教室が行われた。

また、このハーバーには護岸の内側に艇庫があり、この前庭では、やはり海洋公民館事業である市民ヨット制作教室が吉原章雅、千葉滋胤両氏（県連副会長）の提唱で昭和４４年より始まった。後年、この教室の卒業生が集まって現在の千葉ヨットビルダーズクラブが誕生したのである。

しかし、このヨットハーバーも第二次の埋め立てにより昭和４５年からは完全に使えなくなり、教室の会場は館山に移った。国体を前にした忙しい時期ではあったが、各実業団ヨット部の部員が参加者とともに北条海岸の「松善」に泊まり込み、ヨット教室を行ったのである。昭和４８年の国体後は県連所有となったスナイプを使っての教室となり、艇数も増えたことから教室の規模も大きくなり、さながら県連、市協会、実業団の夏合宿といったところで、夜はいつも大宴会であった。インストラクターは全くのボランティアであったが、事業受託者の千葉市ヨット協会には教室開催の必要用具として、ライフジャケットなどが支給され、協会運営の役にたつこととなった。

●ヨット学校に

そして昭和５７年、再び稲毛ヨットハーバーが開設するや、以後のヨット教室は単なるヨットの楽しさを味わっていただくというような教室ではなく、ハーバーの利用資格取得が目的の自動車学校ならぬ「ヨット学校」となったのである。

内容はハーバーの利用資格である「日本セーリング連盟バッジテスト５級合格者程度の操船技術を持つ人」を目指すもので、金曜日から日曜日までみっちり学科、実技を教える教室となった。（日本セーリング連盟会員登録料（保険）、バッジテス受験料、艇の借り上げ料、昼食代などを含む参加料は２万５千円。Ｙ１５で４人１班。４月、５月、６月、７月、１０月の年５回、各４０人づつ募集）一時は募集人数の２倍以上もの応募があり、往復はがきによる受付、抽選となった。そして出来る限り補欠当選を選び、キャンセルが出ても40人の

枠いっぱいの受講生を受け入れできるようにした。

また、複数人数での申し込みを優先した。それは以後の活動が仲間同士で出来るよう、艇の購入、陸置き、維持管理が共同で出来るようになるのではとの配慮からであった。いずれにしてもインストラクターを務める県連加盟団体の各実業団、クラブ、大学生クラブは、わずかのお手当てで年数回駆り出され、Ｙ１５とは言え危うく「沈」しそうになりながら、もどかしい思いをしながら今もなお生徒さんを指導するお手伝いが続いているのである。

このヨット教室はハーバー管理の財団（当時は海洋スポーツ協会）の『ヨットの普及、指導』事業を補完するものでもあり、募集の事務を手伝っていただいたり、金曜日は夜間９時まで（通常ハーバーは５時までしか利用できない）の講義のため職員１人、ガードマン１人が残って協力していただいているところである。このことは、自画自賛ではあるが、行政とボランティア団体が市民スポーツの振興に一致協力しているというモデルと言ってもいいのではないだろうか。（ヨット教室のほか、各種講習会、イベント、レース、障害者のヨットなどでも協力している）

現在は、まだまだ水が冷たくて参加者の少ない４月の教室を取りやめ、シーズン真っ盛りの８月、９月の教室を増やし、また「ヨット教室は卒業したもののまだまだ一人では不安で」と言う人のため、「ステップアップ」教室も開催している。何度も何度も「沈」をしながらシーホッパーに乗ってマークをまわる練習が続くのであるが、この教室の卒業生の何人かは自分で艇を購入し、レースに出始めるまでに至っている。

その他試験的に女性だけのヨット教室も開催している。幕張新都心のホテルに泊まりながら、「エステ」と「お食事」と「ヨット」を楽しむ、ちょっとリッチな気分になれるそんな企画であるのだが、今一歩参加者は少ないようである。

これら千葉県セーリング連盟のヨット教室のほか、ハーバー主催のジュニアヨット教室なども開催されているが、日本ヨット協会が外洋帆走協会と一緒になった現在、今後はクルーザーの教室なども開催することとしたいものであり、このためのシステム作りや指導者育成も重要な課題である。

３.県民体育大会のあゆみ

昭和４８年、館山で行われた若潮国体は２位神奈川を大きく引き離して天皇杯を獲得し大成功に終わった。このことは単なる結果というだけではなく、これに至る千葉県のヨット関係者の努力と結束の賜物であった。また、県内各郡市の選手育成にも大きくつながり、年一回県内各地の選手と役員が集まり、競い、語り合う、そのような場としての県民体育大会のヨット競技が始まったのである。

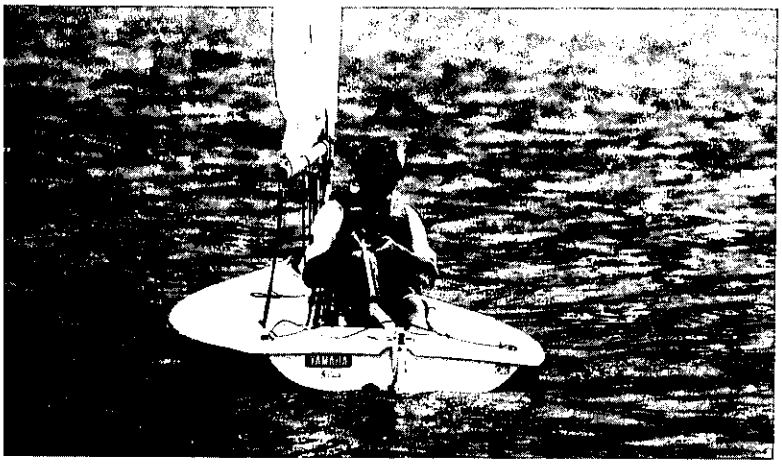
国体の翌年、昭和４９年にオープン競技としてスタートし、昭和５５年からは正式競技となった。当初は国体で使用したスナイプ級男女各１艇と男子シングルハンダー（シーホッパー、レーザー）で館山において行っていたが、昭和５３年からは稲毛に移り（当時まだハーバーは開設されていない）、艇種もシングルハンダーのみとし、参加者は男子３チーム、女子１チームで各郡市が戦うことに変わっていった。

以後レースは稲毛で行うことが続いたが、平成４年には銚子での開催となった。会場の松岸ヨットハーバーは利根川の河口付近で潮の流れも速く、地元銚子水産高校出身の竹腰選手の活躍で銚子市の優勝となった。レース前日は各地より集まり大宴会であった。また、大会当日は地元県会議員の安藤議員の挨拶、高橋市長の号砲でレースがスタートしたのが印象的で、当時建設が予定されていた名洗のヨットハーバーに地元の期待が寄せられていることも知ったのである。この銚子での開催にあたっては、当時銚子市ヨット協会の会長であった山本佐次郎県連顧問のご尽力によるものであり、永年の夢を叶えるものでもあった。

その後はまた稲毛での大会が続いているが、銚

平成4年の会場銚子市ヨットハーバー ▶

平成10年8月29日 選手として参加の国府田理事長 ▼



子大会以降は男子２、女子１チームにし、参加しやすくなるようにしている。いずれまた館山や，銚子、また勝浦、木更津その他の水域で県民体育大会を開催したいものである。

この県体は今年平成１１年で５２回大会を迎え、昭和４９年の２７回大会から２６回ヨット競技が行われた。男子は初めは吉田、土屋、吉本選手など安房水産高校出身の国体選手を擁する館山市が連覇、その後吉田、土屋選手が千葉に移籍、また川鉄の活躍もあって千葉市が連覇、１１年間は館山市と千葉市が優勝を競い合っていた。その後はやはり安房水産高校出身の国体選手である橋本、荒井、猪野選手を擁する安房郡が連勝するようになり、最近では勝浦高校出身の斉藤選手の活躍で鴨川市の優勝が目につくところである。船橋市も東洋エンジニアリングの武井、鈴木選手の活躍で優勝したこともあり、千葉市も磯辺高校出身で京葉銀行の福田、長谷川選手により、本年度は優勝している。その他、松戸市の長沢選手も上位入賞に貢献している。

一方なかなか選手が育たず、今でも現役の小川副会長(木更津市)，市川市の師田選手などは大会の有名選手である。以下は今までの各優勝チームである。

(男子)

館山市１０回、千葉市９回、安房郡３回、
鴨川市２回、銚子市１回、船橋市１回

女子も同様で初めは安房水産高校出身の国体選手であった野口選手が館山市の優勝に永年貢献し、連勝を続けた。その後は磯辺高校の千葉市、東洋エンジニアリング（光岡選手）の船橋市、勝浦高校の勝浦市、その他木更津市などの優勝となっている。以下は今までの各優勝チームである。

(女子)

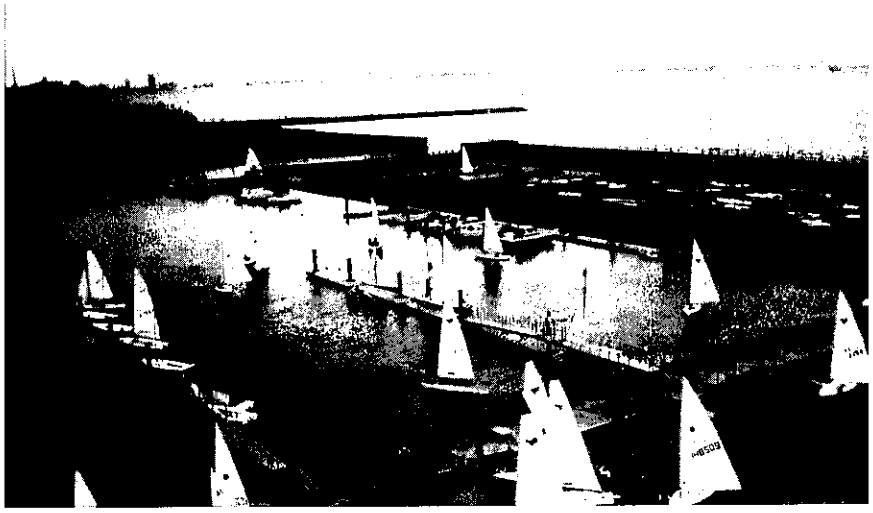
館山市８回、千葉市１３回、船橋市３回
木更津市２回、勝浦市１回

毎年本大会は８月末の土曜日に開催されることとなっており、今までは天候（台風）との戦いでもあった。館山、安房、銚子などは遠方より早朝に艇を運んでくることから、大会の開催決定判断は朝５時に決定し、各地からの問い合わせに対応することとしている。担当の私は稲毛のハーバーでの開催以来、この日は４時起き、５時前にはハーバーで待機の１７年間であった。毎年館山の吉本君から、５時ちょうどの問い合わせの電話がかってくる限りは、これからも朝早くハーバーに詰めるつもりである。

この県体は参加郡市が１０に満たない時から始まり、一時は１６郡市の参加を数えるまでになったが、その後はなかなか参加数が伸びず、本年１１年度も１３郡市にとどまっている。
何とか２０郡市の参加を期待したいものである。

競技部[活動報告]

前田彰一／轟 啓二／剣持光信



1．まえがき（轟記）

館山国体の翌年、昭和４９年に吉原理事長のもと、８つの委員会が設置され、その内の競技委員会と審判委員会が現競技部の前身といえる。

その後、昭和５３年に、千葉理事長のもと、稲毛国体に対応するために国体委員会が設けられ、その中に計測委員会が産声をあげ、翌年の昭和５４年からは常設の委員会となった。また、同時に審判委員会は、ルール委員会に、昭和５７年には競技委員会がレース委員会へと改名している。

昭和５８年小川理事長の時代に４専門部１６委員会に組織を改め、この時から現在と同じ組織体制となった。平成１１年度の組織では、競技部のもと、レース委員会、ルール委員会および計測委員会の３委員会が設置されている。

歴代の委員は次のとおりである。初代から競技部を強力に牽引してきた富田浩之部長が平成６年３月４日仕事の出張先で急逝された。また、後を引き継いだ前田彰一部長が平成７年３月、仕事の都合で長期の海外駐在となり（平成１１年帰国）、競技委員会およびルール委員会は２人の大黒柱を同時に失うこととなった。

昭和４９年	競技委員会	富田浩之委員長
		大原末光副委員長
	審判委員会	前田彰一委員長
		小磯和彦副委員長
昭和５４年	競技委員会	富田浩之委員長
	ルール委員会	前田彰一委員長
	計測委員会	池田盛一委員長
昭和５８年	競技部	富田部長　前田副部長
	レース委員会	富田浩之委員長
	ルール委員会	前田彰一委員長
	計測委員会	池田盛一委員長
平成１１年	競技部	轟部長　岩瀬副部長
		剣持副部長
	レース委員会	轟啓二委員長
		鮫島晴雄副委員長
	ルール委員会	轟啓二委員長
		岩瀬弥一郎副委員長
	計測委員会	剣持光信委員長
		伊藤亮一副委員長

2．各委員会

■レース委員会（轟記）

レース委員会は、國府田理事長により以下のように位置付けられている。

(1)世界選手権、全日本等の大会の企画、公示、運営
(2)連盟主催の普及レース、共催・後援のレース運営
(3)レース運営の研究、マニュアルの作成、委員の養成

故富田委員長の時代には、全日本クラスの大会から普及レースまで、ほとんどのレースのマ ーク打ちからレース記録までをレース委員会が運営していた。しかし、世代交代してから故富田委員長のヨットにかける熱意には遠く及ばず、結局レースの運営は國府田理事長、斉藤副理事長、普及指導部の方々が中心となって、実際に運用しているのが実情である。

上記（１)に該当する千葉県ヨット連盟が開催したビックレースとして、以下のレースが上げられる。

○昭和４８年　千葉国体（館山）
○昭和５４年　第６回全日本自治体職員ヨット競技（国体リハーサル）
○昭和５５年　栃木国体（稲毛）

○昭和６０年　スナイプ級第３８回全日本選手権、第２０回全日本女子選手権
○平成元年　Sunwave Cup'89全日本FJ級選手権
○同年　スナイプ全日本選手権
○平成５年　'９３ＦＪ級世界選手権

上記(３)を検討する内に、本格的なヨットレース記録管理ソフトウェアを作成することを作製することを計画し、平成１０年に完成した。
このソフトウェアの名称を「YARROW９５」とし、他の県連、各地のハーバーを対象として販売を行った。開発、販売の詳細は下記３項に示す。

■ルール委員会（前田、藤記）

日本ヨット協会（現日本セーリング連盟）が、昭和５６年新たに公認ナショナル・ジャッジ試験制度を設けることになった。中央でのルール講習会に加えて千葉県でも初のルール講習会を開催、その甲斐もあり年末の試験では千葉県より１３名が合格、正式にＡ級ジャッジに認定された。
翌５７年に県内でルール講習会と試験を行いＢ級ジャッジ２８名が認定された。その後、４年のルール改定毎に更新の講習会や試験が行われている。
昭和６１年の全日本ＦＪ級選手権大会、平成元年の SUNWAVE-CUP、平成５年のＦＪ級世界選手権大会など稲毛で開催されたビッグ・イベントでは、プロテスト委員会のメンバーとして県内の公認ジャッジが活躍している。その他、国体のプロテスト委員会メンバーとして、県連からも参加するようになった。現在、ルール委員会は、國府田理事長により次のように位置付けられている。
(1) ＩＳＡＦのルールの管理
(2) 世界選手権、全日本、普及レースの帆走指示書の作成、管理
(3) ヤードスティックナンバーの作成、管理
「ＹＡＲＲＯＷ９５」を作成したことにより、上記(１)～(３)のほとんどが解決されている。すなわち、YARROW９５は、The Racing Rules of SAILING for1997～2000に準拠しており、更にYARROW９５を作成する過程でルールの不明点について日本ヨット協会と協議し、その結果を盛り込んであるため、次のオリンピックの翌年(２００１年)までは「YARROW９５」が国際ルールといえる状況にある。
また、千葉県のヤードスティックナンバーも同様にYARROW９５のマスターデータとして一元管理されている。

日本セーリング連盟Ａ級ジャッジ資格保有者
(H11年7月現在保有者)

番号	氏名	所属団体
1	前田彰一	東洋エンジニアリング
2	三浦　浩	千葉県連顧問
3	小川　勝	千葉県連副会長
4	栗原　博	三菱電機
5	斎藤　威	千葉県連副理事長
6	篠田　裕	千葉工大
7	前川　清	千葉県連副理事長
8	伊藤亮一	千葉県庁
9	猪俣正人	京葉銀行

■計測委員会（剣持記）

当委員会は、昭和５３年千葉理事長の下、稲毛国体に向けた国体委員会の一部門として競技運営体制強化のための池田盛一（県庁）、中山和正を中心に発足した。

昭和５４年、１２の委員会の一として編組、スナイプ級、ＦＪ級の計測講習会を開催し、県内外合わせて２４名の有資格者が誕生した。昭和５５年森田理事長の下、無事国体を終えた。

昭和５６年、小川勝理事長に就任、計測委員長池田盛一留任。

６０年スナイプ級全日本大会、６１年ＦＪ級全日本大会、平成元年４月スナイプ級計測講習会開催（資格更新・取得者９名）し、８月のsunwave ＣＵＰ’８９（ＦＪ・スナイプ）に臨む。

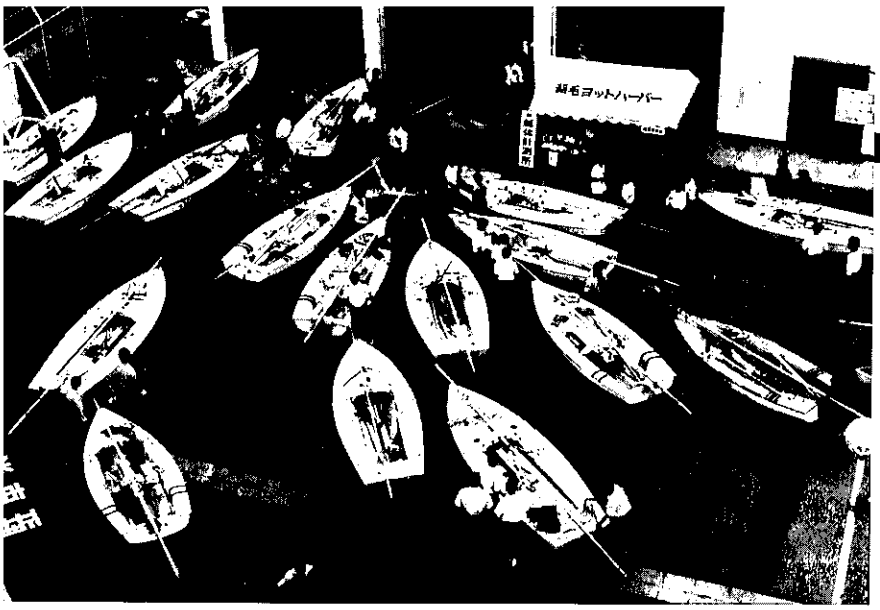
同年１１月、スナイプ級全日本大会実施、平成２年８月ＦＪ級全日本大会、平成５年にはＦＪ級世界選手権など、多数の大会で活動をしている。

平成７年、国府田現理事長体制に移行し、委員長剣持、副委員長伊藤（共に県庁）が委嘱を受け、８年にＦＪ・スナイプの計測講習会を開催し、組織拡充を図っている。

翌９年ＦＪ級東日本選手権、関東高等学校ヨット大会を、１０年よりＦＪ級東日本選手権が稲毛を舞台に毎年開催されることとなり、それらに合わせ活動している。

千葉県セーリング連盟計測資格者名簿

番号	氏名	所属団体	資格種
４７０クラス			
1	池田　盛一	県庁	
ＦＪクラス			
1	池田　盛一	県庁	
2	飯田　秀夫	県庁	
3	芹沢　俊宏		
4	市川　秀夫	三井建設	
5	岩瀬弥一郎	ＴＥＣ	
6	篠田　　裕	千葉県連	
7	秋本　年	県庁	
8	剣持　光信	県庁	
9	山本　　茂	県庁	
10	角田　　隆	県庁	
11	相川　範明	県庁	
12	坂元　克弥	県庁	
13	牛島　　仁	県庁	
14	笠井　貞義	県庁	
15	猪俣　正人	京葉銀行	
16	奥野　貴子	京葉銀行	
17	三橋　茂樹	京葉銀行	
18	剣持　清子	京葉銀行	
19	渡久地正幸	日本建鐵	
20	福永　勝秀	安房水産高	
21	杉村　亮一	磯部高校	
22	小澤　達也	磯部高校	
23	吉村　龍也	磯部高校	
24	野々上裕司	磯部高校	
25	堀越　　学	磯部高校	
26	木村　祐一	磯部高校	
27	宮下　博臣	稲毛高校	
28	若杉　雄希	磯部高校	
29	斉藤　武明	勝浦高校	
30	国府田由隆	千葉県連	
31	大浜　知夫	千葉県連	
スナイプ　クラス			
1	剣持　光信	県庁	Ａ級
2	笠井　貞義	県庁	Ａ級
3	柳　　孝実	千葉銀行	Ｂ級
4	加藤　考典	千葉銀行	Ｂ級
5	菊池　功治	千葉銀行	Ｂ級
6	剣持　清子	京葉銀行	Ｂ級
7	三橋　茂樹	京葉銀行	Ｂ級
8	宇都宮　康	県庁	Ｂ級
9	坂元　克弥	県庁	Ｂ級
10	児安　伸之	県庁	Ｂ級
11	相川　範明	県庁	Ｂ級
12	伊藤　亮一	県庁	Ｂ級
13	山口　幸久	千葉銀行	Ｂ級
14	小林　宗平	県庁	Ｂ級
15	牛島　　仁	県庁	Ｂ級
16	伊大知芳紀		Ｂ級
17	斉藤　武明		
18	三橋　憲男	千葉日産	Ｂ級
19	篠田　　裕	千葉県連	Ｂ級
20	市川　秀夫	三井建設	Ｂ級
21	秋本　年	県庁	Ｂ級
22	岩瀬弥一郎	ＴＥＣ	Ｂ級
23	芹沢　俊宏		Ｂ級
24	国府田由隆	千葉県連	Ａ級
25	池田　盛一	県庁	Ａ級
26	飯田　秀夫	県庁	Ｂ級
27	石井　敏弥	千葉県連	Ｂ級



稲毛国体　計測部長・加藤久直さん

3．レース記録システム開発の経緯（轟記）

千葉県ヨット連盟におけるレース記録作業をコンピュータ化する動きは昭和６０年代の初頭と古く、パソコンがやっと先進企業のオフィスにポツポツと見受けられるようになった時代と重なっている。昭和６３年には、競技部がパソコンの調査を実施している。

千葉県ヨット連盟の記録の作業は、故富田浩之競技部長、前田彰一ルール委員長の影響もあり、レースが行われる度に彼らの所属する会社である東洋エンジニアリング株式会社(TEC)セーリングクラブのメンバーが狩り出されていた。昭和５５年の稲毛国体のときにも、大森保次郎記録委員長のもとで、１０数名で電卓をたたき、何度もチェックをし、コピーを取り配布した記憶がある。結局、国体開催の間、仮設テントに閉じこもり、記録の作業に追われたために、レースは１回も見なかった。この時作成したチェックシートは次の国体でも役だったと聞いている。この国体以降、各種大会で成績結果の迅速な記録が課題となった。県連のルール委員会で、成績記録のためのマニュアル作りを行っていた。

故富田浩之競技部長が無類のLotus1-2-3(この当時一世を風靡した表計算ソフト)の愛好者であり、会社においてもプロジェクト管理等に多用していたため、当然レース記録に、このLotus1-2-3を持ち込んできた。今でも稲毛ハーバーの和室に無造作に置かれているEPSONのパソコンは、県連が導入した記念すべき第一号である。

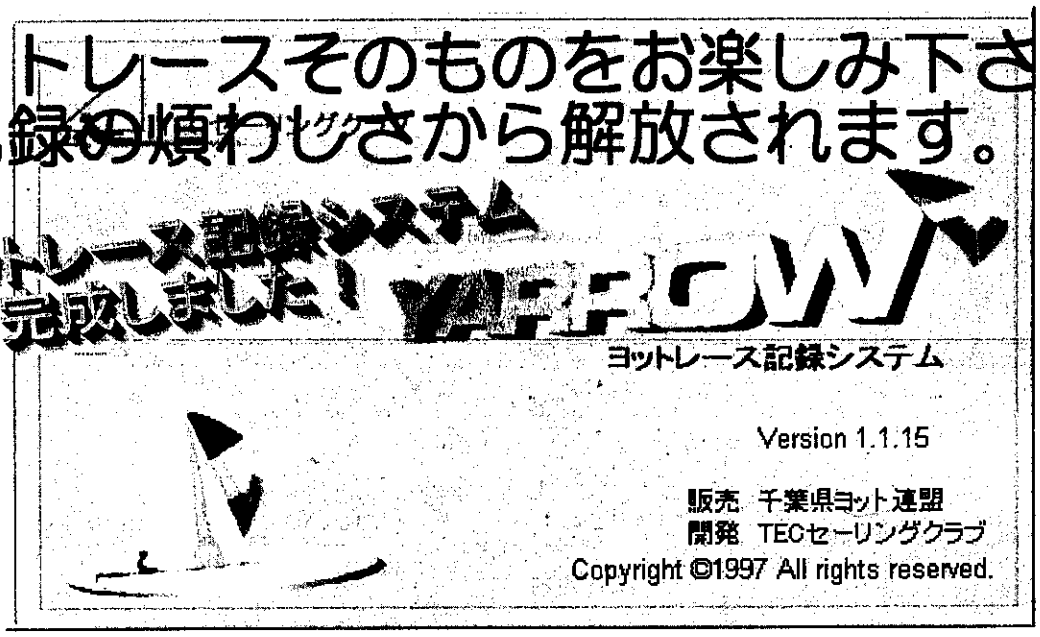
記録にパソコンを使い始めた当初は、Lotus1-2-3を使ってはいたが全て手動であった。平成２年頃からは徐々にマクロ(簡単なプログラム)を組み、各レースの得点計算程度は自動的に計算させるようになっていた。しかし、このソフトを操作できるのは、宮川典子と切通美生子の二人だけと言ってもよい状況であった。

平成５年のＦＪ世界選手権大会では、これらの改良型が使われ、和英併記の成績表が作成された。確か、ハーバー北側の芝生に建てられたプレハブの２階で富田を中心にパソコンを使えそうな新人とパソコンを操作したり、データ入力した。

平成６年富田氏が急逝し、その時富田氏が日本ヨット協会から依頼されていた国体レース記録用のマクロを、轟と中川千佳子(旧姓光岡：５８年入社：群馬国体成年女子スナイプ級優勝)と二人で完成させ、平成７年３月に日本ヨット協会へ納めた。この際二人でいろいろ検討した時に、表計算ソフトのマクロ程度のプログラムではなく、汎用の言語を用いて、誰でも簡単に使え、本格的な機能を持ったソフトウェア開発の構想を持った。

一方、パソコンを積極的に導入しようとした人達がいたと同時に、ルール・記録方式に精通した人達がソフトウェアを開発するのに不可欠であった。千葉県セーリング連盟には、昭和６２年に日本ヨット協会の最高審判事務局長になった前田彰一が在籍し、更に、国体、インターハイに監督として参加し、実践的なルールおよび記録方式を身につけた國府田理事長、斉藤副理事長もいた。各方面の人材が豊富なことも千葉県セーリング連盟の大きな特徴のひとつであろう。

後はシステムの設計書を作成し、プログラミングすれば出来上がる。平成８年１０月轟がシステム設計書を作成し、理事会の承認を頂いた時点で開発のスタートが切られた。時代はLotus1-2-3から



Excelへ、OS(Operating System)は、MS-DOSからWindows3.1を経てWindows95へと大きく変化していた。

ところが完成するまでに１年半を要した。最も時間を要したのは、プログラムの検証であった。１０ヶ月程度いろいろなケースを想定しながらテストを繰り返し、バグ（プログラムミス）が発見される度にプログラムを修正した。その中で、３回ほど致命的な欠陥が発生し、処理の方法を考え直し、ファイルの形式を大修正する羽目に陥ったこともある。この検証の中では、例えば全レース救済措置を受けると言うような実際のレースではあり得ない(しかし確率は０ではない)ことまでテストしてある。また、救済措置の対象となる事象がフィニッシュラインの直前で発生し、その後何艇かに抜かれながらもフィニッシュし着順を持ってしまった場合、「救済するときは他の艇に影響を与えない」との文言の解釈、すなわち、その艇の着順をカットすべきかしないべきかについて、日本セーリング連盟に問い合わせ、カットしないに決めたこともあった。その他、同順位の処理、２０％ルールの確認、２０レース／２００艇のマトリックスの確認、ヤードスティック等々兎に角気の遠くなる作業であった。ある程度轟が自信を持った時点で、クラブメンバーに過去のレース記録を打ち込んでもらい、同一の結果になるか確認をしてもらった。

完成したソフトウェアの名称は「YARROW」と設計段階で決めていた。のこぎり草の意味であり、Yacht ,Race, Record等の言葉から適当な単語がないか辞書で探していたときに見つけた。何故YARROWにしたかと言うと、のこぎり草の花言葉が「頭痛の種」であり、ヨットレース記録の煩わしさにピッタリと「はまった」からである。名称を提案した理事会では、「一生懸命やろー」との意味も含ませ掛け言葉とすることにした。「９５」はWindows95の影響を受けたのか、いつの間にか付いてしまった。

YARROW９５を販売することは理事会で承認を受け、操作マニュアル、パンフレットを作成した。平成１０年４月の日本セーリング連盟の総会でプレゼンテーションし、早速熊本県、宮城県から注文を受けた。その他に日本セーリング連盟（寄付）、福岡県ヨット連盟、鳥取県ヨット連盟、宮古市教育委員会全国高校総体推進室、青森県ヨット連盟、奈良県ヨット連盟（芦屋ヨット協会）、小樽ヨット協会、大阪府ヨット協会から発注を受け、CD-ROMまたはフロッピーディスクを送付した。

なお、YARROW９５の販売にあたり、千葉県セーリング連盟、東洋エンジニアリングセーリングクラブおよび(株)シーム総合研究所(プログラム作成者)との３社間で覚書を締結し、

(1) 千葉県セーリング連盟と東洋エンジニアリングセーリングクラブは著作権その他の知的所有権を共有すること
(2) 千葉県セーリング連盟は国内独占販売権を持ち、他にロイヤリティの配分を行わない
(3) 保守は(株)シーム総合研究所に委託することを確認した。

強化部ボードセーリング委員会[活動報告]

副部長:秋葉清美

ボードセーリング委員会は、１９９３年度プレ愛知国体に向けてスタートされた。

これは、１９９４年度に開催される第４９回愛知国体より成年男子の正式種目に採用されたことによる。当時の経緯では、県連内でボードセーリングに関連した加盟団体では、千葉工業大学体育会 ウインドサーフィン部だけであり、監督である私に選手の選抜と強化の指示があった。

当時より、私は、日本ボードセーリング協会の千葉県支部代表を兼任している関係もあり、県支部の競技会で選手を選抜し、県連の強化部で合宿を含めた強化訓練を実施している。

選抜・強化とは言え選手層は必ずしも多くないのが当時の現状であった。それでも県内の上位のレベルは高く、アジア大会、ワールド大会を目指ている者も数人おり、強化次第では上位入賞の可能性を秘めていた。１９８３年のプレ国体派遣では、メンズ９位であったが、常に上位集団で戦える手応えを得るこができた。翌年、第４９回に向けて、より一層気合いの入った選考会が行われた。２回の選考会では決着がつかず、８月の勝浦強化合宿にまでもつれ込んだ。

国体本番では、第２レースの２位を含む検討も虚しく、マストブレークによるアクシデントに見舞われ、手厳しい洗礼を受けた内容であった。

しかし、戦い方次第では入賞は充分可能であることを残してくれた大会であった。

第５０回福島国体では、初日の第１レースでいきなり、２位につける健闘もあり７位に入賞した。

千葉県チーム全体にもこの勢いは伝わり、天皇杯２位、皇后杯４位に大きく貢献できた様に記憶している。第５２回大阪国体では、最終日まで上位３県が同ポイントで１位に並んだ。残す３レース目の得点が表彰順位となる内容であった。千葉、神奈川、山口のバトルとなった。スタート後から飛び出した千葉が優位に展開し、私は間違いなく優勝を確信していた。だが、２週目に入り、下マーク後にタックした距離がわずかに短く、運命を分け３位に甘んじる誠に残念な結果であった。

第５３回神奈川国体より、成年女子にもボードセーリングが正式に採用されることになった。
男子は江ノ島、女子は葉山会場であり、レース海面は別々の展開となった。葉山会場は緩やかな風で安定し、２日目を終了した時点で３位と検討していた。しかし、その後の他県の追い上げも凄じいものがあり、６位入賞となった。

今大会より、男子、女子共に成年の正式種目に採用され、男子７位、女子６位に入賞することができた。今回の大会でも同時入賞した県は千葉と開催県である神奈川の２県だけであった。

当面の目標であった男女同時入賞を果たすことができ、千葉県のレベルとしては、男女共に強化の成果は現れて来ている内容であった。

次の目標は、３位以内同時入賞を掲げたいところである。しかし、これにはクリアーすべき課題が多いのも現実である。これは、強化部だけの問題でなく、県連全体の協力無しでは考えられない問題と言える。ボードセーリングの普及から始まり、ジュニアの指導・強化に結びつけた対応が今後の県連全体の課題であると考えている。

これにより、県内のレベルアップは充分可能であると言える。

強化部及びボードセーリング委員会に対し今後もご指導・ご協力をお願い申し上げます。

強化部［活動報告］国体選手及び記録

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
1回	昭和21年 滋賀 （琵琶湖・ 柳ヶ崎沖）			
2回	昭和22年 石川 （和倉湾）			
3回	昭和23年 福岡 （志賀島）			
4回	昭和24年 神奈川 （本牧沖Y.H.）		出場したるも参加選手名不明	成績不明
5回	昭和25年 愛知 （半田）		出場したるも参加選手名不明	一般A級　第7位 一般S級　第6位
6回	昭和26年 広島 （宮島）		出場したるも参加選手名不明	一般A級　第5位 一般S級　第7位 高校A級　第5位
7回	昭和27年 宮城 （松島湾）	石渡　明	石津昭三・豊田　豊・吉田悠紀雄・中野操一・大浜博利・町沢清太郎・石川　佳・鈴木則子・熊倉道子	一般A級　優勝
8回	昭和28年 香川 （大的場Y.H.）	石津　昭三	豊田　豊・石津昭三・吉田　修・保田　宏・吉原章雅・松井　清	一般男子ディンギー級　第3位
9回	昭和29年 北海道 （祝津Y.H.）	斉藤　明	吉原章雅・松井　清・大友好正・保田　宏・鈴木則子・鶴岡藤子・若葉　亘・越田　樫・石津昭三	実業団ディンギー級　第3位 一般男子ディンギー級　第4位

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
10回	昭和30年 神奈川 (葉山Y.H.)	不参加		
11回	昭和31年 兵庫 (西宮湾)	斉藤　明	石津昭三・吉原章雅・平島　毅・村上　和・ 鈴木則子・鶴岡藤子・神田節子・鈴木通也・ 大友好正・若葉　亘	
12回	昭和32年 静岡 (伊東湾)	吉原　章雅	湯本佳伸・白鳥正孝・久保治政・小川允之・ 鈴木則子・和田　静・鈴木通也・村上　和・ 平島　毅	一般男子ディンギー級　第6位 一般男子S級　第5位
13回	昭和33年 滋賀 (大津Y.H.)	吉原　章雅	湯本佳伸・久保治政・東紀男・前島　清・ 神田陽子・神田節子・渡辺和子・釜谷彰彦・ 笹川辰雄・与那城弘勝・江口保日・遠藤知理・ 相楽恒俊・井沢明人・吉井　功	一般男子S級　第2位
14回	昭和34年 神奈川 (横浜Y.H.)	吉原　章雅	石津昭三・豊田　豊・吉田悠紀雄・中野操一・ 大浜博利・町沢清太郎・石川　佳・鈴木則子・ 熊倉道子	一般男子S級　第6位 実業団S級　第7位 高校男子S級　第7位
15回	昭和35年 鹿児島 (鴨池Y.H.)	斉藤　明 要藤　覚 川名勘之助	石津昭三・湯本佳伸・千葉定一・小川允之・ 深井潔子・荻原　臣・小野木双葉・金高武夫・ 林利晴・里見　満・佐野　忠・松浦利光・ 快藤院孝士・今留　淳・東紀男・西川侃介	一般男子S級　第24位 一般男子ディンギー級　第10位 一般女子ディンギー級　優勝 高校S・ディンギー級　第8位 実業団S級　第5位
16回	昭和36年 宮城 (吉田浜Y.H.)	斉藤　明 要藤　覚 川名勘之助	穂積八洲雄・石津昭三・高村　依・千葉定一・ 深井潔子・小野木双葉・荻原　臣・館野光男・ 直塚　基・吉岡貞夫・松浦利光・鈴木文雄 小川　勝・金高武夫・林　俊靖・石田　男	一般男子S級　予選失格 一般男子F級　第4位 高校S級　予選失格 高校ディンギー級　第5位 一般女子ディンギー級　優勝 実業団F級　優勝
17回	昭和37年 岡山 (玉野) 渋川Y.H.	斉藤　明 要藤　覚 川名勘之助 東　紀男	福田喜介・飯田昌義・直塚　基・瀬谷博道・ 坂口和男・佐々木徹・杉野　宏・菅野博子・ 荘　淑子・中島ヒデ・高橋輝夫・早川良一・ 小川　勝・高梨光貞・生貝正徳	一般男子S級　第3位 高校男子S級　第3位
18回	昭和38年 山口 (光)	斉藤　明 東　紀男 小川　勝 川名勘之助	飯田昌義・福田喜介・直塚　基・下村琢磨・ 堀江忠寿・高須裕司・玉越　勲・菅野博子・ 荘　淑子・中島ヒデ・安田良久・北浦耕一・ 鈴木　博・山口安彦・和泉　巌	高校男子S級　第2位

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
19回	昭和39年 新潟 (両津)	斉藤　明 川名勘之助 東　紀男 福田　喜介	金高武夫・飯田昌義・堀江忠寿・玉越　勲・ 小川　勝・林　俊靖・渥美昭吾・北浦耕一・ 早川祥次・和泉　巌・水島一嘉・菅野博子・ 浜田南子・吉田紀子	一般男子B-F級 第3位 高校男子F級　第2位 高校男子S級　優勝
20回	昭和40年 岐阜 (蒲郡)	斉藤　明 飯田　昌義 川名勘之助 福田　喜介	和泉　巌・小川　勝・林　俊靖・渥美昭吾・ 堀江忠寿・玉越　勲・石田武夫・吉田紀子・ 前島洋子・今津やよい・石川和夫・坂本文久・ 杉山誠司・佐野幸久・田中正明	一般男子B-F級 第3位 一般男子A-F級 第6位 高校男子F級　第5位 一般女子S級　第6位
21回	昭和41年 大分 (別府)	吉原　章雅 斉藤　明 川名勘之助 福田　喜介	北浦耕一・和泉　巌・堀江忠寿・森山雄一・ 玉越　勲・小川　勝・斉藤嘉明・吉田紀子・ 浜田南子・細谷恵美子・三原伸明・鈴木政雄・ 砂山信一・泉水孝次・新藤　修	一般男子B-S級 第7位
22回	昭和42年 埼玉 (土浦Y.H.)	千葉　滋胤 川名勘之助 飯田　昌義 堀江　忠寿	福田嘉介・小島啓孝・小川　勝・斉藤嘉明・ 森山雄一・玉越　勲・清宮昭夫・細谷恵美子・ 清川偕子・内山通子・砂山真一・川名通義・ 笠原公夫・田中文夫・竹生田幹雄	
23回	昭和43年 福井 (三国Y.H.)	斉藤　明 吉原　章雅 千葉　滋胤 川名勘之助	福田嘉介・堀江忠寿・清宮昭夫・師田充夫・ 富田浩之・小島啓孝・高宮邦夫・清川偕子・ 内山通子・伊藤博子・笠原公夫・柿原芳雄・ 吉田松夫・保田　茂・高野　昇	
24回	昭和44年 長崎 (福田)	斉藤　明 福田　喜介 川名勘之助 横谷　勝利	師田充夫・長沢寿一・中村正造・和泉　巌・ 富田浩之・大原末夫・伊藤博子・白井紀美代・ 宇山　渉・吉田松夫・岡本重雄・高野　昇・ 高山辰男	高校男子F級　第4位
25回	昭和45年 岩手 (宮古)	斉藤　明 福田　喜介 川名勘之助 横谷　勝利	長沢寿一・和泉　巌・池谷正彦・川島　実・ 釜石佳男・天野貞夫・吉田　豊・下田みどり・ 黒川由利子・近藤多恵子・高橋光政・ 滝口嘉明・鈴木房雄・新藤実・鈴木秀夫	
26回	昭和46年 和歌山 (和歌浦湾)	斉藤　明 横谷　勝利 吉原　章雅 川名勘之助	長沢寿一・和泉　巌・高橋和正・川島　実・ 釜石佳男・吉田　豊・三原信明・下田みどり・ 黒川由利子・伊藤博子・佐藤正明・栗岡秀夫・ 保田真宏・山口昭男・野村 豊・高橋光政	
27回	昭和47年 鹿児島 (平川)	小川　勝 斉藤　威 川名勘之助 高瀬　和久	長沢寿一・池谷正彦・土屋　明・島田義夫・ 吉田　豊・笠原賢一・杉村憲作・下田みどり・ 菊池由美・大野義子・安田誠一郎・内川富久・ 下羽真一・川上　茂・吉本一明・三原信明	一般男子S級　第4位

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
28回	昭和48年 千葉 (館山湾)	斉藤　威 下田みどり 川名勘之助 和泉　厳	土屋　明・保田真宏・長沢寿一・吉田　豊・三原信明・笠原賢一・大野義子・伊藤博子・黒川由利子・川上　茂・猪野康弘・下羽真一・内川富久・橋本　務	天皇杯　優勝 一般男子B-F級 第3位 一般男子S級　優勝 高校男子F級　第3位 高校男子S級　優勝 一般女子S級　第2位
29回	昭和49年 茨城 (霞ケ浦)	斉藤　威 堀江　忠寿 笠原　賢一 佐藤　正直	土屋　明・保田真宏・長沢寿一・吉田　豊・吉本一明・高橋光政・大野義子・高木晴美・野口理絵・大橋一之・新庄政鶴・吉野光宏・橋本　務・田辺一雄	一般男子S級　第2位 高校男子S級　第2位
30回	昭和50年 三重 (津)	千葉　滋胤 斉藤　威 佐藤　正直 笠原　賢一	土屋　明・長沢寿一・吉田　豊・吉本一明・中村克重・大橋一之・遠藤淳一・寺田　進・大野義子・高木晴美・野口理絵・林くるみ・鈴木広子	一般男子S級　第3位 成年女子S級　第7位
31回	昭和51年 佐賀 (唐津)	千葉　滋胤 斉藤　威 佐藤　正直	清水信夫・吉永朋樹・中村克重・庄司真敏・吉田　豊・橋本　務・長沢寿一・荒井忠一・山口靖・大岩佐喜夫・野口理絵・林くるみ・岩崎正美	成年男子S級　第2位 成年女子S級　第8位
32回	昭和52年 青森 (大湊)	小川　勝 佐藤　正直 斉藤　威 師田　允夫	長沢寿一・加瀬川均・中迎隆敏・猪腰義文・吉田豊・橋本　務・猪野康弘・佐藤　稔・生稲章二・渡辺　徹・大野義子・岩崎正美・田仲恵美・石井幸枝・渡辺智晃	成年男子S級　優勝 成年女子S級　第2位
33回	昭和53年 長野 (諏訪湖)	小川　勝 斉藤　威 田村　鉄雄	長沢寿一・吉田豊・橋本　務・猪野康弘・荒井忠一・吉本一明・遠藤淳一・野口理絵・渡辺いづみ・尾崎由紀乃・宮内英雄・佐藤幸基・伊藤勝啓	
34回	昭和54年 宮崎 (大堂津)	國府田由隆 塚田　智之 小川　勝 斉藤　威	吉田　豊・荒井忠一・橋本　務・猪野康弘・吉本一明・小川正太・土屋　明・野口理絵・須賀田雅美・坂田典子・前田義明・三浦明夫・大和久貴・高沢正子・東軒博美・宍倉裕子	470級A級　第3位 成年女子S級　第3位
35回	昭和55年 栃木 千葉(稲毛)	國府田由隆 塚田　智之	吉田　豊・荒井忠一・橋本　務・猪野康弘・吉本一明・大橋一之・野口理絵・坂田糊個・前田義明・三浦明夫・大和久貴・高沢正子・東軒博美・宍倉裕子	皇后杯　第2位 少年女子級　優勝 成年男子470A級 第7位 成年男子470B級 第5位
36回	昭和56年 滋賀 (大津)	國府田由隆 塚田　智之	吉田　豊・三浦明夫・橋本　務・荒井忠一・原　公一・長谷正敏・野口理絵・東軒博美・高沢正子・大川英彦・山本　等・前田朝夫・松永　香・中村博美・今村圭子	少年女子S級　第3位

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
37回	昭和57年 島根 (隠岐島)	國府田由隆 塚田　智之	吉田　豊・三浦明夫・橋本　務・猪野康弘・土屋　明・永井　潤・高沢正子・東軒博美・光岡千佳子・神作　聡・阿部龍介・猿田真尚・内田法子・丹生麻子・古川幸子	皇后杯　第2位 少年女子S　第2位 少年男子S　第4位
38回	昭和58年 群馬 (東京湾)	國府田由隆 塚田　智之 堀江　忠寿	吉田　豊・神作　聡・橋本　務・永井　潤・阿部龍介・猿田真尚・並木　淳・小林雅春・光岡千佳子・松永　香・土屋敬子・青木恵子・並木あきよ・町田かおる	天皇杯　第２位 皇后杯　第２位 少年男子S　優勝 成年女子S　優勝 少年女子FJ　第6位
39回	昭和59年 奈良 (西ノ宮)	國府田由隆 斉藤　威 斉藤　武明	橋本　務・大野勇人・吉田　豊・三浦明夫・巽義則・桐谷博行・西川泰三・藤武清一郎・光岡千佳子・土屋敬子・青木恵子・兵藤美香・藤井　香・町田かおる	成年女子S　第8位 少年女子FJ　第3位 少年男子S　第5位
40回	昭和60年 鳥取 (境湾)	國府田由隆 斉藤　威 高橋　一夫	吉田　豊・三浦明夫・橋本　務・土屋　明・光岡千佳子・青木恵子・藤井　香・関根恒久・並木　裕・太田雅彦・田中俊也・井口由美・長島美恵子・飯野佐智	天皇杯　第3位 少年男子S　優勝 少年男子FJ　第5位 成年女子Ｓ　第6位
41回	昭和61年 山梨 (山中湖)	國府田由隆 斉藤　威 光岡千佳子	吉田　豊・斉藤道明・並木　淳・西川泰三・井口由美・長島美恵子・水野敬子・中村晋一郎・沢本健一・長谷川憂・北林岳人・山本貴代・野口朱美・田仲佳代子	天皇杯　第2位 少年男子FJ　優勝 少年女子FJ　第2位
42回	昭和62年 沖縄 (宜野湾)	國府田由隆 斉藤　威 堀江　忠寿	並木　淳・西川泰三・阿部龍介・皿沢敬一・藤井　香・堀越あさ子・水野敬子・中村晋一郎・沢本健一・長谷川憂・北林岳人・山本貴代・野口朱美・田仲佳代子	皇后杯　優勝 少年女子FJ　優勝
43回	昭和６３年 京都 (宮津)	國府田由隆	並木　淳・野口英徳・阿部龍介・若鍋真秀・長沢寿一・長谷川　篤・青木恵子・藤井　香・水野敬子・山本貴代・木戸尚史・佐田美樹・三浦航志・松倉祥生・葛西美恵子・土屋理加	天皇杯　第4位 成年男子470　第5位 成年男子S　第2位 成年女子S　第2位
44回	平成元年 北海道 (江差)	國府田由隆	斉藤道明・長谷川貢一・田中俊也・木戸尚史・斉藤武明・吉田　豊・水野敬子・山本貴代・葛西美恵子・島田和美・鈴木基介・宇宿泰広・高木克也・浅利桂一・満井治・沢井由紀子	天皇杯　第2位 少年男子FJ　優勝 少年男子S　第6位 成年男子SH　第4位
45回	平成２年 福岡 (福岡市)	國府田由隆 斉藤　威	吉田　豊・長谷川修・並木　淳・中村明弘・土屋　明・鈴木　稔・鍋田美奈子・高橋　牧・葛西美恵子・木村秀人・市川克己・橘輝樹・能登協・長瀬由紀・鈴木菜穂	天皇杯　第7位 皇后杯　第5位 成年男子S　第5位 成年男子SH　第8位 少年男子S　第7位 少年男子FJ　第7位 成年女子SR　第4位 少年女子FJ　第8位

開催回	開催年度	監督名	選手名	成績
46回	平成３年 石川 （羽咋）	國府田由隆 斉藤　威	磯野薫・長谷川貢一・斉藤武明・鳥飼邦広・ 橋本務・久保剛・尾島千夏・屋美希・ 葛西美恵子・関　義二・高梨茂治・渡辺文仁・ 清水篤史・海宝弘江・高山わかば	成年男子470　第4位
47回	平成４年 山形 （温海）	國府田由隆 吉田　豊	磯野薫・長谷川貢一・斉藤武明・鳥飼邦広・ 橋本務・久保剛・尾島千夏・土屋美希・ 葛西美恵子・関　義二・高梨茂治・渡辺文仁・ 清水篤・史海宝弘江・高山わかば	天皇杯　優勝 成年男子S　第6位 成年男子SH　第3位 少年男子S　優勝 成年女子S　第4位 少年女子FJ　第2位
48回	平成５年 徳島･香川 （観音寺）	並木　淳 斉藤　武明 吉田　豊	高木克也・浅利桂一・吉田豊・三浦昭夫・ 石森光正・立石俊章・長瀬由紀・奥田香代・ 岸川恭子・山口展政・市原裕介・桜井幸市・ 渡辺文仁・森下朋子・鈴木育美	
49回	平成６年 愛知 （蒲郡）	吉田　豊 並木　淳 秋葉　清美	磯野　薫・長谷川貢一・斉藤武明・久我仁・ 松尾賢治・長瀬由紀・小杉美恵子・土屋美希・ 加藤和之・吉田勇夫・瀬戸信吾・高橋典子・ 門馬智子・榊原央子	少年男子FJ　第7位
50回	平成７年 福島 （いわき）	吉田　豊 斉藤　武明 秋葉　清美	中村明弘・木村秀人・福田泰明・長谷川修・ 宮野幹弘・長瀬由紀・小杉美恵子・ 大久保佐織・広瀬正志・真田敦史・瀬戸信吾・ 鳥居晃・西川あかね・榊原央子	天皇杯　第2位 成年男子S　第3位 国体ボード　第7位 少年男子FJ　優勝 少年男子SR　第8位 少年女子FJ　優勝 少年女子SR　第5位
51回	平成８年 広島 （呉）	吉田　豊 並木　淳 大浜　知夫	関　一人・真田敦史・木村秀人・鳥飼邦広・ 宮野幹弘・長瀬由紀・榊原央子・土屋美希・ 倉富　裕・吉村龍也・菅井一也・佐野内裕子・ 山口　泉・網島由佳	天皇杯　第8位 成年女子S　第7位 少年女子SR　第9位 少年男子FJ　第4位 少年男子SR　第5位 少年女子FJ　第4位
52回	平成９年 大阪 （淡輪）	吉田　豊 並木　淳 大浜　知夫	三浦航志・徳田斉周・斉藤武明・加藤和之・ 滝島啓介・長瀬由紀・榊原央子・土屋美希・ 関谷尚徳・吉田康次・宮下博臣・吉田祥緒・ 高橋路子・網島由佳	天皇杯　第8位 成年ボード　第3位 少年女子FJ　第2位
53回	平成１０年 神奈川 （藤沢・葉山）	並木　淳 斉藤　武明 長沢　寿一 内藤　一也	三浦航志・真田敦史・都茂樹・滝島啓介・ 板垣雄太郎・三浦康徳・村上隆・植村真実・ 浅野里江・松浦真実・関美恵子・土屋美希・ 網島由佳・松下絹子	成年女子　第5位 成年女子S　第4位 成年女子ボード　第6位
54回	平成１１年 熊本 （宇土）	國府田由隆 長沢　寿一 大浜　知一 内藤　一也	廣瀬正志・鳥飼邦宏・滝島啓介・斉藤武明・ 土屋美希・山口典子・松浦真実・松下絹子・ 大橋将生・三浦康徳・板垣雄太郎・岡田留美・ 有北真弓・石川智香	成年女子　第7位 成年女子S　優勝 成年男子470　第9位 少年男子SR　第5位

千葉県セーリング連盟規約

昭和５３年４月　９　日改定
昭和５４年４月１５日改定
昭和５６年４月２６日改定
昭和５７年４月１１日改定
昭和６２年４月　５　日改定
平成　７　年４月　２　日改定
平成１１年４月　４　日改定

（名称および地位）

第１条　本連盟は、千葉県セーリング連盟と称し、千葉県のアマチュアセーリング界を代表する。

（所在地）

第２条　本連盟は、事務所を千葉市美浜区磯辺５－１６－１－３０５　國府田由隆気付におく。

（目　的）

第３条　本連盟は、ヨットと海に親しむ機会を広く一般に提供し、ヨット人口の増加をはかり、あわせてセーリング競技の健全なる発展と海事思想の普及を期することを目的とする。

（事　業）

第４条　本連盟は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(1) セーリング競技の普及育成
(2) 各種の講習会、ヨット教室、研究会の開催
(3) セーリング競技会の開催
(4) セーリング競技会への選手の派遣
(5) 日本セーリング連盟メンバー登録
(6) バッジテストの実施
(7) 日本体育協会公認指導員、日本セーリング連盟各種資格の申請
(8) その他本連盟の目的を達成するために必要な事業

（組　織）

第５条　本連盟は、次に掲げる県内アマチュアセーリングの団体をもって構成する。

(1) 市町村を単位とする団体
(2) 大学、高等学校および中学校で、学長、校長が認めた団体
(3) 事業所を単位とする団体
(4) クラブ団体
(5) 艇種別団体

（加盟団体）

第６条　本連盟は、財団法人日本セーリング連盟ならびに財団法人千葉県体育協会に加盟する。

（加盟および脱退）

第７条　本連盟に加盟しようとするときは、総会の承認を得なければならない。

2. 本連盟の加盟団体が、第５条に掲げる資格を失ったとき、または本連盟の加盟団体として不適当と認められたときは、総会の議決を経て脱退させることがある。
3. 加盟団体は、別に定める加盟団体に関する規定を守らなければならない。

（役　員）

第８条　本連盟に次の役員を置く。

会　　長	１　名
副 会 長	若干名
理 事 長	１　名
副理事長	若干名
常任理事	若干名
理　　事	若干名
監　　事	１　名

（役員の委嘱）

第９条　会長は総会において推挙され、本会を代表する。

2. 副会長は会長が委嘱し、会長事故あるときはこれを代理する。
3. 理事長は評議員の推薦により選出し、会務を執行する。

4. 副理事長は理事長が委嘱し、理事長事故あるときは、これを代理する。

5. 理事および常任理事は、理事長が委嘱する。

6. 評議員は各団体より１名推薦され、会務を審議する。

7. 監事は会長が委嘱し、財務を監査する。

（顧　問）

第１０条　本連盟に顧問を置くこことができる。

2. 顧問は会長が委嘱し、重要な会務の諮問に応ずる。

（役員の任期）

第１１条　役員の任期は１年とする。ただし再任は妨げない。

（総　　会）

第１２条　総会は役員、評議員をもって組織し、毎年１回これを招集する。また必要に応じ臨時に招集する事ができる。

2.総会は会長が招集して議長となり、次の事項を議決する。

(1)事業報告ならびに事業計画に関する件

(2) 決算報告ならびに予算案に関する件

(3) 規約の改廃

(4) その他本連盟に関する重要事項

3.総会の議決は出席者の過半数とし、同数の場合は議長がこれを決する。

（常任理事会および理事会）

第１３条　常任理事会は、理事長および常任理事をもって組織し、理事会は理事長および理事をもって組織する。

2. 常任理事会および理事会は、理事長が招集して議長となり、会務の執行に必要な事項を協議・執行する。

3. 常任理事・理事は、必要に応じ理事長へ常任理事会の開催を請求することができる。

（専門部および専門委員会）

第１４条　本連盟は、会務執行のため次の専門部、専門委員会を設ける。

総務部　総務委員会、財務委員会、会員登録委員会、広報・事業委員会

競技部　レース委員会、ルール委員会、計測委員会

強化部　強化委員会、学生委員会、ハーバー対策・競艇委員会

普及指導部　バッジテスト委員会、普及委員会、指導委員会

少年ヨット委員会

特別小委員会　女性対策委員会、高齢者対策委員会、身障者対策委員会

2.必要に応じ、総会の議決を経て、他の委員会を設けることができる。

（会　計）

第１５条　本連盟の経費は、下記に掲げるもので支弁する。

(1)日本セーリング連盟メンバー登録料還付金

(2) 加盟団体分担金

(3) 公共団体ならびに上部団体補助金

(4) 寄付金

(5) その他の収入

2. 本連盟の会計年度は、毎年４月１日に始まり、３月３１日に終わる。

（付　則）

第１６条　本連盟の規約の施行に関し、必要な細則ならびに規定は常任理事会にて定める。

付則－1

昭和５５年４月１０日改定
平成１１年４月　４　日改定

千葉県セーリング連盟加盟規定

第１条　本連盟は、規約第７条３項により加盟団体に関する規定を定める。

第２条　加盟団体は規約第５条に規定するアマチュアセーリング団体でなければならない。

第３条　加盟団体は、毎年５月末日までに本規定第４条に定める分担金を納入しなければなない。但し、市町村を単位とする団体および各団体グループを統括する連盟団体は分担金を免除する。

第４条　加盟団体の納入する分担金は、次の通りとする。

(1) 20,000円　事業所を単位とする団体
　　クラブ団体
　　艇種別団体
(2) 10,000円　大学セーリング団体
(3)　3,000円　高等学校セーリング団体

第５条　加盟団体は、毎年３月末日までに次の報告 をしなければならない。

(1) 新年度事業計画
(2) 新年度役員一覧表
(3) 新年度千葉県セーリング連盟評議員
(4) 会員名簿
(5) その他本連盟の必要と認めたもの

第６条　加盟団体は、毎年３月末日までに前条により提出した会員名簿に基づき、日本セーリング連盟メンバー登録申請書に、日本セーリング連盟メンバー登録料を添え、本連盟宛てに提出しなければならない。ただし、他の所属により、すでにその登録を行っている場合は、当該番号を届出、これに替えることができる。

第７条　加盟団体は、バッジテスト未検定会員に対し、毎年１１月末日までに、バッジテストの認定を受けさせなければならない。

第８条　新たに本連盟に加盟しようとする団体は、その代表者より次の書類を本連盟会長宛に提出し、総会の承認を得なければならない。

(1)　加盟申請書
(2)　当該団体を統括する他の団体推薦書
(3)　規　約
(4)　事務所所在地
(5)　役員名簿
(6)　会員名簿
(7)　日本セーリング連盟メンバー登録申請書
(8)　日本セーリング連盟バッジテスト受験申込書
(9)　前年度事業概要
(10)　当該年度事業計画
(11)　当該年度予算書
(12)　その他本連盟が特に必要と認めたもの

第９条　加盟の承認を得た団体は、直ちに本規定第４条による分担金を納入し、本連盟へ推薦する評議員１名を選出し、その氏名、住所、生年月日を報告しなければならない。

第10条　加盟団体が脱退しようとする場合は、次の書類を提出し、総会の承認を経なければならない。

(1) 脱退願書
(2) 脱退理由書

第11条　いったん納付した分担金等の納入金は、如何なる理由があっても返還しない。

付則－2

昭和５０年４月１日改定
平成１１年４月４日改定

千葉県セーリング連盟服装規定

第１条　この規定は、千葉県セーリング連盟（以下本連盟という）役員等の規律ある服装を規定するものであり、行事（会議、競技会、講習会等）は勿論、通常着用する場合も、節度在る行動に留意しなければならない。

第２条　本連盟の服装は次の通りとする。
１.日本セーリング連盟制服上下
２.本連盟ブレザーコート
３.本連盟白半袖制服上下

第３条　前条の服装は、次により着用する。

第４条　前条項実施の際の着用分類は、原則として総務委員会より指示をする。

第５条　本規定の趣旨に著しく反して着用したと認められた場合は、常任理事会より県連ワッペンの返還を求めることがある。

第６条　本規定は昭和50年４月１日より実施する。

分類	行事		制帽	制服	シャツ	ネクタイ	靴下	靴
1	競技会式典	JSAF役員	JSAF制帽	JSAF制服上下	白Yシャツ	濃紺	紺	黒
		県連役員	―	ブレザー上下	〃	県連タイ	黒	〃
2	会議、講習会等		―	〃	〃	〃	〃	〃
3	競技会運営	JSAF役員	JSAF制帽	JSAF制服上下	〃	濃紺	濃紺	〃
		県連役員	JSAF帽 又は白制帽	白半袖制服上下	―	―	白	白
4	略装		―	ブレザー上下	白タートル	―	〃	〃
5	通常着用		特に定めないが節度あるもの					

服装規定内規（ワッペン細則）

１．本連盟のワッペンは、本連盟を象徴するものであって、本連盟制定のブレザーコート以外に着用してはならない。

２．本連盟ワッペンは日本セーリング連盟および千葉県セーリング連盟旗（国際信号旗C旗）に王冠に百合花をデザインしたもので、王冠は国体セーリング競技天皇杯優勝回数、百合花は皇后杯優勝回数を表わしたものである。

天皇杯優勝：第１６回（昭和３６年）
第２８回（昭和４８年）
第４７回（平成　４　年）
皇后杯優勝：第１５回（昭和３５年）
第１６回（昭和３６年）

３．以後優勝のつどこれを記念し、王冠または百合花を加え再制作する。

回想　昭和２４年（１９４９）創設期のころ

顧問：石津昭三

戦後の混乱期、生計費の７０が食費で占める。県民にも活力を若人にスポーツの振興。千葉県の海にふさわしくヨットの普及を願って!!

戦後間もない時勢の流れは環境の変化とともに天の時

昭和２０年、第二次世界大戦の終戦を迎え日本国民は茫然と今後の日本の行く末を案じていた復興期、その国民に活力を与えるべきスポーツ振興策、敗戦により、ヨット、艇庫等各地で接収され、皆無の状態を（財）大日本体育協会の理事会で、国民体育大会の開催の話が出て翌年昭和21年を第１回国民体育大会が開催された。

ヨットの競技は、滋賀県琵琶湖の柳ヶ崎沖で、全日本選手権を兼ねて行われた。

使用艇は、国際単一型Ａ級１２呎ディンギーで、全日本選手権、学生選手権、１０マイルリレーであった。

昭和２２年第２回は石川県、ヨットは七尾市和倉湾で、種別は前年に加えて府県対抗が行われるようになり、さらに昭和２３年第３回は福岡県、志賀島で、さらに実業団対抗レースが加わると同時に種目に新規スナイプ級が加わった。

さ迷える戦後の学生生活にヨットと運命をともにする動機が

昭和２２年夏、私は混声合唱団の一員として、上総湊の合宿中に安易な思いで貸ヨット（帆に森永キャラメルの広告を付した）を操作して帰れなくなった失敗が動機となって、秋に大学のヨット部に入部し、ヨットにのめり込んでインターハイで活躍していた。

私は、市川市に居住していたことから昭和２３年の末、関東ヨット協会役員をしていた斉藤明さん（当時は石渡明さん）も市川市であったことから、千葉県にもヨット連盟を作って国体に参加しようじゃないかがその動機となったものである。

第４回国民体育大会に初出場を千葉県ヨット連盟の創設準備

しかし、そう簡単に創設といっても、しかるべき組織を形成し、それぞれの関係団体（県の体育協会やヨット協会等）への加盟手続きが必要であった。

そのためには、多くのご支援、ご指導を得ることが必要なことから、斉藤明さん提案により、私の父であった、石津四郎氏に相談の結果、一肌脱いでもらうことになった。

よって、社会的にも信用のある方々の確固たる役員構成として、石津四郎氏を会長とし、顧問に川名正義氏、山口久太氏、小高嘉郎氏、加瀬俊二氏としてご推薦頂き、斉藤明氏を初代理事長として組織を編成し、昭和２４年５月設立された。県の体育協会への加盟とともに県の保健体育課等の手続きを経て、漸く第４回国民体育大会（神奈川県横浜市ヨットハーバー本牧沖）に初参加した。

種目は、◎一般府県対抗のＡ級ディンギーとＳ級スナイプ◎実業団Ａ級ディンギー◎学連対抗Ａ級とＳ級◎水域対抗Ｌ級（１８呎）◎長距離帆走Ｌ級の７種目であったが、当千葉県は府県対抗Ａ級ディンギーで石津昭三が、Ｓ級スナイプでは黒崎組であったように記憶している。

勿論初出場であったので、その戦跡はここでは避けたいが、強風と無風、靄がかかって視界がきかずタイムリミットに掛かるなど、帆走に苦慮した記憶がこの５０年にしても残っている。

昭和25～29年(1950～54)

国体ヨット競技種目も府県対抗に色濃くしてヨット連盟も充実５種目に出場!!

国体で上位を占めるは首都圏 県内ヨット規範整備が必要と

第５回国民体育大会は愛知県、ヨット競技は半田市で行われた。

種別が改められ、学連対抗、水域対抗をやめ、高校が種目に入る。種目は、一般府県対抗でＡ級ディンギーと Ｓ級スナイプ、実業団はＡ級から Ｓ級に高校はＡ級である。

当ヨット連盟が創設されて２年目というのに、時代はどんどん変化していく、県内のヨット規範整備ままならぬ時勢、高校については、館山の安房水産高校に選手強化をお願いするしかなく、水産高校の川名教諭にそれを託した。

当県としては、府県対抗のＡ級ディンギーと Ｓ級スナイプを戦力として、とても総合成績で上位を占めるためにはさらに計画的に体制を整えるには努力が必要であった。

国体で上位を占めるは、京都、福岡、兵庫、大阪、神奈川、東京首都圏であった。

第６回国体の開催地は、広島県、安芸の宮島市で行われた。種別、種目は、前年と変わらなかったので、比較的安定した選手層が送ることができ、今後の戦力強化の参考としたが、結果はやはり前年と同じく首都圏がすべて上位を占めていた。

一般男子Ａ級ディンギーで 石津昭三・豊田 豊組初優勝を遂げる

第７回国体は宮城県、塩釜市松島湾で開催された。

種別では、新たに女子が加わり、種目では、Ａ級ディンギーを女子と実業団に、高校にＳ級スナイプが加わり、総合的で ７種目となり国体ヨットの参加総数も４３０名と年々規模が大きくなっていった。

当県代表選手として国体出場３回のキャリアを存分に活かして種目優勝を狙った石津・豊田組は気の合ったテクニックを発揮して、首都圏組に食い入って初優勝をものにした。

第８回国体でも一般男子 Ａ級ディンギーで ３位に入賞

第８回国体は香川県、高松市大的場ヨットハーバーで行われた。

種別・種目は前年度同様、レース艇は抽選により配艇され、レース終了後に返却するシステムであった。参加選手数も総員 ４３７名。この大会でも、 一般男子 Ａ級ディンギーの石津 ・ 豊田組は、潮流と夕凪に悩みながらも善戦、２位と同点で惜しくも第３位に入賞した。

第９回国体実業団Ａ級ディンギーでも３位に入賞

第９回国体は北海道、小樽市祝津ヨットハーバーで行われた。

女子の種目がＡ級ディンギーからＳ級スナイプに変更される。本県勢は、実業団のＡ級とＳ級、一般男子のＡ級とＳ級に一般女子Ｓ級の５種目に参加するチームに成長し「館山湾に似たおとなしいレース場」だったが、強風が得意の本県勢には勝手が悪くよい成績は得られなかったが、社会人になった石津選手が実業団Ａ級ディンギーに転換出場し善戦して総合２位と同点で３位に入賞した。

回想:昭和35～36年(1960～61)
国体二年連続優勝の思い出

林潔子(旧姓:深井)

二年連続で優勝を致しましたが、この連続優勝は非常にエピソードの多い二年でした。この忘れられない出来事を書かせていただきました。

●昭和３５年　第１５回　鹿児島国体
選手名　荻原　臣・田中双葉（旧姓：小野木）
　　林　潔子（旧姓：深井）

第一回戦、スタートして間もなく第一マーク直前で無風状態となり、全艇バッチリと止まってしまいました。各艇それぞれが、ラダーリングしたり、艇をヒールさせたりと四苦八苦をし、私共は、じっと我慢の子でした。僅かに風が出てきて、その風を掴んだ艇から動きはじめ、私達は二位で廻航した積もりでした。間もなく、前方に逆方向から走って来る艇があり、しかももうゴールとの事、一艇だけが無風になる前にマークを廻航していたのです。

私達は、未だ第１マークを廻ったばかり、タイムリミットにかかったら大変と、非常に慌てましたが、どうにか三位でゴールすることが出来、タイムリミットにはかからずに済みました。この時、タイムリミットにかかった艇が何艇かあったようです。

第二回戦は、順風で非常に調子よく帆走することが出来、二位でゴールしました。レース中にケースを起こしている艇が有り、そこにに居合わせた私達は証人艇になることを依頼されました。

クルーの荻原さんと「トラブルも無く、良かったわね。」と話しながらチームの皆さん達の方へ向かって歩いていると、本部が、私達を呼び出しているのです。私達は先程のレース中の証人艇の件と思い、本部に向かいました。帆走委員会の話に依りますと、証人艇ではなく、我々が抗議を出されて居るとのこと、正に晴天の霹靂、本当に驚いてしまいました。抗議を出したのは、広島県との事、我々がマークの廻航時に、サドンタックをしたとの事、どのようにマーク廻航したかと聞かれました。この回のレースは良く走り、マーク廻航時は他艇と一度も会わず、もし抗議を出されていれば、私達はその時点で解る筈で、マークの側には監視艇が居り、チェックをしていた筈、私は思わず「監視艇は見ていなかったのですか、何をやって居たのですか？」と言ってしまいました。ケースがあれば当事者からその場で必ず抗議旗が振られ、当然私達は気付いていた筈です。

又、帆走委員会から「トラブルが無かったら、何故にこんなに早く本部に来たのですか？」と言われ、悔しいやら呆れるばかりでした。

このケースは、午後の一時頃より夕方まで延々とかかり、途中お団子等を出されましたが、こんな事で騙されるものかと非常に腹立たしい思いをしました。やってもいない事を認める事は出来ず、とんだ濡れ衣でした。

結果、抗議は却下されましたが、誠に悔しく、すっきりとしない限りでした。後で聞いた話ですが、確かにケースは有ったとの事、ただし、広島県の選手は、出す相手をまちがえて居たのです。

その相手は、静岡の選手だったとの事。帰って来て失格したと泣いていたそうです。でも、静岡の選手は抗議を出されていないのですから、失格にはならなかったのです。

第三回戦はトップの埼玉県が沈をしてしまい、二位の私達が優勝と言うことになりました。閉会

県連創立50周年記念
パーティにて(左)

式で頂いた賞状を、この場で「こんなケチの付いた優勝なんて破いてしまおう。」かと思った程でした。

●昭和３６年　第１６回　岩手国体

出場選手は、前年と同じメンバーでした。

この年は、予選があり、私達は一度予選落ちをしたのです。

ところが、京都がセール番号を間違えて出艇申告をしてしまい、未出艇ということになり、次点の私達が浮かばれたのでした。

吉田浜は、潮流が強く、コースの取り方で、運・不運がはっきりとしたレースでした。やはり、地元の宮城が有利だったのですが……。

二回戦目は、台風の影響で、強風で大変なレースでした。沈艇続出でした。私達は、ランニングで帆走中、大波との戦いで、この波を乗り切るのに必死でした。ブームの付け根が折れてしまい、一瞬どうしようかと慌てましたが、強風の中、いつも携帯していた日本手拭いでマストとブームを繋ぎ、応急手当てして帆走したのです。
どうにかマーク廻航してクローズホールドになると、思うように上ることが出来ず、やっとのことでゴールしました。

この時の大変な作業をしてくれた小野木さんはさぞかし恐ろしかった事と思います。
彼女は「カナヅチ」だったのです。その時は夢中でしたので、彼女に強要してしまいましたが…。
三回戦目は強風の為中止でした。

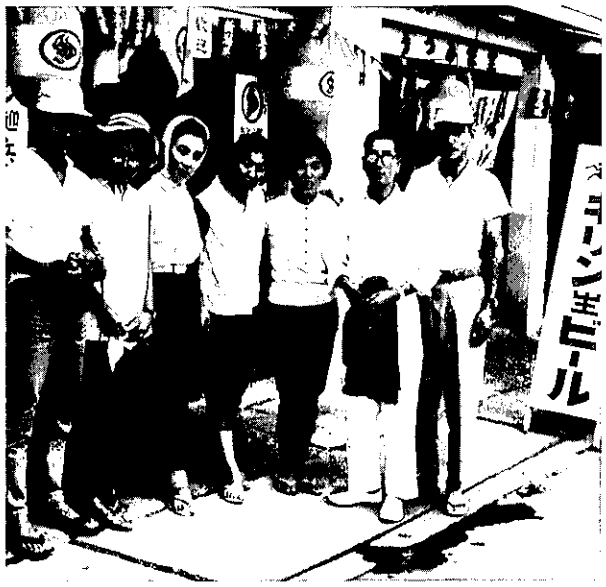
誠にエピソードの多い二年間でした。お陰様でグリーンリボン賞までいただき、約４０年近い年月を経た今、青春時代の懐かしい思い出に浸りながら、書かせていただきました。

このような結果を出すことができましたのは、多数の諸先輩の方々のご指導・ご協力を頂いたお陰でございます。今更ながら深く感謝申し上げている次第で御座います。

●一般女子デインギー級、深井、萩原、小野木組は第15回(鹿児島)第16回(松島)２年連続国体優勝をとげ、昭和３６年度の千葉県スポーツ記者会「グリーンリボン賞」を受賞している。(当時の写真)

回想：昭和37～38年（1962～63）
励ましてくれた“うちわ”

中西ヒデ（旧姓：中島）



昭和37年9月 岡山国体。宿泊した旅館前で（右から3人目）
応援に来て下さった深井女史（白いスカーフ）とともに

私が国体に出場できたのは、旭硝子にお世話になったのがきっかけでした。

昭和３７年の岡山大会、翌３８年の山口大会と２回、同期の菅野さん・荘さん（旧姓）との参加でした。それは昭和３５・３６年に優勝された深井・小野田チームが引退され、同じ旭硝子ということで巡ってきた、ラッキーなチャンスでした。

安房水産高校のある館山湾での強化練習を初め本番のレースは、わが青春の貴重な体験でした。

それは、山口大会の出来事です。

第２日目のレース、風上のマークに向かって一斉にスタート、なかなかの好位置で帆走しておりました。ところが、ふと気がつくとタックしてくる艇が……。

昭和37年8月 国体参加メンバー　後列左端：（私）。二人目：荘さん。三人目：福田さん。五人目：飯田さん。六人目：堀江さん。右端：高橋さん。
前列左端：菅野さん。二人目：斉藤明監督。三人目：故・川名勘之助監督。五人目：東監督。六人目：小川さん。右端：直塚さん。

昭和38年9月 山口国体

結局、リタイアしてテントの中からぼんやりそのレースを観戦、クルーである私の注意力の未熟さを嘆いていたのです。

レースも終わり、お茶を戴きに休憩所へ。すると後ろからくすくす笑いながら「何を引っ張ってるの？」と、振り返って見てびっくり、尾っぽのように伸びた長い紐、その先に何やら大きな文字の書かれた“うちわ”が……。

恥ずかしさのあまり、先ほどのレースのことなど忘れて「誰がいたずらを」と詮索したのです。

それは、となりの宮城県の監督さんが、肩を落としていた私を励ましてくれたことと知り、他の県の選手にまで心配りをしてくれた心の豊かさに感激でした。うちわには「がんばれ、しょげるな」とあり、おかげで翌日は胸を張ってレースにのぞむことができ、今でも「私はヨットの国体選手だったのよ」と誇りにしております。

昭和38年9月 山口国体：私の右が励まして下さった宮城県の監督さんです。
左は飯田さん（千葉大OB）

昭和38年9月 山口国体　千葉県テントブースにて

回想:昭和48年(1973)
若潮国体を振り返って

副理事長：斉藤威

県庁就職

大学３年生の正月。昭和４６年の新春を迎え千葉大学ヨット部の主将であった私は、小網代から同じヨット部のクルーザー「くろしお」で江ノ島まで初日の出クルージングに出かけた。陸に上がりその足で鶴岡八幡宮に初詣。何気なく引いたおおみくじは『大吉』であった。「今年は、いいことあるかなぁ...」

２月早々から葉山で春合宿。５月から始まるインカレを目指してのスタートとなった。以後春休みはもちろん、新学期となっても新２，３，４年生２３人の部員全員大学に行くことは最小限。練習と新艇造りの手伝いに明け暮れることとなったのである。

その甲斐あってか、運が良かったのか関東インカレは３部優勝、２部準優勝、１部７位。あれよあれよと言う間に全日本インカレ出場となってしまった。

長かった合宿を終えて学校に。「そうだ。就職だ。何とかしなくては...」

県庁にはゼミの教授の勧めと推薦、当時県連の理事長であった吉原副会長の「再来年の国体の手伝いを」とのことで７月、全日本インカレ前の夏合宿中に採用試験を受けた。全日本インカレは得意の超微風で予選３位、決勝６位入賞と最後までついていた。

明けて昭和４７年４月県庁就職。勤務先は開発庁。千葉ニュータウンの計画の仕事で、南総開発局の館山でのヨットハーバー造りを希望していたのとはまるで違う、北総の印西勤務となった。

県連の強化担当に

国体を控え県連の役員は開催準備におおわらわ。吉原理事長以下県庁、館山市役所での会議の連続であった。一方選手強化は、日大出身の横谷氏（東京理科大職員）を中心に明治大出身の福田氏、理科大出身の釜谷氏などが担当されていたが、４月からは合宿、遠征の日程調整、県体協からの補助金の申請、報告、練習のマーク打ち本部船、練習後のミーティングなどなど、一挙に私のところにお鉢が回ってきたのである。

１０月には鹿児島国体。鹿児島入りは大会の始まる１週間前で、どの競技のどの都道府県よりも早く一番乗りであったことから、西鹿児島に着いた早々報道機関のインタビューを受けることとなってしまった。若さゆえ、また入れこみ過ぎで「鹿児島に勝って優勝します」なぞ言ってまい、夕方のテレビを見てたいへん恥ずかしい思いをしてしまったことが、今でも思い浮かぶ。

にもかかわらず、国体前年の割りには成績は今一であった。国体から帰って１日だけ県庁に行って、すぐに故郷に帰って結婚式。冬も選手は休まず練習。いくら館山は南国と言っても真冬の鏡ヶ浦湾は北風が吹き、手足は凍えちぎれそうであった。

しかし、この時の練習が最後にはモノを言ったのであるが、スナイプの吉田（当時館山設備）三原(天津漁協)組、フィンの長沢（理科大職員）土屋（勝浦高校専攻科）以下安房水産高校の現役、ＯＢ中心の選手は、文字通り血の出る（高校フィンの川上、女子の大野の水産高校の２選手は、本当に裸足の甲から、フットベルトで擦れたところから血がにじんでいた）練習の毎日、那古船形までの走り込みで息が出来なくなるような練習の毎日であった。

この練習では毎日桟橋で胡座をかき、黙って見守る川名勘之助先生（故人、安房水産高校顧問）の

千葉県の入場行進。

姿があった。「ヨットのことはわからん。何とかしろ。吉田。」が口癖だったようだ。
昭和４８年も春になると近県の選手が館山にやってくるようになり、更に夏にかけて強化合宿が続けられた。
宿舎はハーバーのある実習所の前の「松善」で、女将さんの鈴木さんにはご無理を言って、安くて、おいしくて、量も多い食事をお願いしたりで、たいへんお世話になったものである。
強化スタッフも水産高校ＯＢの泉氏と中央大学を卒業したばかりの前年まで女子スナイプ選手であった下田さん（現在長野県の笠原氏（私と大学の同期。若潮国体は吉田，三原組の補欠選手）のご夫人）が加わり、毎週金土日の合宿となった。
国体前のインターハイでは、高校生は難なく関東のインターハイを通過。三重の全国インターハイに出場し、女子は優勝、男子もまずまずの走りであった。そして国体直前には恒例の関東１都４県対抗レースも行われた。このレースは前年に引き続き千葉県の優勝となり、水田三喜男杯（当時の地元選出衆議院議員で大蔵大臣。優勝カップは斉藤が保管）を守った。このころになると高校生も成年の選手に退けを取らず、少男フィンの川上は前年のオリンピック選手であった松山選手（当時神奈川県Ｂフィン選手、現在佐賀県。アトランタオリンピックで銀メダリスト重選手を育てた）や小松選手（当時神奈川県Ａフィン選手、現在オリンピックコーチ）を負かすほどになり、少男スナイプの内川、下羽組、女子の大野、伊藤組も吉田に次いでフィニッシュするほどにまで成長していた。

いよいよ国体本番

昭和４８年９月９日。会長川名正義（故人、当時館山病院長）、副会長清川彰(故人、当時清川産婦人科医院長)の地元で、晴天のもと皇太子殿下、妃殿下をお迎えし、いよいよ若潮国体の開始式が通告された。
役員、選手入場。行進の先頭は吉原理事長。続いて競技役員、各県選手団、最後に千葉県の選手団が入場した。旗手長沢、総監督川名先生、キャプテン吉田、以下監督，選手が行進した。

千葉県選手団

●一般男子
監督　斉藤　威（県開発庁宅地開発課）
選手　吉田　豊（スナイプ・館山設備工業）
　　三原信明（スナイプ・天津漁協）
　　笠原賢一（スナイプ・セントラルボート）
　　長沢寿一（Ｂフィン・東京理科大学職員）
　　土屋　明（Ａフィン・勝浦高校専攻科）
　　保田真宏（Ａフィン・関東学院大学）
●一般女子スナイプ
監督　下田みどり（坂上法律事務所）
選手　大野義子（安房水産高校）
　　伊藤博子（国土総合開発）
　　黒川由利子（東京経済大学）
●高校男子スナイプ
監督　川名勘之助（安房水産高校教員）
選手　下羽真一（安房水産高校）
　　内川富久（安房水産高校）
　　橋本　務（安房水産高校）
●高校男子フィン
監督　和泉　巌（デザイン工芸半十郎）
選手　川上　茂（安房水産高校）
　　猪野康弘（安房水産高校）

開会式のクライマックスは「選手宣誓」。

「吉田豊」の選手宣誓。

選手団を代表して吉田が選手宣誓を行った。

レース開始一日目

館山湾の夏は「ベタ」無し。開会式の時はそよ風であったのが徐々に強まってきた。しかしまだ風は北よりの風。

いよいよレースがスタート。

トップバッターはＢフィンの長沢。チーム最年長のまとめ役。北東の風３～４Ｍ。１２：００スタートの号砲。リコールあり。自信を持ってのスタートはまずまず。レース観戦をしていた監督陣とこれから出場する選手全員、我がことのようにホット胸をなでおろした。続いて女子スナイプ。１２：１０スタート。そしてその後はオリンピック帰りの神奈川・松山選手とトップを争う長沢のレース展開と、昨年の国体開催地で同じ高校生の鹿児島の横山組とトップを争う大野、伊藤組を、自分のレースとして、自分があたかもレースを行っているような気持ちでじっと観戦していた。結果は惜しくも両方２位であったが、これで『行ける』と全員が確信した。

続くレースはＡフィンと成年男子スナイプ。

まだ１９歳の土屋はフィンに乗ってまだ２年目。

当時の国体ではこのクラスが一番の激戦クラスで、全日本のフィンクラスのトップがひしめき合っていた。何とか８位入賞を狙っての第一レース。

風が変わって南東の風４～５Ｍ。１５：００スタート。気後れしてか少し出遅れてしまった。

続いてスナイプのスタート。１５：１０。吉田、三原組は下よりからまずまずのスタート。すぐにスピードに乗り、タックしてポートになった時には既にトップに。

以後はだんだん風が強くなってきたことから、土屋の苦戦は続く。上位の集団は予想されたとおり、元オリンピック選手、全日本チャンピオン、国体の常連で、風が強くなればなるほど十分ヒールを抑えスピード、上りとも安定してきた。結局土屋は健闘したが１３位。１位は愛知・壁谷、２位は山口・岩本、３位は静岡・伊藤、４位は神奈川・小松となった。

同じくスナイプも風が強くなってきたことから上位のチームはその順位が変わることなく、吉田、三原組が安定した走りで他を寄せ付けず完勝。５３分３０秒でトップフィニッシュ。２位には京都・平野組、３位には広島・木時組、４位には山梨・堀内、羽田組が入った。

大会初日が終わった。千葉県の４チームの総得点は２５点。２位は京都の４９．７点。圧倒的な強さで予想通りの滑り出しとなったのであった。

（当時は参加艇のすべてのレースの総合得点で天皇杯を競った）しかも明日からは風が吹きそうな天気予報である。得意の風が。

二日目

翌９月１０日。朝から南の風。午後には前線通過もありそうで雲の動きが速い。天気が崩れそうである。早朝から出艇の準備をしながらも、２日目ともなると少し落ち着いて状況の判断が出来るようになってきた。

９：００。南東の風５～７Ｍ。Ｂフィンのスタート。上位は昨日も上位だった選手がほとんど。抜きつ抜かれつのレースも、最後は神奈川・松山選手をおさえた昨日５位の大分・宇留島選手がトップ。３位には昨日６位の香川が、そして４位には千葉・長沢がフィニッシュ。これで通算で大分に抜かれ３位とはなったがまだまだ１点差。

千葉県選手団の整列。

９：２０。一回のゼネラルリコールの後、女子スナイプがスタート。安定して吹いている風で、女子にとってはもう強風と言える風域。トップ集団はやはり昨日の上位が占めている。自重気味のスタートをした大野、伊藤組は、少し落としめでスピード勝負の走り。マーク回航の度に順位を上げてきて、今日も２位でフィニッシュ。
これで通算トップにたった。トップは広島だったが、総合では今日も昨日に続いて３位の京都・野上組が２位に。３位には昨日４位、今日５位の東京と、昨日５位、今日４位の岐阜が続いており、まだまだ安心は出来ない。
昼前になると案の定雨が降り出した。しかし風は少し落ちてきて、時々入ってきた７～８Ｍのブローは無くなった。天候悪化の兆しが見え始めたこともあって、次ぎのレースは３０分切り上げてのスタートとなった。
１１：３０。南の風５Ｍ。Ａフィン２回戦のスタート。今日は土屋が得意とする風。スタートもまずまず。しかしこのクラスも昨日のトップ集団はやはりシングルには顔を出している。九州の鹿児島、大分、長崎、瀬戸内の山口、香川、中部の愛知、和歌山、関東の埼玉、千葉、神奈川の争い。トップは鹿児島・坂之上選手。通算２位に浮上となった。２位には埼玉・戸田選手が入り通算３位に。愛知は７位に入り１位を守り、神奈川は昨日と同じ４位に入り３位に。土屋は８位に入り、通算１１位に浮上。８位とは１０点差。８位入賞は少し厳しいが、まだ可能性はある。
スナイプのスタートは１０分遅れ。１１：４０。スタート。上り角度、スピードともに申し分の無い吉田組は、上マークこそ少し送れていたが徐々に順位を上げとうとうトップに。１時間７分の戦いを制し、もちろん通算でも失点０のトップ。
しかし我々と戦った一昨年インカレで優勝した広島の木時組もしぶとく食い下がり２位に入り、昨日の３位もあって離れることなく通算２位。通算３位は昨日２位の京都、４位は山梨、５位は静岡、６位には山口が浮上してきた。広島の頑張りには目を見張るものがあるが、もう吉田、三原組の優勝は揺るぎ無いものと誰もが信じるような戦い振りであった。
これで一般男子、女子のレースは各２レースづつが終わり、いよいよ少年男子の登場。天候は曇り、時々雨が降る変わりやすい天候。少年男子が出廷を待つ間にはますます風は強くなってきた。既に１０Ｍは超えさらに風が強くなってきたところで「本日のレースは中止」となってしまった。得意の強風でなんとしてもレースをやりたい。スタートさえすれば問題無く勝てるのに。
しかし、大会２日目までの総合得点は今日全種目シングルで５０点。２位の神奈川は既に１１４点。倍以上でもう天皇杯は決まったも同然であった。

三日目

大会３日目。９月１１日。今日はやっと晴れ。朝から南西の風で、１２Ｍ。千葉県選手団は監督、選手とも一安心となった。当時の国体のレースは中スタート、中フィニッシュの所謂オリンピックコースで、おおむねトップが１時間ぐらいでフィニッシュするコース設定であった。中風の５～７Ｍの風では、スタートから上の１マークまでは約１キロ、１０分、下の３マークからフィニッシュまでも同じ。したがって下から上までの中間レグは２０分以上の上りであったことから、更に１０

開会式とハーバー全景。

Mを越す風ともなればもっとコースは長くなり、上下3，０００M（稲毛の海面ではハーバーから気象観測の三角燈台までの距離）ともなるのであった。力のある選手はこのレグで確実に上位に上がってくることが出来、実力の無い選手はまぐれで第一マークを上位でまわってもその順位を守ることはなかなか出来ないのであった。

予定通りAフィンは９：００スタート。これだけの強風となるともうレースはサバイバルで、とにかく沈しないでフィニッシュすることだけを考えて走っている選手がほとんど、そして上位の有力選手数人も沈し、リタイア。その中でもさすが前日までの通算１位から４位までの選手は堂々たるトップ争い。そんな状況の中にあって体力的にはまだまだの１９歳、土屋の頑張りは感動的で、ここで頑張れば８位入賞が出来る、と果敢にランニングでジャイブ。しかし、勝利の女神は味方せず沈。しかも那古船形の方に流され、マストが刺さり、起こす時にデスマスト。万事休すとなってしまった。

完走した艇は１５艇。この強風の中でトップ艇は５０分５５秒かかってフィニッシュ。神奈川・小松選手であり総合２位に。２位は愛知・壁谷選手が入り総合１位を守りきった。３位は埼玉・戸田選手が入り総合３位。沈を起こせなかった土屋は総合１６位となった。

ジャイブを避け８の字タックで沈をせずに１６位に入っていれば８位となっていたことになるのだが、毎日強風の中でジャイブの練習をしてきたことのプライドは到底、そんなことを許せるものでは無かった。いさぎよい戦いであった。そして、この沈を責めるものはチームの中に誰も居なかった。

男子スナイプも同様にサバイバルとなった。

ゼネラルリコールの後、９：２０スタート。

どの艇もサイドステーはゆるゆる。当時はルーズリギンが主流で、マストをサギングさせてメインセールのトップを開く。そんなチューニングであったのだが、山口・藤井組は更にマストを目一杯アフターレーキさせて走る、まるでフォアステーが切れてしまったが如く、であった。

レースはこの山口を吉田、三原が追っかける展開となり、更に広島・木時組が続く。昨日まで３位の京都は沈。このレースでは多くの船が沈。８艇は最後まで沈が起こせず、また時間内にフィニッシュ出来ずリタイアとなった。

結局吉田、三原組は山口を抜くことは出来なかったが、１位、１位、２位で堂々の種目優勝。３位、２位、３位の広島・木時（木時君は斉藤と同期で４６年常滑インカレの優勝者）、盛谷組は本来、この成績ならまずは優勝してもおかしくないところであったが、一度も千葉の前にフィニッシュすることなく２位。３位には最終レース千葉に一矢を酬いた山口が入った。

風はますます強くなるばかり。昼前に始まる予定のBフィン、女子スナイプは出廷禁止。陸上待機。今日も昨日に続き、またまたレース中止になって

川上副知事の激励。

しまうのだろうか。それにしてもこのままだと高校生のレースはどうなるのだろうか。
待つこと数時間。少し曇ってきたし、３時過ぎぐらいになれば、夕方近くになれば少しは風も和らぐこともあるのだが。そのうちなんとなく少し風がやんできたような。と言うか風が吹きつづける海面の状況を見慣れてきたと言うか、波があまりたっていないのでと言うか。でもやっぱり少し風は落ちてきていた。
レース再開が決定された。
　しかし、女子と高校フィンはレベルがまだまだと言うことで、Ｂフィンと高校男子スナイプのレースを行うこととなった。各艇出廷。
レースはＢフィンから。南西の風１０Ｍ。やはりすこしは落ちてきた。が空はだんだん暗くなってきている。そろそろ前線の通過か。
１５：００スタート。と同時に案の定前線が。異常なほどのものすごい突風とともにどしゃ降りの雨が。陸からはレース海面が全く見えない状況となってしまった。１分。２分。３分。……。フィンのレースは続けられているのだろうか。スタート待機の高校生たちはどうしているのだろうか。
そのうち、雨が上がりぱっと晴れ間がさした。
しかし、陸にいる皆の驚きは大変なもの。浮かんでいるレース艇がまばらなのである。よく見るとフィンはレースを続けているようだか、沈艇も多く、高校スナイプはほとんどが横倒し、さかさまであった。（千葉も沈していた。）　幸い前線通過後は晴れあがり、風も更におさまり（それでも８～９Ｍ前後）、また海上自衛隊のレスキューもフル回転で、あちらこちらで１艇また１艇と沈艇が起き出したのである。
結局Ｂフィンは体重、実力、経験の順で着順が決まり、鹿児島・馬場選手が１位でフィニッシュ。昨日まで種目１０位が一挙に４位まで跳ね上がった。２位には大分・宇留島選手。５－１－２で健闘及ばず種目２位に。３位には神奈川・松山選手。１－２－３でオリンピック現役選手の面目躍如。種目優勝を守った。４位には埼玉・三宅選手。元オリンピック選手。種目６位。５位には愛知・藤田選手。種目７位。そして６位に千葉・長沢。
２－４－６で種目３位。７位には三重・河野選手。種目５位。このように最終レース１位から７位までの選手が種目順位も１位から７位であり、実力イコール成績となったのであった。
高校生はと言えば、あれだけの沈艇にもかかわらずレースが出来るようになり、１５：４０スタート予定となった。後で判ったことなのだが、南西の風であったことから風の割りには波が立たず、流された沈艇も海岸に早く着き立て直しがスムーズであったようである。しかし、この時からまた風が強まり始め南西の風１１Ｍ。Ｂフィンの選手はまだ沈を起こしながらレース中の選手もいて、フィニッシュ出来た艇は２５艇だけであった。
少年男子スナイプは結局１６：００スタート。
スタートの前からもう沈している船もちらほら。コースは極端に短い。高校生ではトップクラスだけがまともに走れる風域で、トップ集団はまばら。そんな中でトップ争いは千葉と茨城となったが、スタート飛び出した次年度国体開催の茨城が、追いすがる千葉を振りきり僅差でトップフィニッシュ。わずか２９分でフィニッシュ。もっとコースが長ければトップになれたのに、との思いもあったが、まずは上出来。このレースは２０艇だけがフィニ

にこやかに皇太子ご夫妻
館山市のヨット競技場で
本県選手団を激励される。

ッシュできただけで、多くの沈艇は夕方遅くまでレスキューが続いた。２０位の最終艇はトップから５３分後のフィニッシュ。約３倍の時間がかかったが、フィニッシュさえ出来れば２０位に入れると言う、サバイバルレースであった。
ようやく３日目が終わったが、高校男子のフィンはまだ１レースも行われていないことから、明日続けてレースが行われることとなった。このまま吹きつづける強風の中での続けてのレースは、果たして可能なのだろうか、心配はあったが、明日の天候は前線も遠のき、もう少し風はおさまりそうである。

最終日

ようやく風も少しやんで、しかし８Ｍ。時々入るブローは１０Ｍくらいはあるのだが、何せ昨日までの強風を思えば、監督陣はひと安心。
高校男子スナイプ２回戦は８：００スタート。西南西８Ｍ。何艇かリコールがあったようだ。戻っている艇がある。下羽、内川は大丈夫だったのだろうか。今日のコースは昨日よりもっと短い。戻ったのでは勝ち目は無い。陸上で双眼鏡をのぞく監督陣、レースが終わった成年男子のみんなの心配そうな顔。千葉がなかなか見つからない。どうした。どうした。そんな時、１艇だけもう上マークを廻ろうとしている艇がいる。誰かが「千葉だ」。まさかそんな離れたトップだとは思わず、艇団の中を捜していたのではなかなか見つからないわけで、安心で一瞬からだの力が抜ける思いであった。この時の短いコースはうれしく、２７分でトップはフィニッシュ。千葉の優勝が決まった瞬間であった。種目２位は昨日トップの茨城。３位は４位、５位の岐阜と５位、４位の福岡が続く結果となった。
スナイプの１０分後８：１０にようやく少年男子フィンの１回戦が始まった。２日待たされた後のレース。しかも強風。７艇は沈でフィニッシュ出来きず。そんな状況の中でレースの争いは実力のある選手５、６人の戦いとなった。千葉の川上はトップこそ大分に譲ったが、堂々の２位。トップは２８分でフィニッシュ。続けて行われるレースも余裕で、まだまだ体力、気力とも十分の川上の種目優勝が見え始めた。
沈艇が多く最終艇はトップより２５分も遅くフィニッシュ。そのころから徐々に風はおさまってきた。昨日までの前線の風が去り、所謂いつもの西よりの風に変わってきた。
最終艇がフィニッシュするや、すぐに第２レース。風は西５Ｍ。もう誰でも走れる風。９：２０スタートとなった。号砲とともにアウトサイドリミットから飛び出す川上。自信を持ってのスタート。しかしリコールがありそう。なんと千葉はリコール。アウトからのスタートが災いし、本部船のリコール掲示板の確認が少し遅れ、急いでベアーし戻ったがもうレース艇の艇団は既に遠くに。
コースは先ほどより更に短い。「もうだめだ。でもとにかく頑張ろう。」ここからは川上にとっては泣きながらのレースとなった。トップは茨城。２７分でフィニッシュ。しかしこの短いコースで、しかも誰もが走る風の中で（このレースはトップと最終艇（出場全艇完走）の時間差わずか６分）、２５艇を抜き返し８位にまで挽回。実際のスタートからフィニッシュまでの時間はきっと川上が一番短かっただろうが、と悔やみながらも、ひょっともしてと３位入賞をあきらめていた監督陣は即座に得点計算をはじめた。しかし、４位。もう少

一般男子スナイプ級で優勝した吉田・三原組。20053号艇

優勝した吉田・三原組の三原を胴上げ海中に投げ込んで祝福する仲間達。

しコースが長ければ。残念。

ところが、ところがである。なんと２位でフィニッシュした山口が失格となったのである。これで上位の順位は大きく変わった。４位、１位の茨城と１位、４位の大分が種目優勝を分け合たと思いきや、大分が３位に繰り上がり単独優勝。茨城は２位が失格で、全く自分だけその有利に与かることなく２位となってしまった。もちろん６位、２位の山口は３位から大きく圏外に。代わって４番目に着けていた千葉の川上が２位、７位となり種目３位に浮上。本当に普段の練習、精進が最後には報われる、そしてレースは最後まで（ヨットは順位が確定するまで）あきらめないと言うことを知らされた思いであった。あわせて３位で入った三重は７位、２位となり、一挙に５位から千葉と並んで３位にまで跳ね上がったのであった。

この少年男子フィンのレースが行われているさなか、女子の第３レースを行うことがレース委員会では検討されていた。なんとしても３レース行いたいとするレース委員会は更にコースを短くしてでもレースを行うこととした。われわれにとっては既にトップに立っていたこともあり、また、クルーの伊藤がスロープで怪我し、黒川に代わるということもあり、あまり乗り気ではなかったが、レース委員会では３時の閉会式には間に合うと言う判断からであり、当然のこととも思われた。周りでは地元がトップなのになぜレースが行われるのか不思議がる県もあった。

レースは１０：００スタート。風は更に落ちて４M。大会最終レース。選手皆の気持ちも大いに高ぶり、結局ゼネラルリコール。いいスタートをきった大野、黒川組は残念に思ったが、自分も出ていたことを反省し、再スタートに臨んだ。少しラインから下がってのスタート。

しかし、これが命取りとなってしまった。そんなに遅れたわけではなかったが、先行艇のブランケットに遭い、なかなか前に出られない。上マークは１０位内に入れずに回航。これでももう少し風があれば、と思いつつ得意のランニングでは順位を上げていくが、トップ争いをしている宿敵京都の野上組はずっと前に。そのうちコースは短くあっという間にレースは終了。なんとトップ１４分でフィニッシュ。京都は茨城に遅れはしたものの２位でフィニッシュ。３位、３位、２位で種目優勝を手にした。この野上選手は今でも日本女子選手の中にあって、Ｊ２４などのレースでは揺るぎ無い第一人者である。今思えばあの野上選手に高校生の大野がよく２回も勝ったものだと思う。結局大野は４位に入れば優勝であったが、６位となり優勝を逃すこととなった。しかし、１０位に入れなければ、このレース３位で入った岐阜に５位、４位、３位で敗れ３位となるところだったことを思えば、大健闘であった。

でも、でもである。もう１５分。いくらなんでも１４分でトップフィニッシュはないだろう。悔やんでも仕方ないとは言え。

閉会式

晴天、そよ風の元、成績はともかくどの県も「強風の中でよく戦った」との思いのうちに閉会式が始まった。総合２位の神奈川とは６０点差。今までにない大差で千葉の総合優勝。天皇杯を獲得することが出来た。天皇杯のブロンズ像をかわるがわる手にし、かわるがわる選手、監督を海に放り込み、優勝の感激をかみしめた。

若潮国体その後

■茨城国体

翌昭和４９年の国体は茨城の霞ヶ浦で行われた。午前中微風、お昼中風、午後強風と言うコンディションで、強風では千葉の走りは圧倒的であったが、微風やリコールで苦戦を強いられた。

まず初日は１０Ｍを越す風の中で、成年男子Ａフィン土屋９位、男子Ｂフィン長沢リコール失格、スナイプ吉田、吉本（安房水ＯＢ）組１位、女子スナイプ大野、高木（安房南高ＯＢ）組２位。総合２位で今年も行けるかなと思うほどであった。

２日目。午前や昼の組でのスタートとなった成年男子は全員パッとせず１６位から１９位。女子は恐れていたリコール。（昨年の覇者京都野上選手も１レースリコール。）しかし、高校生の３：００からのレースは１０Ｍの強風となり、フィン大橋（安房水）が２位、スナイプの吉野、橋本（安房水）組が５位。総合では上位とあまり点が開かず８位。まだまだ行ける。

３日目。苦労しながらやっと１２位で入った吉田は１位の兵庫樋口組（樋口君は斉藤と４６インカレ同期で甲南大学のキャプテンだった。）がリコールで失格。２位の熊本、３位の長崎も大くずれし脱落。結局種目２位に。優勝は３６点で島根。

女子大野は１０位を守ったがフィンの長沢、土屋は今日もパッとせず、しかも頼みの高校フィン大橋もリコール。スナイプ吉野は好調、３位でフィニッシュ。総合は１０にまで下がってしまった。しかも明日は午前の微風でのレース。しかし上位が下がって千葉が頑張ればと言う他力本願ではあるが、８位入賞までの可能性はある。

最終日。案の定風は無い。それでも徐々に吹き始め３Ｍに。高校生のスタート。スナイプは上位を走っており、まずは一安心。しかしフィンの大橋は遅れている様子。このままでは・・と思っているとサイドマークからのコースをうんと内側に取り風をつかんで大きく挽回。ここで始めて内水面でのレースの「大もうけ」が千葉にも廻ってきた。そして吉野、橋本組は４位で、大橋も６位でフィニッシュ。なんとこれで８位入賞どころか７位にまで届いてしまったのであった。

天皇杯優勝は福岡県。得点２６５点。１レース平均得点１５点、９位平均と言う内容で、昨年の千葉の平均得点９点、４～５位平均と言う成績から見れば混戦であった。福岡との差１００点は３つのリコールが無ければと思われる結果でもあった。

■三重国体

昭和５０年の三重国体は津で行われた。

この国体からは新たに少年女子の種目が追加となった。各地の高校で女子選手が多くなり、一般女子に高校生が出場する県が多く、逆に成年女子に出られなくなる選手も多いことから、成年、少年両方の女子にとって国体参加の機会が増えるようにとのことで女子２種目となった。そのかわり高校男子フィンを取りやめ、更に全体選手数の枠を超えないため、女子は各水域で予選を行うこととなった。また、これにより得点計算も全レースの得点をたして争うのではなく、各種目８位入賞に得点を与え、その合計で天皇杯、皇后杯を争うこととなった。

千葉県は関東ブロックで女子両種目の予選を通過、三重国体全種目の参加となった。しかし、この得点方法でのデメリットが大きく働き、惨敗となってしまった。

成年男子はスナイプ吉田、吉本組が惜しくも２位と０．６点差で３位に入ったものの、Ａ、Ｂフィンの佐藤、長沢は失格やクイックデスに泣き、８位入賞できず得点無し。

成年女子大野、高木組は第１レース１位だったもののその後振るわず７位。

高校男子スナイプ大橋、遠藤（安房水）組は第１レース３位で入りながらも、ケースを起こし失格。第２レース１位、第３レース４位で入ったものの種目１０位で無得点。

少年女子野口、鈴木（安房水）組も関東予選では良く走ったにもかかわらず９位で８位入賞できず。

結局、ここ一発での上位フィニッシュ、ここでやってはいけない失格、リコールで結果を出すことは出来なかった。

優勝は三重で、全１６レース中１２レースがトップフィニッシュと言う驚異的なスコアーで優勝した。

■佐賀国体

続く昭和５１年の佐賀国体は唐津で行われた。

この国体からは男子のフィンの種目が無くなり、４７０に変わった。千葉ではＡ４７０で明治大学の清水、吉永組と長沢が、Ｂ４７０では中村（安房水ＯＢ）、吉本組が出場することとなった。また、女子の関東予選では成年女子のみの予選通過とな

ってしまった。
大会前から玄海灘は吹きまくる、とのことで期待して望んだ大会は終始ベタ。最高で６Ｍ。
０．５Ｍと言う、早い話が風のまったく吹かないなかでもレースは消化されていった。別の意味でも選手は風とのい戦いであった。
成年男子スナイプ吉田、橋本（安房水ＯＢ）組は第１レース０．５Ｍの風の中で４位。地元佐賀の原田組が１位。２レース目は１位で２位佐賀に大きく水をあけての総合トップにたった。しかし、第３レースではとんでもないハプニングが起こった。トップ集団のところに全く風が行かなくなり、後ろからマークを廻った集団にブローが吹き、レースはどんでん返し。吉田はなんと今までに経験のない３１位でフィニッシュ。地元佐賀に至っては３７位となり９位にまで下がり入賞まで逸する事となってしまった。これで優勝が転がり込んできたのが山梨羽田組であった。まさかの優勝であったが、３１位でもまさか種目総合２位とは吉田も思っていなかった。
このような微風の中でＡ４７０は３レースよくまとめたが１０位。Ｂ４７０は第２レースリコールで惨敗。成年男子１５位で得点無し。
成年女子スナイプは今年から野口が高校を卒業し成年女子に、クルーは千葉大学ヨット部の林と岩崎。手堅くは走ったが爆発力に欠け８位。千葉の面目を保つ唯一の入賞種目となった。
少年男子は安房水産の荒井、山口組。第１レース３位。第２レース１３位で２日目まで５位につけ、最終日で逆転を図ったがケースを起こし失格。
１７位のフィニッシュでも種目５位を保つことが出来たのだが。しかし、荒井にとっては日大進学後この経験が大きく役立ち日大のインカレ優勝につながったのであった。
結局この年も「吹かなかった。ついていなかった。」と言い訳をする結果となってしまった。

■青森国体

続く昭和52年の青森国体は浅虫温泉で行われた。夜行寝台列車での国体遠征は、「北国にレースに行くんだなー」との思いでちょっぴり感傷的になった。がそんなことをいってる場合ではない昨今の成績で、今年こそは、と頭の中を切り替えて大会に臨んだ。
ここ数年青森の国体、インターハイの成績には目を見張るものがあった。大湊高校の活躍である。酷寒の北国でのヨットの練習はよほどの精神力がない限り一冬続くものではない。このことを学ぶつもりで臨んだ国体でもあった。
今年も吹けば、風が吹きさえすれば、と祈っていたが、東北の夏は、初秋は穏やかな国体日和。晴れまたは曇りのそよ風続きであった。時には０．０Ｍでレースが行われた。大会の特殊性もあっていたしかたないとはいえ、レースを消化することしか頭にないレース委員会とも思えた。
成年男子は今年もＡ４７０は千葉大の学生、加瀬川、中迎。Ｂ４７０は理科大の職員、長沢、猪越。スナイプは昨年同様吉田、橋本となった。
４７０は両クラスとも微風に勝てずじまい。
スナイプは、今年こそとの意気込みが通じ千葉国体に続いての優勝となった。第１レース南６Ｍの風。まずは７位。続いて第２レース。北３Ｍ。５位。トータル４位に。トップは３位、１位の鹿児島岩瀬組。（岩瀬君は斉藤と４６常滑インカレ同期で鹿児島経済大学のキャプテンだった。宿舎も同じだった）得点差１７．３点。ちょっと逆転には厳しいところ。しかし２位東京までは８．３点差。３位埼玉までは３点差。何とか３位までには入りたいところ。そこで迎えた第３レースは逆転にはもってこいの西９Ｍの風。悠々トップでフィニッシュ。後は後続を待つこととなったが、上位は１０位以下。優勝が決まったのであった。
成年女子は今年も野口が関東予選を難なく突破。そしてクルーはあの大野が。
第１レースはいきなりトップ。しかも２位の宿敵京都野上組を抑え、３位の昨年優勝の佐賀青木組を抑えてのトップ。しかし第２レースは１０位。佐賀がトップ。京都は３位であっさり逆転を許してしまった。そして迎えた第３レース。北２Ｍ。野口、大野とも苦手とする微風。スタートから激しいつばぜり合いとなった。がここで京都はリコール。このことを知らない２人は懸命のセーリングでなんとトップでフィニッシュとなった。結果は２位で入った佐賀が悠々種目優勝となった。
少年男子スナイプの安房水産高校の佐藤、生稲、渡辺組は第１レース北２Ｍの風のなか、９位に。第２レース北１Ｍの風のなか、１２位に。トータル８位につけていたが、最終日の第３レースは０Ｍの風？のなか、２６位に。とうとう種目１２位

にまで下がってしまった。

少年女子スナイプの安房水産高校の田中、渡辺組はやはりふるわず１４位。

吉田の優勝も久しぶりであったが、種目２位を確保した女子の活躍で天皇杯７位。皇后杯３位に入賞することが出来た。

■長野国体

昭和５３年の長野国体は諏訪湖で行われた。久しぶりの関東甲信越での国体で、事前に現地練習もできたし、レースにも参加。かなり状況はつかんでいたつもりではあったが、ふれ回る風、突然のブロー、あっという間に無くなってしまうブローに、いつも悩まされたものであった。

しかし、大会が始まるや１日目、２日目、３日目といい風が安定して吹き、山のなかの湖でレースを行っているとは思えないほどの好条件となった。

にもかかわらず、初日はＡ４７０安房水ＯＢの新コンビ橋本、荒井組はリコール、昨年優勝のスナイプ吉田、猪野組は３０位、昨年準優勝の成年女子スナイプ野口、池辺（千葉大）組は１５位。いずれも全く振るわず。少年女子は新設の磯辺高校の１年生コンビが関東ブロック予選を勝ち抜けず出場していない。と、散々であった。

２日目。朝からいい風で、９：００スタートの成年女子は西７Ｍ。やっと１１位。　続く１２：００と１０分遅れスタートのＢ４７０、少年男子スナイプの時には西８Ｍまで風があがってきた。Ｂ４７０安房水ＯＢの新コンビ吉本、遠藤組は途中で沈。　マストが湖底に刺さりなかなか起きず３６位でフィニッシュがやっと。しかし高校生の銚子水産コンビ宮内、佐藤組は９位でフィニッシュ。ようやく強風千葉の面目躍如となった。

更に風は強くなって来て、１５：００と１０分遅れスタートのＡ４７０、成年男子スナイプの時には北西９Ｍまで風があがってきた。当然のように両種目とも上位を走りＡ４７０は７位で、成年男子スナイプは３位でフィニッシュ。さすが。

大会３日目。朝からベタ。しかもふれ回る風。気まぐれに吹いたり、無くなったりするブロー。朝のレースはＡ４７０、成年男子スナイプであったが、案の定上位を走っていたにもかかわらず失速。成年男子スナイプはタイムリミットにかかってしまうほどであった。

続く昼のレースからは少し風が出てきたが、成年女子は８位。午後のレースでは風も安定してきたがＢ４７０はリコール、少年男子スナイプはケースを起こし審問の結果失格。

最終日、もう何も失うものはない。再来年の稲毛での国体につながるレースをと臨んだ。

Ｂ４７０は３位となった。がケースで抗議され失格。少年男子スナイプは３２位。しかもまた抗議。失格となってしまった。

とにかく全てにおいて散々であった。もう一度原点に返り、普段の練習を怠らず、油断・あなどり・うぬぼれを捨て稲毛を目指すことを思い知らされた国体であった。

それから、この国体は実は千葉国体でもあった。諏訪が第２の故郷となった斉藤と同期の笠原君は、千葉で若潮国体の補欠、そして茨城、三重では少年男子の監督を務め、木更津のセントラルボートから諏訪の渋崎建設に移り、長野国体を目指すこととなった。また、千葉の下田みどりさんと結婚。二人で国体の準備、選手強化にあたったのである。と同時に千葉大学のＯＢ、現役（不思議なことに長野出身の選手が３人もいた）を選手として連れての出場であった。毎日の厳しい練習の成果で、Ａ４７０桔梗、下島組は２位に、スナイプの笠原君自身も５位に、これにより成年男子は優勝。成年女子の青木、丸山組は９位で惜しくも入賞できなかったが、ともに練習した少年男子は７位に、少年女子は３位に入り天皇杯２位を獲得。笠原君は国体開催準備、選手強化ともに立派にこなし、結果を出したのであった。

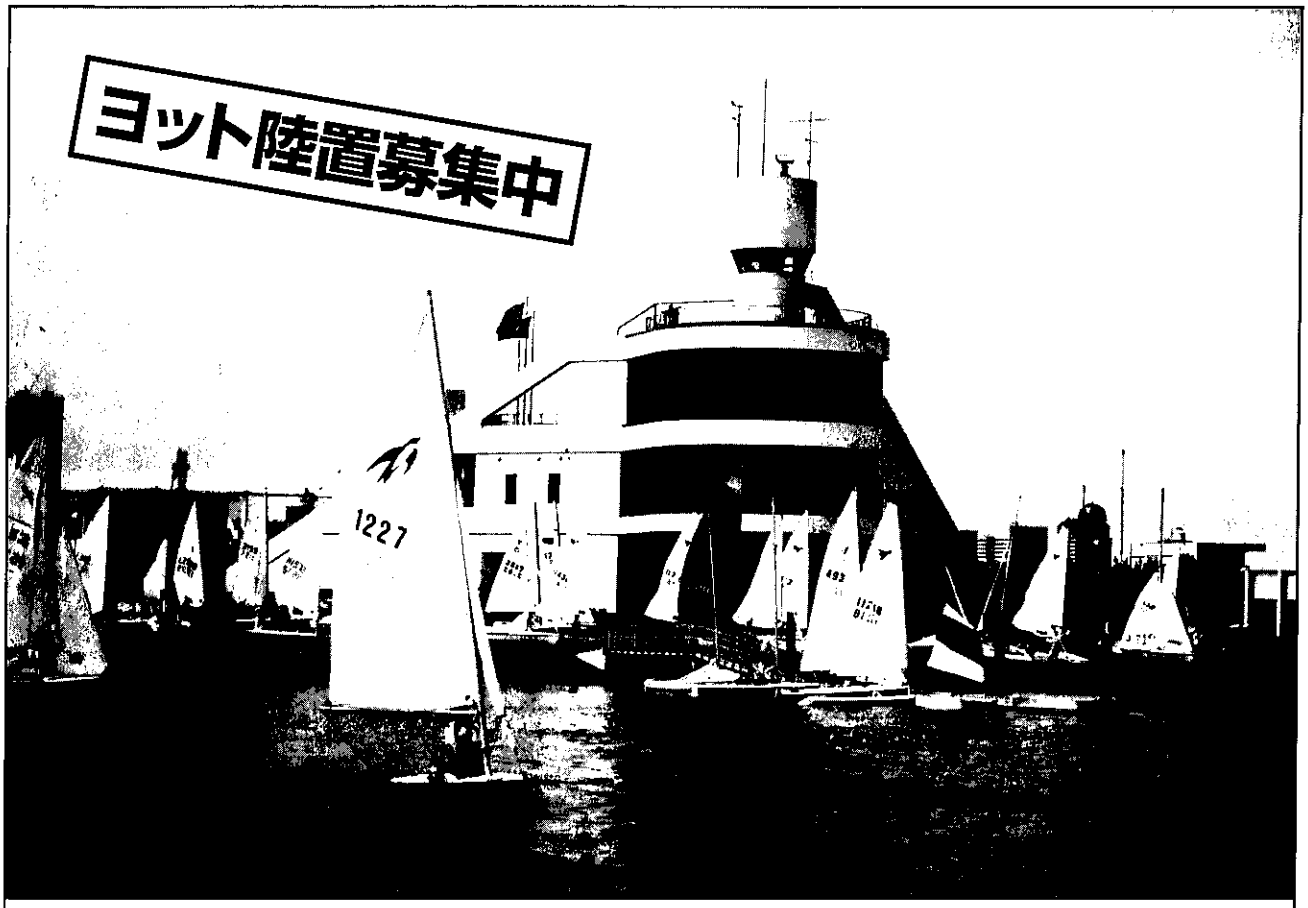
また、一方で佐賀は松山さんの指導で成年男子２位、成年女子１位、少年男子４位、少年女子４位で天皇杯、皇后杯ともに３連覇となったのである。

次ぎは宮崎。そしてその次ぎは千葉稲毛で。

選手強化の課題をもう一度洗いなおして再出発のきっかけとなった国体で、ある意味ではおお負けしたことで気持ちが吹っ切れた。

以後千葉に帰ってすぐに斉藤は国体リハーサル開催の準備に。選手強化は国府田、塚田、吉田の３人にバトンタッチとなった。

大学卒業後すぐに選手強化の責任者として、国体の監督として過ごしたここ数年はあっというまであり、何をしてたのだろうか、何が出来たのだろうか。というより、選手に教わったことのほうが圧倒的に多かったと今でも思う。



(財)千葉市スポーツ振興財団

稲毛ヨットハーバー

〒261-0012　千葉市美浜区磯辺2-8-1
TEL:043-279-1160　FAX:043-279-1575
http://chibacity.spo-sin.or.jp/index.html

事業概要

●海洋思想普及事業
海洋教室　海洋講座　海洋講演会
工作教室　見学会　体験学習
●海洋スポーツ振興事業
各種ヨット教室　各種ヨット大会
帆走技術判定　安全講習会
各種体験会
●セーリング区域の監視業務
監視救助艇3艇　協力艇20艇
●ハーバー施設の運営事業
ヨット陸置き保管568艇　レストラン
売店　駐車場　セールボート保管234本

施設概要

●陸面積　82,000m²　568艇
●水面積　25,000m²　15隻
●クラブハウス
1階　事務室　更衣室　シャワー室　売店
2階　会議室　講習室　和室
3階　レストラン
4階　監視塔　展望台
●修理庫　船具ロッカー　艇庫
浮き桟橋4本
斜路100m　40m
●帆走区域　360ha
●監視救助艇　3艇(潮風　いそかぜ　まつかぜ)
●駐車場240台
●その他　セールボード保管庫　浜売店

回想・昭和54年～55年
（1980～81）

顧問：森田芳樹

私が千葉県ヨット連盟の一員となったのは 群馬国体が昭和５５年夏季大会開催計画が決定されて、ヨット競技開催場所について 千葉県連に協力を求められた昭和５４年の春頃からだったと記憶している。

何故 私が県連に誘われたかというと 父が千葉市ヨット連盟会長であったことと、私が立教大学体育会ヨット部OBであることで 吉原先輩や千葉先輩に誘われたのは 当然の成り行きであったと思っている。

特に 大学のヨット部の佐藤先輩から「人間死ぬ時に棺桶に入り墓場まで 持っていかれるものは 会社勤めだけではない。こうした一種のボランテイア活動を通じて得たものが 宝となりあの世でものを言うのだ」と言われたこともあった。

そのようにしてメンバーの一員となり、当時日本ヨット協会国体委員長の吉原先輩の自宅（千葉市登戸）に月何回か午後７時過ぎ頃から吉原先輩を囲み 千葉理事長（千葉銀行）国体開催と運営方法に向けた討議が行われた。

県連のメンバーには吉原（前述）、千葉（前述）、堀江（川崎製鉄）、前川（電通）、富田(故人 東洋エンジニアリング)、神田（三井造船）、大原(川崎製鉄)、師田(自営業)、桜井（県水道局）、斎藤（県企業庁）、小川（自営業）、国府田（磯辺高校）氏などや役人や大企業のサラリーマンと優秀な人達が結集されていたので、多彩な話題とアイデアがでて夜のふけるのも忘れる日々だった。

ヨット競技会場は稲毛の埋め立て地に建設中のヨットハーバーを活用し開催する計画だったが、活用できるのかどうか県の方針が掴めづ悶々とした日々が続いた。

県の体育課、日本ヨット協会の意向を汲み取りながら運営計画を作成するなかで、日本ヨット協会の国体委員長の吉原先輩の種々の指導により少しづつながら纏められていった。

メンバーに参加し数か月たった時から千葉理事長が欠席する日々が多くなった。

或る夜 吉原先輩から「千葉理事長が業務の都合で今までのように県連の仕事が出来なくなるのでお前に理事長を替わってもらいたい」と言われたが、運営経験の浅さから断ったものの 日本ヨット協会の中でも同窓が多いから名前だけでもと口説かれ理事長を引き受けざるをえなくなった。

ヨットハーバーの設計とその運営方法等が固まり、来年度の夏季国体のヨット会場を千葉県で正式に引き受ける頃になり、我々メンバーの勢いも雲っていた空から幾分かの光が見えてくるようになり、会合も月に数回開催するようになった。

千葉県社会体育課にも何度も足を運びながら 予算化をお願いする日々が続いた。

そして その年に開催された宮崎国体のヨット競技の視察メンバーの一人に入り、宮崎に出かけ 運営方法など官費で見学し大変参考になったことを覚えている。

４７０級、スナイプ級とFJ級の３クラスで競う中で 千葉と比べて海の水の奇麗さはうらやましか

運営艇シュミレーション：日ヨ・国体委員長：吉原さん ▶

第６回全日本 自治体職員ヨット競技会：開会式 ▶

競技役員の行進 ▼

った。

千葉に戻ってから「あと１年間しか準備期間が無いので急げ」と吉原先輩から度々尻を叩かれながら牛歩のような歩みで、少し少し準備が進んだ。

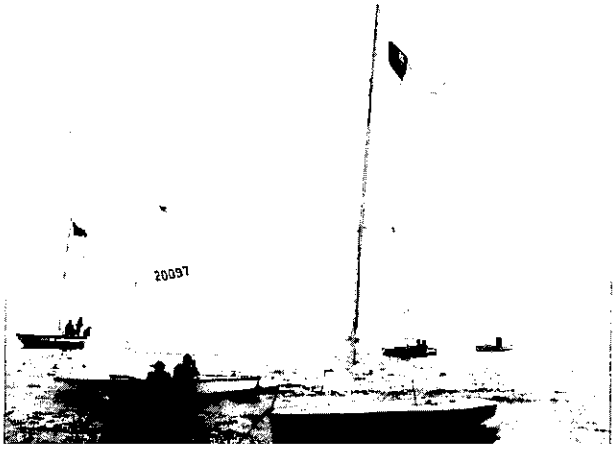
特に県連参加企業の仲間に呼びかけ大会実行委員をどれだけ多く集められるかが 大会の成功を握っているので、必死で呼びかけ多くの人達の協力がえられたことも ヨットを通じてという特殊の仲間意識が働いたためとも思っている。

漁協組合、保安庁、自衛隊など関係団体への調整もサラリーマン生活の中では全く接触の無い世界であったが、そのような関係団体の協力を得ながら 昭和５４年１０月４日から７日にかけて第６回全国自治体職員ヨット競技大会を開催した。

ハーバーは一部しかコンクリートが敷いていない仮設会場のため 雨が振れば泥んこになるような悪い環境下の運営であったが 県から借り受け 形だけは整えながら進んでいた。

年度が変わり 県の方向性が明確になった時 国体の運営委員や各競技委員など夫々の役割が決まり、多数のメンバーが揃い 勢いが感じられ嬉しく思い自信すら浮かんだことも昨日のように覚えている。

磯辺高校と新設されたヨットハーバーを利用しながら国体を開催出来る目処が出来て、準備活動に追われ 勤務先にも休暇願い、モーターボートの



レース副委員長：佐藤精知夫

借入れ願い、海上自衛隊の協力依頼など タイムスケジュールに追われながらメンバーの人達の協力の下に着々と準備がすすめられた。

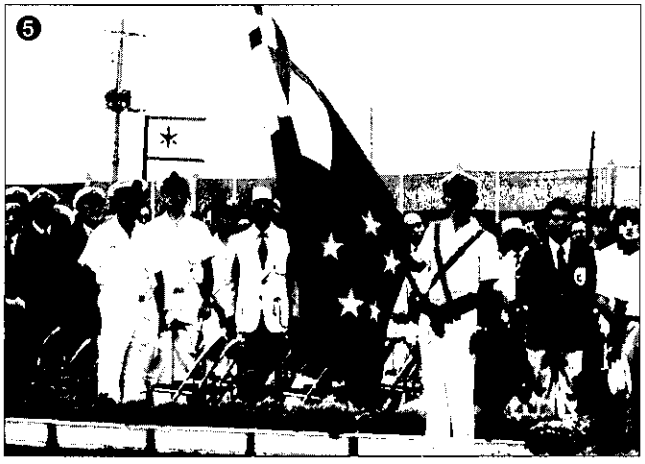
その頃になると 競技大会で千葉県が優勝することと競技施設が残り将来使用出来るようになることを目的に千葉県連の役員全員が結束してきたように思えてきた。

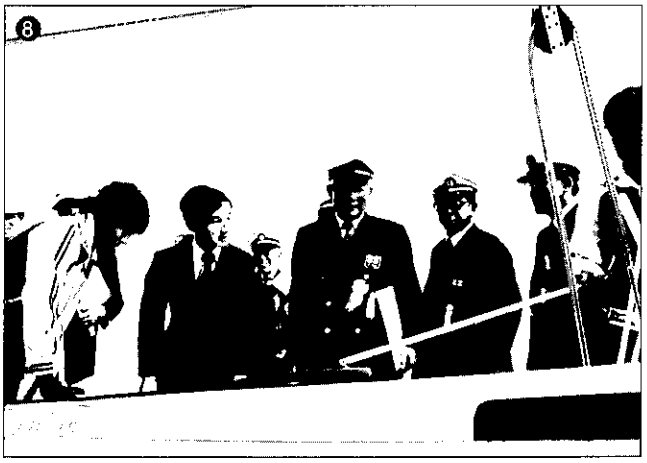
最初に集まったメンバーが 役割の責任者として国体運営を任せられたことと吉原先輩を軸としたチームワークの良さに 名前だけの理事長としての自分がどれだけ助けられたか 今でも感謝している。

その頃県体育課や県連を中心にして 第３５回国民体育大会夏季大会ヨット競技大会に向けて「千葉県実行委員会総会」「競技運営説明会資料」「係員準備業務必携」「開催式・閉会式式典係員業務要領」「ヨット競技実施要領」「宿泊要領」「ヨット競技会運営マニュアル」「帆走指示書」「競技役員必携」などを作成した。

そして昭和５５年９月７日 秋空の下に浩宮皇太子を迎えて磯辺高校運動場での開会式も無事終わり 競技も始まった。

また 競技艇購入資金集めの一つとして日本ヨット協会公認のマーク入りの帽子として全国に先駆け第１号の赤いキャップを売り出したがアットい





第35回国体・ヨット競技会スナップ（昭和55年9月7日）

1.浩宮殿下御着席
2.競技役員・選手団入場開始
3.千葉県選手団入場
4.開会宣言・競技会会長：竹下登・日ヨ会長
5.国旗掲揚時の役員席
6.レース委員長挨拶：日ヨ・黒川規矩雄（故）
7.千葉県選手にお声をかけられる殿下
8.殿下にご説明の山本房生・日ヨ副会長
9.表彰台の、塚田監督（右）

❾

う間に売り切れたのには大変驚いた。

そしてその後各地で協会公認のマーク入りの帽子を販売し、夫々好評と聞いている。

なお その時赤いキャップとは別に競技スタッフ用として 色違いの青キャップをかぶっていたが 大会終了後に購入希望者が続出した。

競技日の中で かねてから 問題であった南風の強風に煽られて多数の沈艇が出たときその後始末に時間が取られ 宿舎のニューパークホテルに戻ったとたんに吉原先輩から 「お前 理事長として直接ヨット競技と関係の無い自衛隊幹部とか他の県連役員など客分に言いたいことを言わせて悔しくないのか、強風の中で沈艇処置は大変素早く出来たにも関わらず また地元の懸命の努力も分からず 救助活動が遅いとか勝手なことばかり言って酒の肴にされているぞ！」と非常に興奮しお説教を食らった。

何が何んだか解らず 先輩が一人興奮していたことだけが大きく記憶に残っています。

しかし 沈艇続出の中で 京都府の少年女子選手が、ひっくり返っては起こし、起こし ひっくり返ると言う文字どおり七転八起の挑戦を行い、消耗した身体にむち打って沈んだ艇を泳ぎながら起こし、遂にセールに風がはらんで走り始めた時、見守る自衛隊全員から期せずして拍手が沸き起こりました。

私も見ていて 大変感動したことを覚えています。

その彼女達が無事完走したのも驚嘆に値いし、京女のど根性はまさにシーマンシップそのものであり、大会髄一の感動的なシーンでした。

そして 大会の最大のハイライトは少年女子チームの高沢、東軒組（磯辺高校）が嬉し涙で優勝フィニッシュをした光景も忘れられないものとなりました。

競技運営のなかでは 県連スタッフの中に海上自衛隊の通信隊に所属していた人（坂田利夫中尉、国体運営委員通信部長）がいたことが 大変便利なことが立証されたと思っています。

また 群馬県連は金だけ出して千葉県連に一任のようだったが、水無し県の弱さを感じた。

競技結果は 総合優勝 佐賀県、２位 千葉県、３位 神奈川県であったが 千葉の成年男子の弱さ 特にスナイプクラスの強化が課題となった。

１０月１０日 大会も無事閉会式を迎え 全スタッフが優勝した県連の選手とともに 逃げる理事長の私を捕まえハーバーに投げ込み 夕暮れの海を泳がされ儀式も終わった。

あらしのような１週間が過ぎ海岸に秋風が吹くようになり 落ち着いた頃 山のような書類の整理と収納場所に困った。

審判委員、計測委員など千葉県連のメンバーのなかからもこの国体運営を機に多数の人達が資格取得が出来て、将来の県連運営の軸が整えられたことも 歴史から見ても良かったことと思っている。

また 県体育課の人達（千葉県実行委員会）は「ヨット競技報告書」を作成し永く記録を留めることになった。

国体を機に競技力の向上を願い、ハーバーの整備を願ったが あれから１８年経ったが我々の期待どおりであったか、想い出だけ残る今日この頃である。

ただ 当時のメンバー全員のヨットにかける熱意が国体を成功裏に終えた要因に間違いないと彼ら全員に感謝したい思いを 未だ持ち続けていることと 彼らと一緒に大きな想い出を残せたことが 私にとっては大きな財産となっている。

回想:昭和３６年～平成１１年(１９６１～９９)
私のヨット活動

副会長:小川勝

５０年記念誌の発刊に当たり、私のヨット活動歴を書いてみたいと思います。昭和３５年県立安房水産高校入学と同時にヨット部に入部する。（５期生）３６年関東インターハイ(横浜市民ハーバー)にS級にて出場。１６回国体(塩釜)に高校S級に出場(２年)。フィン級の初めてのレースが行われ千葉県は穂積選手(ローマ五輪出場元日ヨ協会理事)が参加。一般男子S級には石津昭三選手(県連顧問、日セ連盟顧問)がスッキパーで参加。一般女子国際１２呎デンギーには旭硝子チーム(深井、小野木)が国体２連覇し、総合成績も４連覇の神奈川県を１点差で押さえて、天皇杯初優勝、皇后杯は２連続優勝した。優勝チームの一員として参加出来光栄に思い、今後のヨット活動の励みになった。川名正義会長も参加された３７年、関東インターハイ通過。インターハイ(高松)出場、瀬戸内の潮に負ける。１７回岡山国体(玉野市渋川)に高校S級で出場３位入賞する。

３８年１８回山口国体(光)に１９歳監督として参加。高校S級２位、F級３位の成績を上げる。３９年１９回新潟国体(両津)に一般男子F級に出場３位入賞、天皇杯２位に貢献した。堀江忠寿選手(県連副理事長　川鉄)も一般S級で入賞した。４０年２０回岐阜国体（愛知蒲郡）一般F級に出場、連続３位入賞した。４１年大分国体、４２年埼玉国体連続出場。国体６回出場入賞３回は後輩の吉田豊君出場するまでは出場入賞も最多であった。

４５年若潮国体（館山)準備開始につき、県連競艇委員長(ハーバーマスター)として組織委員会の一員となる。国体使用艇と器具備品の選定と購入を県国体局と交渉する。当時の県国体局の担当者が、県連新会長に就任した荒川昇先生である。スナイプ艇のメーカー変更に関して重大な決定をしていただいた。

４８年若潮国体川名会長、吉原理事長以下県連総力を上げて、２度目の天皇杯優勝と大会成功と有終の美を飾る。４日間の競艇部関係のトラブルは１５２件発生したが当時スタッフの協力により当日処理が出来、協力関係の大切さを実感した。

４９年国体終了と共に購入品の処分について、国

16回国体高校チーム(安房水)12呎ディンギースナイプ
17回国体(岡山)千葉県チーム

56年の千葉県オープン・館山での清川副会長

フレッシュウインド

AUG.31'81 NO.5

FRESH WIND

Chiba Yachting Federation

書類送付

住所変更

RACE NEWS

会合

体局との多大なる交渉の結果、スナイプ艇４８艇の県内払下げに成功する。県連１７、館山市３、安房水１２、安房南６、銚子水７，勝浦３、この払下げにより各団体は以後レースや練習に活用された。その他ゴムボート３、フィン艇６、競技用具等は以後の県連活動の基礎となる。荒川先生、県当局の御高配に感謝。

５３年長野国体の開催に県連スナイプ２０艇を整備貸出する。５５年栃木国体の代替を千葉県稲毛での実施が決定（千葉国体）。

５４年千葉国体の準備に県連総力を上げて行動する。

５５年千葉国体が稲毛の仮設会場で浩宮様（皇太子殿下）の初めての国体視察として行幸されて実施される。悪天候に見舞われたが無事終了する。本国体の実施がなければ国体からヨット競技が削除されていたかもしれなかったのである。

５６年県連理事長に就任（３６歳）若輩ゆえスタッフ全員に協力をお願いしてスタートラインを横切った。広報委員会よりフレッシュウィンドが発刊された。

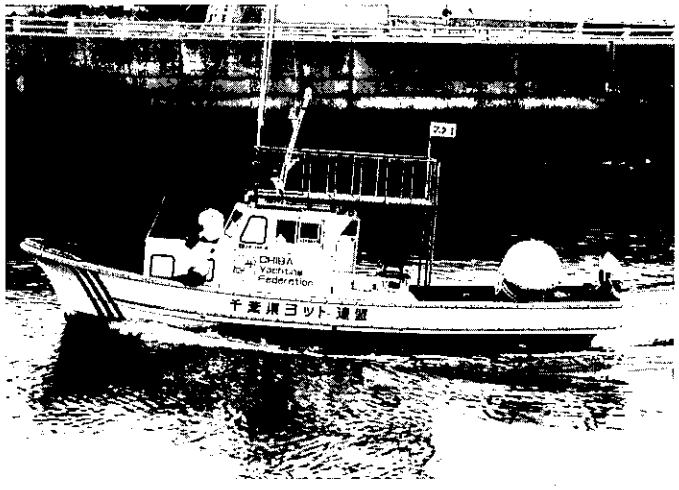
５７年安房水の川名勘之助先生逝去。勝浦で若潮ヨットレースを開催。稲毛ヨットハーバー仮オープン。種々の協力事業が開催される。

57年第一回若潮ヨットレース大会（勝浦）

56年秋、選手強化のためオリンピック出場の箱守選手招へい勉強会

５８年稲毛ヨットハーバー開港。県連活動も新局面を迎え組織の活性と充実を図る。普及レース、ヨット教室、帆走認定、安全指導、レスキュー体制等の企画と実施を関係団体と競技協力して行う。現在まで大きな事故もなく活動して来た実績はハーバー当局、関連協力団体、県連及び利用者の親密なる協力の賜物である。川名正義会長、清川彰副会長逝去される。

５９年松戸会長就任。県連所有のレスキューボート「はまゆうII」を購入し就航する。



６０年全日本S級選手権（稲毛）実施。千葉市に海王丸ピンネス型カッターを寄贈、ハーバー内に展示される。

６１年FJ級全日本開催。安房水高の実習船を県教育委員会と交渉し寄贈を受けてはまゆうIIIとして就航させ海上本部船として現在活躍中である。

６２年境港FJワールドで勝浦高校、長谷川、島津組優勝。

６３年全日本FJ開催。磯辺高校、三浦、松倉組優勝（磯辺高校チーム３年連続４回目）。

平成元年、県連初の冠大会サンウェーブカップ'８９（稲毛）県内３回目の全日本FJ全日本女子スナイプ、全日本Jrスナイプの３種目の同時開催を行う。FJ級は磯辺高校、浅利組優勝。FJワールド（オランダ）で葛西、土屋組銀メダル。

平成２年北京アジア大会OP級に関一人選手（CYBC出身）金メダル。

平成３年FJワールド（イタリア）葛西、小杉組銀メダル。

平成４年山形国体にて１９年ぶり３度目の天皇杯。選手、監督、コーチ、スタッフの活躍に感動し感謝する。

平成５年稲毛で'９３FJワールド選手権を開催。海外国内１３６チームの参加。３年間の準備。開催を県連一丸となり成功に導く。ワールドは多くの人々との出会いと友情協力が大切なレースである。

この経験を大切に大きな自信としてください。

県連理事長退任。多くのヨットマン、スタッフの協力により無事１３年間の理事長の責務を果たせていただき感謝しております。

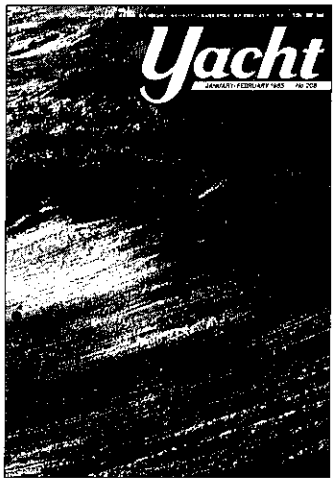
平成１１年４月、１９６１～９３まで一選手、監督、理事、常任理事、理事長として３２年間多方面のヨットマンとの交流の場として千葉県ヨット連盟の運営発展に参加することが出来、感謝しております。創立５０年を迎え、荒川新会長のもと今後共末席副会長として、新生千葉県セーリング連盟の発展の為、微力を尽くす心算です。

昭和58年７月告別式後、川名会長をしのんで日ヨ・米沢副会長、関東・佐藤会長を囲んでヨット談議を、館山「波奈」にて交わす。

1993FJ級ヨット世界選手権大会(7月22～28日・稲毛)スナップ

優勝日本(千葉県連)チーム
スキッパー高木克也(右)クルー浅利桂一

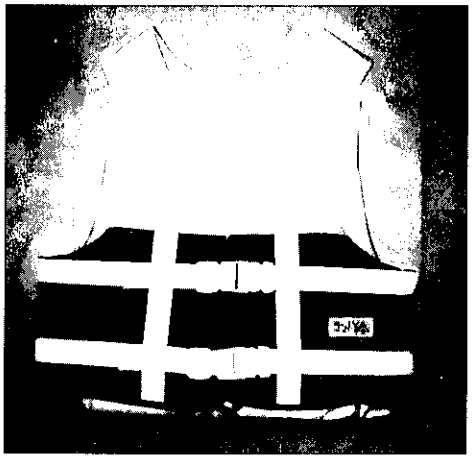
Ⓐ 館山ではハンドマイク、稲毛ではそれなりの機器が。設営中の篠田部長
施設経営には普遍性が…。運営にはNPO法導入時代が来るか。



Ⓑ 初仕事の85年1月208号
最後は281号

Ⓒ プサンヨットハーバーで、出廷後のポンツーンで吉原さんと記念写真。ドラマチックなシーンを数々収める。
ブリテンや出版物に利用させていただいた。未使用写真は在庫の山。

Ⓓ 運営側に欠かせない公式帽子を開発、特許の装置で飛ばされない!
救命胴衣をセーリングジャケットとして発想して開発。
レースだけでなく練習時に、ゼッケンが背面につけられる便利もの。



Ⓔ 日本の将来を語り合ったお一人。J.Y.A.ユース立ちあげた翌年、日ヨパーティで

回想：マイボランティア25年

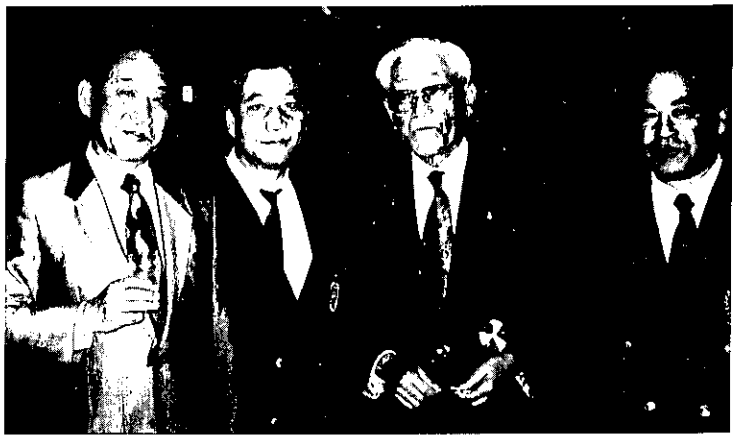
副理事長：前川　清

東京オリンピックの２年後、６６年５月電通千葉支局勤務となり東京は中央区新富町から通いはじめる。連日残業の多忙に耐えかね６８年八千代市へ転居、県人口３００万人の一人に――。５年後の７３年は若潮国体、クライアントのちばぎんは創立３０周年を迎えていた。私が千葉副会長とヨットの会話を交わしたのが７４年頃と思う、手元に７５年６月第１回館山オープンのスナップ写真（１３頁）が県連アルバムの第１頁にある。朝５時起床でマイカーによる館山通いが始まった。お手伝いは総務関連、しかしカメラは常に持参、決定的な記録写真を心がけた。そして５年後、稲毛国体を迎えるのである。

稲毛国体は森田顧問の回想に詳しいので省略するが、「プログラム記載事項訂正届」を綴じ込んだのと「協会マーク使用帽子」は稲毛からであった。私の担当はプログラム制作と広報部、行啓担当でもあった。翌８１年総務委員長拝命、７月に築地の東京本社勤務に。８２年秋、ハーバ陸置開始で稲毛時代Ⓐが始まった。すでに日ヨ理事の吉原副会長から賛助会員への感謝額デザイン依頼が…８４年の年末にはブリテン編集長の要請…受諾。Ⓑ（９２年５月号までの７年半）。８５年県連副理事長拝命。８７年４月日ヨ最高顧問小沢吉太郎「追悼の会」。Ⓒ８８年ソウルオリンピックに参加。９０年県連の総力で日ヨ理事に当選、感謝。Ⓓ事業委員長、全国ターゲットのグッズ開発。Ⓔ９２年JYAユースを亡き森繁泉さん達と立案。Ⓕ９３年２月日ヨ６０周年記念パーティで。Ⓖアジアヨット選手権広島のマークデザイン。Ⓗ９４年日ヨ功労賞受賞された松戸会長と。９６年事業本部副本部長。９８年２月電通定年退職、４月５０周年記念誌編集委員長、編集室をイメージコズモスに依頼し編集に入る。９９年１１月記念式典。

Ⓕ 竹下名誉会長就任後の記念の図。　中央（私）、千葉・小川両副会長と県連テーブルを囲んで。左：高橋・元総務。右：吉田豊強化部長

Ⓖ



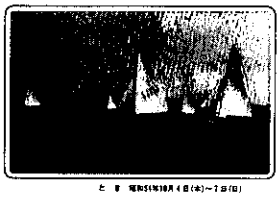
Ⓗ

第1回館山オープンレガッタ

昭和50年6月15日(日)

主催　日本ヨット協会
主管　千葉県ヨット連盟
後援　日本船舶振興会
　　東京都ヨット連盟
　　千葉テレビ

第6回
全日本自治体職員ヨット競技大会
兼
第35回国民体育大会ヨット競技リハーサル大会



と き　昭和51年10月4日(土)～7日(日)
ところ　千葉市(国鉄)稲毛ヨットハーバー

主催　財団法人日本ヨット協会
　　千葉県・千葉県教育委員会
　　千葉市・千葉市教育委員会
　　第35回国民体育大会実施大会ヨット競技会
　　千葉県実行委員会
後援　日本スナイプ協会・関東ヨット協会
　　財団法人千葉県体育協会
　　財団法人千葉市体育協会
主管　全国自治体職員ヨット連盟
　　千葉県ヨット連盟

1都10県対抗ヨットレース

inage

会期　昭和[illegible]年8月23日(土)～24日(日)
会場　千葉市稲毛ヨットハーバー

東京都・神奈川県・静岡県・山梨県・埼玉県
主催：栃木県・長野県・茨城県・千葉県
各都県ヨット連盟　後援：[illegible]

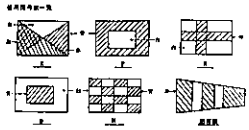
1981
第7回
千葉県オープンヨット選手権

期日　昭和56年8月20日・21日
会場　館山湾・安房水産高校ヨットハーバー

主催　(財)日本ヨット協会
主管　千葉県ヨット連盟
後援　(財)千葉県体育協会
　　スポーツニッポン新聞社
　　千葉日報社
　　千葉テレビ放送
　　東京都ヨット連盟
　　長野県ヨット連盟
　　山梨県ヨット連盟
協力　ヤマハ発動機(株)東京支店
　　(株)昭和
　　セントラルボート(株)
　　(株)成和
　　ヤマハ千葉(株)

1983
第9回
千葉県オープンヨット選手権

期日　昭和58年8月18・19日
会場　千葉市・稲毛ヨットハーバー



'85
ALL JAPAN CHAMPIONSHIPS
INAGE CHIBA

第4回FJ級ヨット全日本選手権大会

'86 ALL JAPAN CHAMPIONSHIP
INAGE CHIBA

第1回
[illegible]ヨットスクール(初心者コース)
新しく変化する時代に備えて

●開催日
Aコース 7/26～28
Bコース 8/2～4

●会場
(東日本会場)
稲毛ヨットハーバー TEL.0[illegible]
千葉県千葉市稲毛区[illegible]
(西日本会場)
KK[illegible]ロッジ TEL.0[illegible]
[illegible]

---

sunwave CUP '89

全日本FJ級ヨット選手権大会
第24回全日本女子スナイプ級ヨット選手権大会
第3回全日本ジュニアースナイプ級ヨット選手権大会

1989年8月17日(木)～21日(月)
INAGE CHIBA

'89
ALL JAPAN CHAMPIONSHIPS
第42回全日本スナイプ級ヨット選手権大会

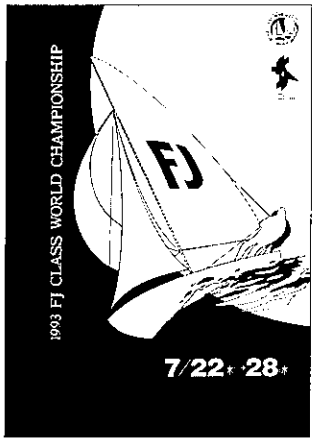
1989年11月8日(水)～12日(日)
INAGE CHIBA

'90
全日本FJ級ヨット選手権大会

ALL JAPAN CHAMPIONSHIP

1990年8月16日(木)～20日(月)
INAGE CHIBA

1993 FJ CLASS WORLD CHAMPIONSHIP



7/22 ～ 28

目次（敬称略）

加盟団体のあゆみ

実業団のあゆみ……76

ヨットエイドジャパン千葉……79

川崎製鐵ヨット部……80

千葉銀行行友会ヨット部……82

京葉銀行ヨット部……84

東洋エンジニアリングセーリングクラブ……86

三井造船ヨット部……90

千葉県庁ヨット部……92

千葉ヨットビルダーズクラブ……94

三井建設ヨット部……97

ドルフィン・クルージング・クラブ……98

千葉日産自動車ヨットクラブ……100

千葉市役所セーリングクラブ……101

千葉大学ヨット部……102

千葉工業大学体育会ウインドサーフィン部……106

千葉県高体連ヨット専門部のあゆみ……108

磯辺高校ヨット部……114

磯辺第一中学校ヨット部……118

銚子ヨットクラブ……120

千葉市セーリング協会……122

富津市ヨット協会……124

実業団のあゆみ

東洋エンジニアリングセーリングクラブ：
岩瀬弥一郎

'94年　第20回実業団前夜祭富田杯寄贈

1．歴史

(1)昭和49年～平成元年

実業団のヨット活動が本格的にスタートしたのは昭和48年の千葉県での、わかしお国体とその前年のリハーサルの運営・手伝いの時からである。これ以前には、川崎製鉄(昭和37年創設)、東洋エンジニアリング(TEC。昭和47年創設)、千葉 銀行(昭和37年創設)等が、館山を拠点として各社で社内同好会組織として活動していた。川崎製鉄は、堀江氏（昭和37年入社／現千葉ゼネラルアテンド社長）を中心に、昭和38年より千葉県代表として国体に出場しており、全国でも最強豪に属するチームとして活躍していた。わかしお国体終了後、ＴＥＣ 富田氏(元取締役。故人)三井造船 元山氏(現常務取締役／昭和41年入社)、川崎製鉄 堀江氏、大原氏（現川鉄マシナリー）らの発意により、千葉県実業団レースを毎年開催していくことが決まった。

翌昭和49年に、那古船形の稲毛マリーン(当時。故山田社長)をベースに館山沖で、川鉄、TEC、三造の3社の参加により、第1回目のレースが行われた。この時は、各社Y-15 2艇づつの合計6艇で競われ、川崎製鉄 堀江氏が見事優勝を飾った。また、第1回目より、前夜祭が恒例行事化され、レース前は和気藹々、レースは本気(?)の伝統が現在に至るまで受継がれている。

翌50年からは、千葉銀行(元副頭取 ヨット部長　千葉氏。ヨット部監督 斉藤氏)、千葉県庁(昭和50年創設／桜井部長)、51年には三井建設(昭和50年創設／ヨット部部長 市川氏)が新たに加盟し、6団体体制となった。この時、川崎製鉄より、三浦杯が寄贈され、優勝団体に送られることとなった。また、千葉県ヨット連盟の広報担当であった電通(前川部長)、千葉日産(森田部長)、タクトもレースへの参加はなかったが、実業団に加盟し、活動していた。千葉電通は、現在も前川氏が千葉県ヨット連盟副理事長として、広報を担当している。

昭和57年の第8回までは、6社が持回りで幹事を務め、館山沖でレースを開催し、千葉県ヨット連盟の行事として定着した。昭和54年の第5回大会は、当時ポンドのみ完成していた稲毛ヨットハーバーで、実績造りのため、レースが開催された。

昭和58年の第9回大会からは、各社とも活動拠点を館山から稲毛に移し、実業団レースも以後毎年稲毛で行われることとなった。

第1回から第15回までの成績は、川崎製鉄が圧倒的に強く、11回目まで11連勝を記録している。

(2)平成2年から現在まで

平成2年は、日本建鐵（青山ヨット部長）が新規加盟し、7団体体制となった。また、平成3年には、更に京葉銀行(平成3年創設／現副頭取　綿貫ヨット部長。土橋監督)、千葉市役所(白井ヨット部長)も加盟し、9社体制となった。京葉銀行は、優秀な選手、スタッフ、新艇、救助艇を所有し、良くも悪くもマンネリ化していた7社に活を入れる加盟となった。加盟後の活躍はめざましく、翌年から磯部高校OBの福田(平成３年入社)、長谷川(平成３年入社)らの活躍で、5連覇を果し、レースレベルの向上に寄与した。

また、一部の団体では、対外レースにも積極的に参加している。平成7年の国体には、スナイプ級に京葉銀行　福田／長谷川、470級に千葉銀行　中村（平成4年入社／磯部高校OB）が出場し、活躍した。

TECからは、武井(平成４年入社)、鈴木(平成５年入社)、大和(平成５年入社)、神尾(平成６年入社)らが、国

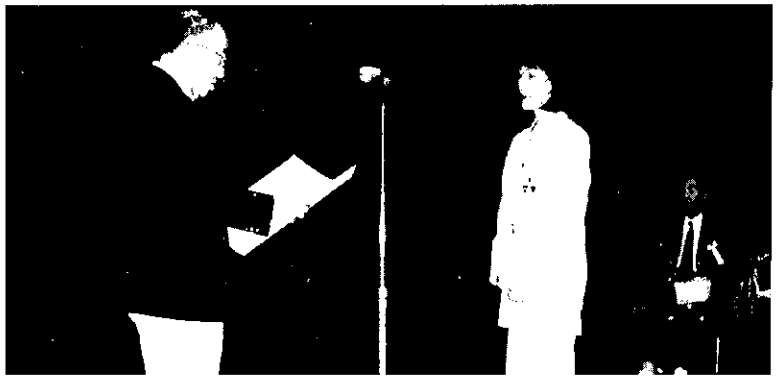
'92年　第18回表彰後の記念写真

第18回実業団レース開会式

'98年　実業団レース風景

内のレーザー選手権に積極的に参加し、好成績を上げている。更に平成8、9、10年と3ヶ年に亘り、国体成年女子に京葉銀行　土屋（平成8年入社／磯部高校OB）が出場し、好成績を上げている。

一方、平成６年3月には、実業団の生みの親であったTEC富田取締役が、出張先で急逝し、TECはもとより実業団にとっても、大きな痛手であった。翌年には奥様の富田和子様より「富田杯」が千葉県ヨット連盟に寄贈され、実業団レース優勝団体に送られることとなった。各社とも毎年富田杯と三浦杯の美酒に酔うことを目標として、レースに参加している。



平成６年日ヨより国体成績ソフト開発で、感謝状を受ける富田和子さん

２．活動

実業団は、千葉県ヨット連盟が主催するレース、行事運営の中核的役割を果している。毎年4月に開催される総会において、役割分担が決められるが、月1～2回のレース運営、市民向けヨット教室による普及活動を分担して行っている。

加盟団体とも、土日を海での練習・活動日としているが、最近は新規加入者にあえいでおり、会うのは行事の時のみ、かつ同じ顔ぶれと若干寂しいこの頃である。ただ、毎年秋に行われる実業団レースは、各社とも年1回の一大行事(?)であり、選手集めに四苦八苦しながらも、幹事会社(9社で持回りとしている)は、レースよりも前夜祭の場所選びと進行に全勢力をそそぎ込み、久しぶりの再会を楽しむ機会となっている。

レース好評中の在りし日の富田さん。

三浦杯を渡す三浦会長。

3. 実業団レース記録

年	回	優勝	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位
S49	1	川鉄	TEC	三井造						
S50	2	川鉄	TEC	三井造	千県庁	千葉銀				
S51	3	川鉄	三井造	TEC	千葉銀	三井建	千県庁			
S52	4	川鉄	三井造	TEC	千県庁	三井建	千葉銀			
S53	5	川鉄	三井造	TEC	千県庁	三井建	千葉銀			
S54	6	川鉄	三井造	千葉銀	三井建	TEC	千県庁			
S55	7	川鉄	三井造	TEC	千県庁	三井建	千葉銀			
S56	強風のためレース中止									
S57	8	川鉄	三井造	TEC	千県庁	三井建	千葉銀			
S58	9	川鉄	TEC	三井造	三井造	千県庁	千葉銀			
S59	10	川鉄	TEC	三井造	三井建	千葉銀	千県庁			
S60	11	川鉄	TEC	三井造	千県庁	千葉銀	三井建			
S61	12	千県庁	川鉄	TEC	三井造	三井建	千葉銀			
S62	13	川鉄	TEC	三井造	千県庁	三井建	千葉銀			
S63	14	川鉄	三井造	TEC	千県庁	千葉銀	三井建			
H1	15	TEC	川鉄	千県庁	三井造	三井建	千葉銀			
H2	16	川鉄	千県庁	三井建	TEC	三井造	千葉銀	日建鐵		
H3	17	川鉄	京葉銀	三井建	TEC	三井造	市役所	千県庁	千葉銀	日建鐵
H4	18	京葉銀	TEC	市役所	千県庁	川鉄	三井建	三井造	千葉銀	日建鐵
H5	19	京葉銀	川鉄	TEC	千県庁	三井造	日建鐵	三井建	千葉銀	市役所
H6	20	京葉銀	千葉銀	TEC	川鉄	日建鐵	千県庁	三井造	市役所	三井建
H7	21	京葉銀	TEC	三井造	千葉銀	川鉄	千県庁	三井建	市役所	日建鐵
H8	22	京葉銀	TEC	川鉄	三井造	三井建	千県庁	日建鐵	千葉銀	
H9	23	TEC	京葉銀	三井造	川鉄	千県庁	千葉銀	市役所	三井建	日建鐵
H10	24	京葉銀	千葉銀	川鉄	TEC	千県庁	三井造	市役所	三井建	
H11	25	TEC	京葉銀	千葉銀	川鉄	三井造	千県庁	市役所	三井建	

・第22回大会は、千葉市役所欠場。　・日本建鐵はH10年に千葉県実業団を脱退。　　網掛けは、幹事会社

ヨットエイドジャパン千葉

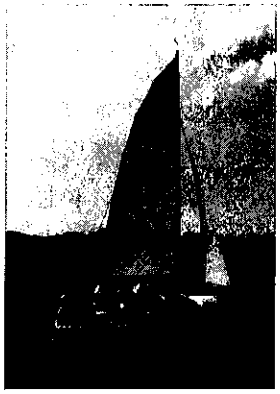
「ヨットエイドジャパン」(以下ＹＡＪと略記)は障害者のヨット活動を支援する団体です。本部は１９９０年に活動を開始し、「ＹＡＪ千葉」はその２番目の支部として１９９５年に設立されています。

アメリカやカナダでは１９８０年代後半から障害者ヨットが始められており、船の開発・改造も進められていました。日本ではＹＡＪが最初に障害者ヨットをはじめ、米国の福祉団体シェイクアレグが障害者用に改造した小型クルーザー「フリーダム・インディペンデンス」を購入し、夢の島マリーナを拠点に初心者の育成を始め、現在では東京、千葉、神奈川、東海、近畿、新潟と広がっております。

海外レース参加の折、ニューポート（北米）で「インターナショナル２.４ｍ級」に出会い是非日本に持ちかえり使用したいということで３艇購入しました。この船は手のみで操船できるように工夫された固定キールのディンギーです。

その活動拠点をどこにするかで、紆余曲折ありましたが、御存知のように建設当初より障害者対策が考慮されていた稲毛ヨットハーバーに決定致しました。稲毛で活動を始めるにあたり、当時の海洋スポーツ協会、千葉市障害福祉課に協力求め、車椅子用スロープの造設、トイレの改善、車椅子用駐車場等々各種のご配慮をいただいた結果、現在では日本屈指の障害者対応ヨットハーバーだと言えます。近い将来、車椅子の安全も考慮したポンツーンの改修がなされるそうです。

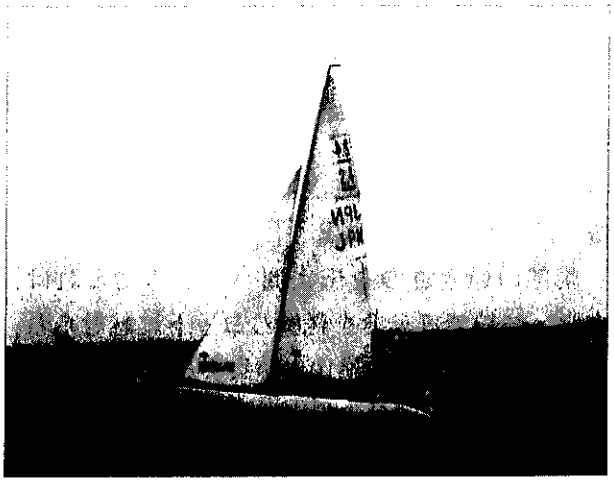
現在は初心者練習用に「フリーダムインデペンデンス」上級者用に「インターナショナル2.4m級」を使用しておりますが、「インターナショナル2.4m級」は1人乗で、乗りこなすまでに少々の難があります。この問題を解消すべく、カナダで開発した「マーチン16」（後部に指導者が乗船可能）の導入に資金の調達を計っております。



主な活動内容は毎月第一、第３土日に通常の練習。５月、６月（浦安マリーナ）、９月にクルーザーを使っての体験会。他にＹＡＪ本部主催の障害者レースなどがあります。

アトランタパラリンピックに参加し「ソナー」「インターナショナル2.4m級」のワールドにも出場し、来年のシドニーパラリンピックの出場権までは獲得してあります。

ＹＡＪ千葉では今後、競技にも力を入れ、独自のレースを開催していきたいと考えております。つきましては千葉県セーリング連盟には更にお世話に成ると思いますが、今後とも宜しくお願い致します。



インターナショナル２.4m級

川崎製鐵ヨット部

桂重史

川鉄ヨット部は、昭和３６年の創部以来、今年でまる３７年と非常に長い間活動を継続、合わせて千葉県ヨット連盟に参画してきた。

その歴史を振り返ると、創部当時は国体を目指すレーサーが中心となり、館山を中心とした練習活動を行っていた。また製鉄所の一画に船置場を設けて、平日の夕方に製鉄所の沖合いで練習するといった努力により、国体選手も何人か輩出している。正確な記録が無く不確かではあるが、杉野、堀江、玉越、小島、大原といった部員が国体で活躍している。稲毛フリートに移った最近では，北林（旧姓：青木）が59年より63年までで4回参画，特に63年では成年女子準優勝といった輝かしい成績をおさめた記録が残っているが，それ以降本格的にレーサーを志す部員が入部することも無く、部員数12名で県連の行事参画を中心に細々と活動を行っているのが現状である。

一方、ヨット部長としては、初代の佐々木氏に始まり、三浦氏、板谷氏、西野氏、今井氏、手塚氏、安永氏と現在で7代目を迎えている。

今回、当部の紹介文作成にあたり、創部以来、今日まで当部の中心メンバとして活動くださっている県連副理事長の堀江氏並びに、昭和４０年に当部に入部し、現在県連の常任理事として参画頂いている大原氏の二人に、当部での思い出、ヨット活動での思い出をまとめて執筆して頂くことにした。

●川鉄ヨット部の思い出　　大原末光

創部のいきさつを伝え聞くところによれば、大学・高校でヨットを経験しヨットに魅せられ、ヨットを続けたい人達10人が集まり、その友達も仲間に入れ、当時の大学出初任給25千円の中から１人10千円を出し合いＹ-１５（艇No.：332）１艇を購入しスタートしたとのことである。ちなみに当時、Ｙ-１５の値段が１２．５万円という記録が残っている。

その後会社からの補助も得てＹ-１５（艇No.：４５２）とＡ級ディンギー計３艇により活動し、昭和４０年には県連のフィンも加わり４艇でのトレーニングが長年続けられた。

艇置場は川鉄と東京電力の間に有った造船所の一画を借り、わずかに残された砂浜を発着場所に日曜・祭日（当時は週休１日）のセーリングを楽しんでいた。

又、当時は１６時が終業時間であったので、夏場には昼休みに艤装をし、終業後会社の仲間を連れてセーリングを楽しんだことも良き思い出である。

部員はレーサーを目指す人とセーリングを楽しむ人が混在していたが、お互い上手く噛み合っていたし、２回／年社内ヨット講習会を開催し、なかなかの人気であった。

製鉄所沖合いには砂浜が広がり（現在は西工場となっている）良き遊び場であり休息場であるとともに、良き避難所ともなり、救助艇の無い川鉄ヨット部に事故が無かったのもこの砂浜のおかげだと感謝している。

さて、苦労した思い出の一つにメンテナンスが上げられる。これは当時のヨットマンに共通のことであろうが、木造艇Ａ級ディンギーの艇整備、セールの洗濯、ハリヤード等の部品調達である。幸い製鉄所内には船具職人がいたため、ワイヤーロープ、シンブルとタバコを持っていき所定の長さに加工してもらったとか、大きな風呂場でセールを洗濯したといったことがいまだに記憶に残っている。自作部品はハリヤードだけでなく、バテ

ンからアンカまで自力で部品を製作、使用していたものであった。

またこの頃の思い出に館山での合宿がある。１つは海の色の違いであり、毎週このような海でセーリングを楽しめたらすばらしいだろうなという思いとともに、富津岬を境に東京湾の海の汚れを感じたのも、館山の海のすばらしさからである。

そしてもう一つは合宿直後館山から千葉までのＹ-１５，２艇によるナイトクルージングである。年により強風もあり、微風に悩まされた年もあったが、川鉄ヨット部の当時の若手陣には良き思い出の一つとなっている。会社での待ち組は、予定の時刻をとっくに過ぎても帰港せず心配したことも有り、今思えば無茶をしたという感もあるが、部員がヨットの魅力に取り付かれた一つの要因であったと思う。

このような部活動の結果として、昭和３７年から何年間か国民体育大会へも連続して選手を送り出せたし、千葉県実業団選手権では第一回大会から第十七回大会までの初回からの11連勝を含めて、合計１５回の優勝を果たすことが出来た。

ところが、稲毛に念願のヨットハーバーが建設された頃から、環境が良くなったにもかかわらず部員が減少し始めてしまった。ヨットが高い、ヨット経験者の入社が少ない、シングルハンダー主体になってしまったため、素人からの育成がしずらい等が挙げられると思う。

平成１０年、第２４回大会を数える千葉県実業団選手権では、微差で３位であり、もう一歩のところであった。

川鉄ヨット部が再度力を付けることを願い、微力ながら努力していきたいと思っている。

●千葉県セーリング連盟と私　　堀江忠寿

私は昭和３７年川崎製鉄に入社しました。

高校、大学でヨット部に属していた私は、社会人になってからも是非ヨットを続けたいと思っていました。

入社する２年前には当時私の活動フリートであった宮城県で国民体育大会が開催され、その頃の千葉県は旭ガラス(株)、安房水産高校を核にした国体でも最強豪に属するチームでした。

当時の国体予選は横浜で行われる関東レースで、千葉県選手の中で優秀な人が選抜される方式を取っておりました。そこで私は当時の吉原理事長のところへ、国体予選の参加をお願いに行きました。その結果川鉄チームも３８年以降欠けることなく数回国体に出場出来たことは本当に有り難いことでした。

あの頃の人で今はなくなられた特にお世話になった人を挙げると、まずは合宿に良くこられ正座をさせられ檄をとばされた、当時日本医師会副会長であり千葉県ヨット連盟の会長であった川名正義先生、安房水産高校の川名勘之助先生は、合宿時の救助艇を含む艇の整備等館山合宿では欠くことのできない人でした。また当時合宿所としていた松善旅館の“だんな”です。相撲取りのように頑健な人でしたが交通事故でなくなられました。

その後稲毛のヨットハーバーが出来て、中心が千葉に移りましたが、その間にあって安房水産高校に元気がないのが残念です。

さて私は、千葉県のヨットについて聞かれた時、次の３つの事を自慢します。

1. 強風に強い事。これは救助艇を良く整備し安全確保しての練習効果が表れていると考えます。特に、女性陣の強さは自慢できるものでした。
2. ヨットハーバでの実技テストを行っている事。たいていのヨットハーバはヨットによる海難死亡事故を経験しているが稲毛にはこれが無いこと。
3. 今はクラブメンバーでは常識となっているブレザーを、日本ヨット協会に先んじてヨット界では先陣をきりエンブレムを決め行なったこと。

最後に千葉県ヨット連盟がこれからも大いに発展し自慢出来ることがますます加わることを願っております。

千葉銀行行友会ヨット部

監督：斉藤正敏

マネージャー：山口幸久

平成3年 千葉県実業団ヨット選手権レース参加者

●昭和37～昭和54年

千葉銀行ヨット部の歴史は、昭和37年頃の千葉市ヨットクラブ（CYC）までさかのぼる。
CYCには、当行から千葉滋胤、三谷正之（両顧問）が所属していた。昭和39年の夏には、斉藤正敏も誘われCYCに所属した。これが当行ヨット部の前身である。

当時は、埋立前で、現在“こじま”のある場所がハーバーであった。埋立の杭によくシートをひっかけ沈をした事があった。

昭和44年にオーストラリアモスを購入し、3人でヨット部を創設し、当行館山寮を保管場所として活動した。昭和45年に小掘進己が入部し、モス4艇となった。昭和48年には館山支店に所属していた実方尭年、原田敬、高橋潤等が入部し、昭和50年にはレーザーを購入し館山フリートに参加、また、千葉滋胤、清水一郎、村田恒夫、小松利光が、稲毛フリートに参加した。特に、原田敬は、全国にレースを展開し、館山時代の全盛期を迎えた。また、当時は、女子部員（中村、小島、杉枝、吉田、山崎）もいて大変華やかであった。
この頃、実業団レースにも仲間入りし、ヨット教室も開催され、現在の当部の部長である土肥光芳は、その時の生徒である。また、毎年のように、新年初乗り会も行われた。
夏の期間中は、海の家“ひさご”を基地として行われた。毎週のように“ひさご”で楽しい時を過ごした。“ひさご”の人たちには大変お世話になった。艇の保管場所であった館山寮では、管理人に毎週月曜日早くからうるさいと言われたり、また、寮の入り口が狭く艇の出し入れに大変苦労したことが思い出される。

●昭和55年～平成3年

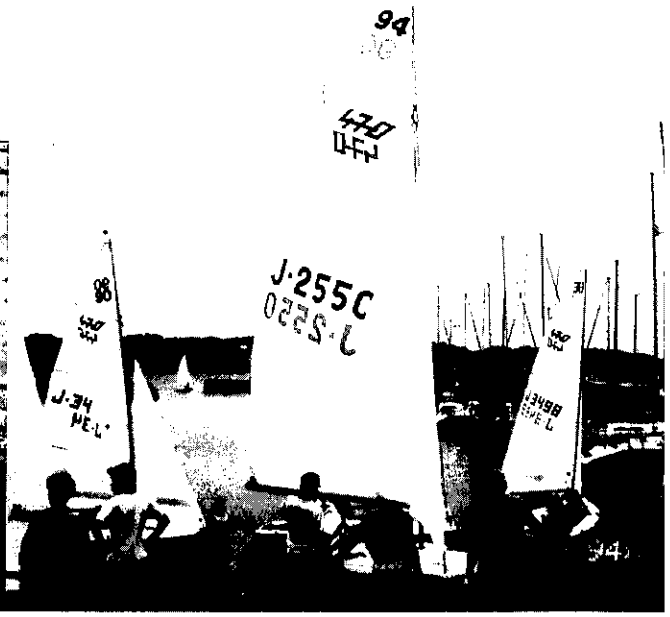
新入部員として、昭和55年に山口幸久、昭和57年に新井智が入部した。両名とも大学時代にヨットを経験しており、若干マンネリ化した当行ヨット部に新しい風を入れることになった。
昭和58年に稲毛ヨットハーバーが完成し、練習の拠点が館山から稲毛に移行した。稲毛ヨットハーバーには、レーザー、シーホッパー、シカーラの3艇を陸置し、新しい環境でヨット部がスタートした。しかしながら、館山と稲毛の両方で練習をしていたため、部員全員が集まる機会が少なくなり、活動も低調になってしまった。
平成元年に、宮城和彦が入部した。彼もまた、大学時代の経験者であり、これを機会に、実業団レースでの上位進出への人材が揃ってきたかに見えたが、結果は惨憺たる状況であった。

●平成4年～平成10年

平成4年度は、当行ヨット部にとって、従来になく充実した年となった。新人4人の入部、うち2人は大学の体育会ヨット部出身で、全日本インカレ出場選手である。470級経験者ということで、国体選手を養成するためにも、470艇の購入を急がねばならなかった。こういう状況のもとこの年の470級艇（中古艇）の購入に踏み切った。平成元年入社の宮城和彦、平成4年入社の4人、村上貴弘、中村明弘、斉藤茂光、和田孝彦この5人を中心に、稲毛ヨットハーバーでのレース、また、翌年の国体予選を目指し練習を行うこととなった。
翌平成5年に、470級（中古艇）をもう1艇購入し、2艇で練習できる体制になった。
この年の5～6月にかけては、江の島へ遠征し、関東470級選手権大会に参加し、実力を試す機会

平成6年 江の島関東470級選手権参加 ▶

平成6年千葉県実業団ヨット選手権準優勝祝勝会 ▼



をもった。

平成5年の6月より千葉県の国体予選に参加し始めた。2艇の参加で、現役の大学生相手に善戦したものの上位に食い込むことはできなかった。

しかしながら、中村明弘は、磯辺高校、日本大学出身ということで、稲毛の海域に馴染んでいたため、今後には大いに期待がもてる人材であった。また、この年に行われた第19回千葉県実業団選手権大会において、Y-15クラスで、山口・田中組が２位に入り健闘した。久し振りの上位入賞であり、近い将来総合の部でも必ずや上位入賞を果たすことができるレベルになったと感じた。

平成6年は、千葉県実業団ヨット選手権大会は、第20回の記念大会となり、当部も若手を中心に、人材も豊富となり、久し振りに上位を狙える環境が整った。結果は、総合の部で創部以来初の準優勝。個人の部もシングルで、中村明弘が2位に入り、来年は総合の部優勝を目指すこととなった。レース後の祝勝会でも、先輩の方々が多数集まり美酒に酔った楽しい一時を過ごした。

平成7年には、冬から国体予選を目指し、470級2艇で本格的練習に入った。ほぼ2月から毎週練習を重ね、4月からの稲毛ヨットハーバーのレースに参加した。6月に実施された国体予選では470級クラスで、中村・宮城組と村上・斉藤組の2艇が参加した。結果は日本大学の現役組が、1、2位となり、中村・宮城組が社会人としては最高の3位となった。しかしながら、インカレ個人選参加のため1、2位のスッキパーが国体に参加できず、結局当行の中村明弘が、成年470級クラスのスッキパーに選ばれることになった。千葉銀行ヨット部として初めての国体選手となった。

その後も、平成6年から平成8年にかけて、大学の経験者が入部し、人材は若手を中心にかなり充実してきた。平成10年千葉県実業団ヨット選手権では、幹事会社として前夜祭、レースの運営を行った。レースの結果は、4年振りの総合の部準優勝となった。優勝した京葉銀行とは、わずかの差であり念願の優勝も射程距離になったと実感した。また、8月には、当部の部長が、千葉滋胤（当行顧問）から、土肥光芳（当行広報部長）に変わり、新体制がスタートした。今後も、当行ヨット部は、千葉県ヨット連盟への積極的な運営の参加、レースの参加、また、銀行内でのヨットスクールを通じて、千葉県のヨット普及に努めていくことをモットーに活動していく。

千葉銀行行友会ヨット部役員一覧

平成10年9月現在

部　　長	土肥　光芳
監　　督	斉藤　正敏
マネージャー	山口　幸久
主　　将	宮城　和彦
顧　　問	千葉　滋胤
顧　　問	三谷　正之
顧　　問	小堀　進巳
顧　　問	原田　敬
顧　　問	実方　尭年
顧　　問	清水　一郎
顧　　問	高橋　潤

京葉銀行ヨット部

監督：三橋 茂樹

我々京葉銀行ヨット部は千葉県実業団では一番新しい加盟団体で、平成３年１月に創部されました。結成のきっかけは行内での「今後やってみたいスポーツアンケート」でマリンスポーツへ５００人以上が関心を示したこと。海に囲まれた千葉県を地盤にした当行のイメージアップ、部の活動を通して、地域社会との密着が図れるとの理由からでした。

●１９９０年（平成２年）

１２月に社員クラブ「仙松苑」で設立総会を催す。発起人 代表 綿貫弘一（ヨット部長、現副頭取）、土橋（初代監督）、高橋（初代副監督）、石村、荒井、小川、南部、江藤、坂井、堀江の１０名。部員相互の和と親睦のもと社会人として良識を持ち、積極的な競技参加やクラブ活動により、当行のイメージアップを図ることや、役員と職務分担、艇の使用、事故、保安などを規約として定めた。

●１９９１年（平成３年）

１月「京葉銀行ヨット部」が正式に発足。４月新たに三橋、木下、服部、長谷川、福田、女性マネージャー田内（現瀧野）が加わり、総員１６名で活動開始。５月以降 スナイプ（アルファー１世）、シーホース（アルファー２世）、４７０（アルファー３世）が納艇された。創部に際しては土橋を中心に、艇の購入では堀江、ハーバー陸置きでは南部、予算折衝では石村が活躍した。その後、レスキュー艇として４０馬力の和船（旧アルファー号）を導入。尚、館山合宿を８月に１泊２日で実施、以後毎年開催。レース成績は、５月長谷川杯２位（長谷川・福田組）、９月稲毛カップ２位（堀江・坂井組）などであった。尚、仮加盟で参加した千葉県実業団選手権ではシングルで長谷川が１位、福田が４位、Ｙ１５で南部・服部組が５位で、総合２位という成績であった。

●１９９２年（平成４年）

千葉県ヨット連盟に正式加盟。猪俣、丸谷(現剣持)、行川、祷、松本が入部、主将は南部であった。シーホッパー３艇導入（アルファー４・５・６世）。また、４級小型船舶免許を土橋他５名が取得。この年は対外レースに積極参加し、関東スナイプの１次・２次予選を通過し、１０月に鳥取県境港マリーナで行われた第４５回全日本スナイプ選手権に福田・長谷川組が参加した。随伴した土橋の記録を読むと初日は快晴その後は大雨と強風で、長谷川がかぜ気味だったこともあり 成績は６５艇中３０位。ただ、境港は酒と魚がうまかったとのこと。また、猪俣も１０月山中湖で開催された全日本トッパー選手権に参加し、４１艇中１６位の成績であった。第１８回千葉県実業団選手権ではシングルで福田が１位、長谷川が５位、堀江が７位、Ｙ１５で猪俣・服部組が１位で総合１位、初優勝を飾った。

●１９９３年（平成５年）

新人として奥野、飯田が参加、主将は根津が務めた。７月のＦＪ級ヨット世界選手権大会への参加がメインであった。部員２４名は全員会場設営、選手受入れ、計測、レース運営に協力した。レースには福田・長谷川組が参加、総合順位は５８位であった。尚、千葉県実業団選手権はシングル福田１位、堀江５位、長谷川１３位、Ｙ１５南部・飯田組１位で総合優勝。

●１９９４年（平成６年）

監督を三橋、副監督を根津、主将を堀江と選出。千葉市ヨット協会の理事長に綿貫、千葉市体育協会理事に土橋、事務局三橋となる。また、千葉県ヨット連盟では普及委員会を担当。普及レースにも積極参加し、グリーンアンドフラワーカップ 長谷川・飯田６位、シングルハンダー選手権、福田１位などの成績をお

さめる。また、この年は京葉銀行と日本建鉄の２社が第２０回実業団選手権の幹事会社を務めた。レース結果もシングルで福田２位、長谷川６位、堀江７位Ｙ１５根津・猪俣組２位で総合優勝し、富田カップを手にした。

●１９９５年（平成７年）

８月にレスキュー艇新アルファー号(ヤマハＵＦ－２３ＨＴ)を導入。グリーンアンドフラワーカップで優勝した福田・長谷川組がその後もスナイプ級の千葉県国体予選を勝ち、初の国体出場を決めた。第５０回福島国体は９月にいわき市で行われ、福田・長谷川組は見事３位入賞を果たした。その他のレースでは５月の第１回稲毛ウイークで福田・長谷川組がスナイプ級で３位、実業団選手権も福田１位、長谷川５位、堀江６位、Ｙ１５の猪俣・根津組が２位で総合優勝となった。

●１９９６年（平成８年）

新入部員として、土屋、谷井の２名の女子が加わる。土屋は広島国体の成年女子シングルに出場、９位の成績であった。他のレースでは第２回稲毛ウイークで福田・長谷川組がスナイプ級で優勝、グリーンシンフォニーカップで猪俣４位。また、１１月の千葉県選手権に奥野、谷井が初参加、奥野・猪俣組１４位、谷井・土屋組は４１位の成績であった。実業団選手権は福田１位、土屋６位、堀江７位、Ｙ１５の猪俣・南部組３位で総合優勝、５連覇を飾った。

●１９９７年（平成９年）

猪俣がＡ級ジャッジを取得。三橋他７名がＣ級スポーツ指導員(ヨット)の認定を受ける。土屋が大阪国体に成年女子シングルで出場、１２位の成績であった。レース成績は稲毛ウイーク福田・長谷川組２位、海の日レース長谷川３位、福田・奥野組８位、オータムレガッタ長谷川６位。実業団選手権はシングルに堀江、長谷川、土屋、Ｙ１５で猪俣・南部組で臨んだが総合２位であった。

●１９９８年（平成１０年）

新入部員として石毛加入。土橋顧問が千葉市体育協会の推薦を受け、千葉県スポーツ功労賞を受賞。土屋が神奈川国体の成年女子スナイプ級に関・土屋組で出場、総合４位の好成績をおさめる。また、猪俣が国体の競技役員、三橋が千葉県選手団の支援コーチとして参加。また、10月に葉山で開催された全日本シーホース選手権に堀江・猪俣組が参加、29位の成績であった。普及レースでは千葉県オープンで堀江３位、海の日レースでは奥野・福田組が４位。実業団選手権はシングルで堀江6位福田10位長谷川11位Ｙ15で猪俣・石毛組が1位で2年ぶりの総合優勝となる。

●１９９９年（平成１１年）

綿貫部長が顧問となり、土橋顧問が新ヨット部長に就任。熊本国体で成年女子スナイプ級に千葉県代表として出場した土屋・山口組が優勝。香川県チームと同点優勝ながら創部以来の悲願達成。尚、岡山県牛窓で開催された全日本スナイプ級選手権にも、同チームが参加、男女の別の無いレースであったが39位となる。千葉県実業団選手権は、参加４艇とも完走したが、惜しくも準優勝となる。

組　織：

ヨット部部長	土橋茂洋	顧　問	綿貫弘一
監　督	三橋茂樹	副監督	根津久一郎
主　将	堀江　淳	マネジャー	奥野貴子

所有艇：シーホース、スナイプ、４７０各１艇。
シーホッパー３艇　計６艇。
レスキュー艇（アルファー号）

東洋エンジニアリング（ＴＥＣ）
＜TEC SAILING CLUB＞

会　長：前田彰一
副会長：岩瀬弥一郎

1.歴史

（1）創設期

TEC　SAILING　CLUBは、故富田　浩之氏（千葉県実業団ヨット選手権富田杯を寄贈）と前田彰一現会長を中心として創設された。富田氏と前田会長は、昭和４１年、４４年の入社であり、当時はまだ汚かった稲毛の海で腰まで水につかりながら、船を出し、ＴＥＣ社員として初めてのヨット体験をした間柄であった。両氏は、旧帝大体育会ヨット部卒業？との共通点もあって意気投合、互いにモス級ディンギーを個人購入して館山に繰り出した。千葉銀行　千葉氏（現千葉県連副会長）の好意で千葉銀行の館山寮に保管してもらい、きれいな館山の海「鏡が浦」でレースにも参加していた。

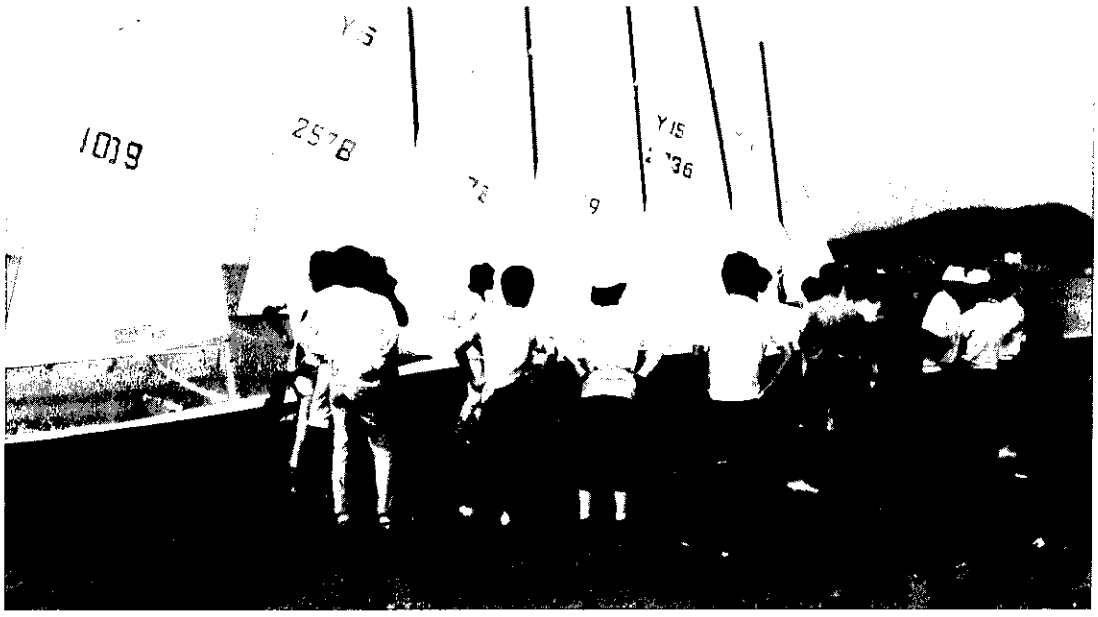
昭和４７年にＴＥＣにもヨット部を作ろうという気運となり、メンバーを募集することになった。

当時ヨットに親しんでいた大森　保次郎、小磯和彦（昭和４１年入社）、鈴木　真一郎（昭和４７年入社）らと共に、いろいろ声をかけて３０人程度で、名前にもこだわり、ヨット部ではなく、"TEC SAILING CLUB"が設立された。会社の文体会には属さない「会員制の同好会組織」とし「ヨットだけでなく気持ち良く遊べる仲間」を募った。会費は当時のとしては破格の５万円の一括払い、例え会社を辞めてもクラブには所属できる永久会員制、また会員ひとりでも反対すればメンバーには入れない、数名のインストラクターを定めて彼らの許可がなければヨットを出さず等など、いろいろウルサイ？制約のあるクラブを創設した。初心者にも安全な遠浅の砂浜で、故山田氏が所有していた那古船形の稲毛マリンをベース・ハーバーとした。先ずはＹ１５級を３艇購入してヨット新入部員たちの講習会に利用、更に当時普及し始めたシーホッパー級や山田氏設計のシースター級を購入して上級者用とした。

ＴＥＣはその頃から週休２日制となっており、毎週土曜日の朝千葉発特急で館山に通う。ハーバーに行っても風や波が強すぎたり風が全くなかったりで、ヨットに乗れず日光浴を楽しむだけの日もあった。会社の海の家が岩井海岸にあり、合宿に大いに利用した。合宿では、昼の部だけでなく夜の部に活躍する部員も多く、翌日は二日酔いでセーリング練習する姿もみられた。ＴＥＣ社員向けヨット講習会を開催して若干の資金稼ぎ及びヨット普及と部員増強に努力。夏にはファミリー・デイを設けて、家族や友人を連れてヨットに試乗する日もあった。そろいのヨット用のＴＥＣトレーナーを作り、その後は千葉県連と共にそろいのブレザーを作って飲みに繰り出すこともあった。このようにヨットだけでなく、遊びの方も熱心な和気藹々といった雰囲気のクラブ活動が伝統して根付いたのもこの頃であった。

昭和４８年に第２８回国民体育大会（若潮国体）があり、ヨット競技は館山の安房水産高校ハーバーで実施され、県内の実業団各社から多数役員として手伝うことになった。国体用に数多くのスナイプ新艇が購入され、その後の県連の実業団ヨット選手権やヨット講習会にも利用されることになった。

この翌年の４９年にTEC、川崎製鉄　堀江氏、三井造船　元山氏らの発意で、実業団レースを毎



1977年
練習（館山にて）

年行うこととなり、現在まで２４回を数えている。昭和５１年には、大学ヨット部出身の轟　啓二（現千葉県連競技部長）が入部し、練習もレース志向で館山沖にマークを打っての本格的なものとなった。実業団レースには、轟を主将として、三好　正二（昭和４３年入社）、宮下　孝（昭和４８年入社）、香取　篤、安藤　潤一（昭和４９年入社）、遠藤　光一（昭和５５年入社）らが参加した。成績は、万年2位が続き、「今年こそは打倒川鉄」を合言葉としていた。

昭和５２年頃より稲毛ヨットハーバー建設の話が出るようになり、TEC初め県内実業団各社も大いに期待した。昭和５５年に第３５回国民体育大会が稲毛で開催されることになり、毎週のように吉原氏（現在県連副会長、当時日本ヨット協会理事国体部長）の自宅に集まって国体準備が進められた。かろうじて稲毛のヨットハーバー建設が間に合い国体が開催され、TECヨット部から多数のメンバーが記録部を中心に数日間年休を取りつつ手伝った。この国体の後、数回館山にいくこともあったが、実業団ヨット選手権も稲毛で開催されるようになり、活動の場が館山から稲毛に移されることになった。

（２）稲毛拠点後

昭和５８年に稲毛に拠点を移したが、当時は陸置き保管場所の競争倍率がすざまじく、幽霊部員を含めて、部員の名前を総動員して、ようやく２艇分の場所を確保した。館山に比べれば、所要時間が劇的に短縮し、これで会社帰りにもヨットができるなどと、夢を大いに語り合っていた。

また、稲毛への拠点移動を契機に会社組織としての自覚・責任を持とうという気運となり、文体会に正式加盟した。

この間、岩瀬　弥一郎（昭和56年入社／現クラブ副会長）、中川　千佳子（旧姓光岡　昭和５７年入社）、薮崎　久（昭和６０年入社）、黒氏昭仁（昭和５８年入社／現クラブ部長）、羽田雅一（昭和６２年入社）らが入部し、創設後の期間も１０年越え、組織・陣容もようやく一人前となりつつあった。

一方、実業団レースの方は、昭和６３年までの８年間は、伝統のなせる技か、やはり万年２位から４位までを行ったり来たりであった。
記念すべき平成元年の第１５回大会では、強風の鬼と異名を誇っていた轟主将の頑張りと常勝川鉄の不調にも助けられ、念願の初優勝を勝ち取った。

出場選手　シングルハンダー：轟、岩瀬、黒氏
　　Y-15　　：中川、薮崎

この時は、東船橋の旧TECビルにあったレストラン　アルマスで、元松田名誉会長（当時代表取締役会長）にも列席してもらい、盛大な優勝祝賀パーティを開いた。

（３）平成２年から現在まで

初優勝の２年後の平成３年に京葉銀行が、優秀選手、スタッフ、新艇、救助艇を所有して、実業団に加盟し、良くも悪くもマンネリ化していた雰囲気に活が入った。京葉銀行は、平成４年から８年まで連続5連覇を果し、トップの地位を不動化し

1989年　実業団レース優勝

1997年　実業団レース優勝

つつあった。一方、TECには、武井　竜一郎、中田　繁利、荒井　克久（平成４年入社）、鈴木　隆敏、大和　正幸、岩崎　昇（平成５年入社）、神尾　直志（平成６年入社）、大澤　清（平成７年入社）らが入部した。大和、岩崎、荒井を除く４名がヨット経験者であるという幸運に恵まれ、日々の活動も大いに盛上がり、期待に胸が膨らんだ。会社所有の艇では勝てないと考えたのか、遊びは自分自身の金でと考えたのか定かではないが、各人レーザーを自前で購入、稲毛以外で開催される全国レベルのレース（東京湾選手権、中部選手権、関東選手権等）にも積極的に参加し、現在でも腕を磨いている。
また、平成５年には、久々の女性新人の今泉　奈緒子と金子　朋枝が入部し、クラブの雰囲気を明るくしてくれた。鈴木、大和と同期でもあり、ヨットの方にも積極的に取組み、未経験者ながら、シーホッパーを乗りこなすまでに成長している。

このような世代交代が順調に進む中、創設者の富田氏が平成６年３月４日に出張先で急逝し、大きな支え、正に大黒柱を失い、失意のどん底に落とされた。葬儀の後、奥様である富田和子様の御意思により富田杯が千葉県ヨット連盟に寄贈され、現在、実業団選手権の優勝団体に送られることとなっている。この年のレースは、部員全員富田杯の獲得を最大目標としたが、惜しくも3位に終り、富田氏の霊に報いることができなかった。

しかし、若い世代の努力・活動が、ようやく実り、平成９年の実業団レースでは、宿敵京葉銀行を破り、足かけ３年を経て、念願の富田杯をようやくTECの手中に収めることができた。富田氏が、天国でそろそろカップを見てみたいと思ったのかもしれない。

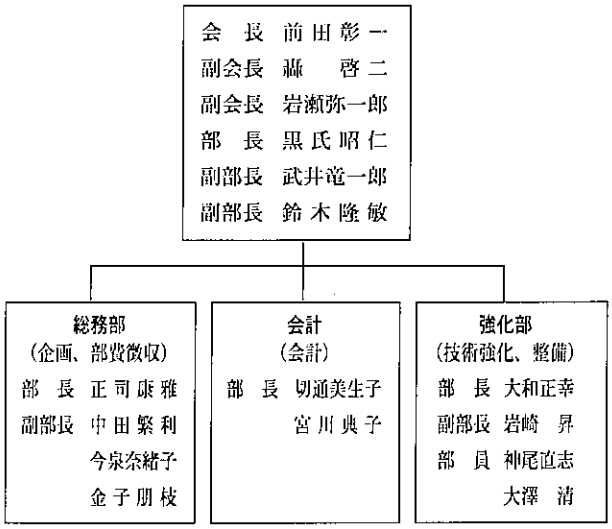
出場選手　シングルハンダー：武井(第６位)
　　鈴木(第２位)
　　大和(優勝)
　　Y-15　　：岩崎/大澤(第５位)

2. 組織・運営

当クラブの平成１１年度の組織は、以下のとおりである。会長、副会長、部長、副部長と総務部（企画（主に飲み会？）、部費徴収）、会計、強化部（技術強化、艇整備）を置いている。
練習での安全を最優先にインストラクター制度なるものを導入しており、不在の場合には出艇できないこととなっている。スキッパーとしての技量とクラブ員全員の総意が資格条件である。

平成11年度　ＴＥＣセーリングクラブ組織図

H11年5月12日



インストラクター

前田、香取、宮下、安藤、藤、岩瀬、黒氏、薮崎、中川、羽田、正司
H4入社:武井(H5),荒井(H6),中田(H6),佐川(H6)
H5入社:鈴木(H6),大和(H7),岩崎(H7),今泉(H8)
H6入社:神尾(H7)
H7入社:大澤(H8)
()インストラクター昇格年度
(1)インストラクター不在の場合は出艇厳禁
(2)インストラクターは天候等に応じて適切な判断をすること、無理しないこと
(3)部員はインストラクターの指示に従うこと

3. 主な活動

定例化しているクラブの主な行事は、以下のとおりである。

1) 4月　；オープニング（午前出艇／午後香澄公園でバーベキュー）
2) 5月　；クラブ総会（前年度反省と新年度の活動計画の確認）
3) 6月　；千葉県連ヨット教室幹事
4) 7～8月　；ファミリーディ
　　；県民大会出場
5) 9月　；合宿（岩井海岸等へ）
6) 10～11月；実業団レース
7) 12月　；納会（オープニングと同じ）

この他、何かにつけて飲む・食べる会は、不定期に開催している。オープニングと納会も富田氏が根付かせた部員のお楽しみであり、毎回市場で買ってきた新鮮な魚を香澄公園で捌き、持寄ったワイン、出張みやげの世界の珍品、バーベキューで大いに騒ぐこととなっている。

また、8月に行われる千葉県民大会には、船橋体育協会の石井　英行氏との親交と当時船橋に事務所があったよしみから、毎年船橋代表としてＴＥＣから選手を出場させている。
平成8年の大会では、男子の部に武井、鈴木、女子の部に今泉が出場し、見事船橋市を優勝に導いた。男子の部では、ワン・ツーフィニッシュを果し、圧勝であった。

4. その他：記録はＴＥＣ？

TECはレースとなると必ず記録担当の声が上がる。創設期の経緯があるのか定かではないが、いつもそうなっていて、クラブの伝統となっている。記録となると女性陣に声がかかり、宮川　典子（現会計副部長）、切通　美生子（現会計部長）がレース毎にかり出され、手計算のためレース終了後に大忙しとなる。運営側からは、閉会式を早くしたいとせかされ、かといって間違ったら何もならない大役である。
これも富田氏が当時パソコン出始めの頃にLOTUSを使って、自力で記録ソフトを作成し、時間節約に貢献した。以後、稲毛で行われるレースでも試され、平成５年の世界FJ級選手権にも使用された。その後、千葉県連の後押しもあり、藤副会長を中心としたクラブ員の尽力により、「ヨットレース記録システム　ＹＡＲＲＯＷ95」が、平成9年に完成した。日本セーリング連盟での販売認可をもらい、日本全国のヨット連盟／セーリング連盟、団体へも浸透しつつあり、評価は上々である。

三井造船ヨット部

鶴岡昌士

稲毛ヨットハーバーにて ▼レース前作戦会議か？ ▶試乗会

我ら三井造船ヨット部は、内房線は八幡宿駅京葉工業地帯の一隅にＶＬＣＣ大型油槽船をはじめ、ＬＮＧ船、ＣＯＮＴＡＩＮＥＲ船を建造する潮の香漂わす仲間たちをここに紹介しましょう。

●ヨット部の創生

それは現ヨット部顧問元山氏 現ヨット部部長神田氏、両氏の熱き情熱の元 ヨット同好会として始まり会社との折衝ご協力の上、Ｙ－１５を３艇購入 ＨＯＭＥ ＰＯＲＴは、三井造船構内あるいは館山、岩井海岸と ＨＯＭＥ ＰＯＲＴの定まらぬ活動であったかもしれません。

しかしながら 造船会社にヨット部有り昭和４８年若潮国体の活動を通し、益々 ヨット ヨット部への情熱は膨らむばかりで間もなく 三井造船ヨット部正式誕生となりました。

●ヨット部 カラーの創生

昭和５０年には ＨＯＭＥ ＰＯＲＴを大貫海岸へ移動し 磯根崎の懐で若手 実力者 外交家 個性 溢るる新人部員が増えヨット部 カラーの創生が始まりました。

まずは 冬期体力トレーニングから始まり艇の整備、艇庫作り、艤装品ｃｈｃｋ ｓｈｅｅｔの採用 練習日一日のフローチャート作成と活動は多岐に渡り専用棒を記憶している、ヨット部員はヨット部の主と言えるでしょう。

練習方法もレースに勝つ為の練習方法に切換えスタート練習、マーク回航ショートコースによる反復練習と密度濃いものとなりました。

そして 練習後のミーテイング開催と 一年中 ヨット ヨットで 日に焼けた面々が揃いました。

大貫の浜の人達も 我々をヨットさん、ヨットさん、と呼んで 庭も水道も笑顔で提供して頂き、銭湯へ行けば、爺さんに “風呂をぬるくすんじゃねえー” と怒られたりと大貫の浜の皆さんにも 後押しされ、今、思い起こし感謝 感謝の思いでいっぱいであります。

カラー作りの もう一つ　それは 宴会でしょう。
一年の締めくくりに（潮ぬき）は 温泉でしょう。
ヨット部 座長をはじめ 数々の宴会芸は、関東一円の民宿酒の量、 記録作りの旅でした。
ヨット部の宴会は 爆笑 爆笑の渦 閑静な住宅街にも鳴り響きました。

県内レースはもとより、関東６造船、本千定期戦と対外レースにも参加。
ヨットの実力を身に付け、宴会芸を引っさげて千葉県実業団レースに於いても、過去 １度優勝の栄誉に輝き団結のヨット部カラー創生は完成しました。

●三井造船ヨット部の挑戦

千葉県実業団及び我がヨット部の活動も稲毛ヨットハーバーを拠点として早１０余年が経過し、幕張副都心超高層ビル群２１世紀への飛躍をイメージさせる環境下、三井造船の企業環境も決して楽観視できるものではありませんが、ヨット部創立２５周年を迎え更なる飛躍へ我らヨット部部員は

もう一度
　　熱き砂を素足で踏みしめ

潮騒を聞き
　青き海を見
　　風をよみながら

前進するものであります。
最後に今日まで御協力頂きました、千葉県実業団各社様　稲毛ヨットハーバー様　我がヨット部の先人達に御礼申し上げ、三井造船ヨット部 紹介のペンを置きます。

潮ぬきの旅　和銅鉱泉前にて

大貫海岸にて　上：練習も終わりもうすぐ着岸
中：出艇風景
下：試乗会にて

潮ぬきの旅富士のふもとで

千葉県庁ヨット部

部長:吉田茂

1．歴史

(1)創部時の状況

千葉県庁ヨット部は昭和５０年に発足した千葉県水道局ヨット部を母体にしている。翌５１年に、県連の千葉さんから、連盟強化のため実業団チームとして県庁ヨット部を一本化して作ってはどうかとの助言があり、県庁内の同好の志を人伝に頼り探したところ、１７名が名乗りをあげたため、水道局ヨット部の１４名を加え、３１名で昭和５１年5月２９日設立総会を開催し、創部した。

水道局ヨット部発足までは、現顧問の桜井氏らが昭和４７年から稲毛マリーンにY-15を陸置きされていたが、昭和４８年頃から同氏が周りにいる人に声をかけ、楽しむ仲間が増えていったようである。

創部当時は平均年齢も２０代後半と気力体力も満ちあふれて、隔週毎に当時片道約3時間かけて館山に出かけ、練習を繰り返した。

そのうちに宿泊場所も館山に確保できるようになり、昼はヨット、夜はジャラジャラで盛り上がる期間がしばらく続いた。

創部から数年間は目の回るような行事がが続いたが、以下に、当部の関係したそれらの全国大会に簡単に触れたい。

(2)自治体大会の館山開催（昭和５２年）

水道局ヨット部発足の昭和５０年、全国自治体職員ヨット競技会があるというのを聞きつけ、現斉藤技術顧問以外は全国大会が初めてという面々を引き連れ、三重県は津市の大会に駆けつけた。総合１１位という成績で奮わなかったものの、斉藤艇がファーストホームの快挙を遂げた。

翌昭和51年、全国自治体の事務局から昭和52年の館山開催について打診があった。

早速、県連側と協議を開始し、幾度と無く会議を繰り返し、一団体のレースにも拘わらず、当時の県連の多大な協力を得て開催にこぎつけた。
部として、ヨット連盟に加盟することとなったのも昭和５２年である。

突然の開催にも拘わらず、県担当者の努力により県からは２０万円もの資金援助を受けられた。

大会は7月１～5日に全国１１チームが参加して開催され、天候にも恵まれて、無事終えることができた。創部間もないため部員には、初めて6位に入賞したこの大会が大いに刺激になったようである。

(3)自治体大会の稲毛開催（昭和５４年）

昭和５３年には自治体大会が宮崎の地で開かれ、前年に続き１６チーム中5位の入賞を果たして喜んでいるのもつかの間、昭和５４年に稲毛で国体リハーサルとして自治体大会を開催する準備が本格化した。

国体リハーサルということで、協会側のサポートも順調に進み、ホスト役も前回の館山大会を経験していたためか余裕を持って望むことができ、競技でもこれが最初で最後か3位上位入賞を果たすことができた。

また、毎回恒例のレセプションは、建て替え前の「千鳥」の2階を借り切って、床も抜けんばかりに大いに賑わった。

(4)その後の活動

以上の大会が終わった後、昭和５７年に稲毛が仮オープンするまでは、合宿所が立て替えを行った関係もあり館山練習の参加者が徐々に減少していった。翌昭和５８年に稲毛が本格オープンして

ヨット教室の１コマ（館山）▼▶

からは徐々に練習参加者も回復していき、昭和６０年には実業団レースに初めて優勝し、長らく続いた川鉄王国に初めて休息して戴くことができた。但し、その後は逆に休息が長く続いている。

2. 組織

県庁ヨット部の組織は、相談役と実行部門からなっている。現組織の役員は、５.役員のとおり。

3. 運営

（１在籍艇の状況

在籍艇は、部所有艇と部員個人所有艇に分かれており、また、練習場所の関係で館山と稲毛に分けて置いている。

館山には、Ｙ－１５（３艇）、シーホッパー（２艇）、レーザー（１艇）、シカーラ（１艇）を置いている。

稲毛には、スナイプ（２艇）、シーホッパー（１艇）、レーザー（３艇）を置いている。

（２）活動場所

活動は、平均して月に２回程度であるが、稲毛と館山の割合は３対１程度で、ヨット関係の行事が殆ど稲毛に移ってからは、館山の活動割合は減少している。

（３運営費

運営費は基本的には、大部分は部員の年会費に依っている。部費の他、県や水道局などから若干の補助金を戴いており、年間の活動予算は実質約６０万円程度となっている。

当部の会費は、今のところ入会時に２万円、年会費は８千円から１万２千円（入会時年数により異なる）となっており、基本的に入会金は積み立ててておき新艇購入に充てることとなっている。

運営費の約半分は稲毛の使用料に充てているが、残りは艇の整備や備品の購入、レース等への参加費、加盟団体の分担金等となっている。

（４）部員の状況

平成１０年度における部員は４５名である。年代別には、１９７０年代、８０年代、９０年代に入部した部員が丁度３分の１づつとなっている。

4. 活動状況

前述したように、活動は現在主に稲毛になっている。例年、稲毛での部としての練習は４月から１０月まで７回程度、館山での１泊での練習が２，３回程度となっている。

レースへの参加は、稲毛開催においては殆ど参加し、また、全国自治体大会へは毎回参加したい意欲はあるものの、旅費や参加費が大部分個人負担で行かざるを得ないことから、各個人の意欲と資力に依るところが大きい。

また、県庁内でヨットの普及と理解を深めてもらうため、毎年８月下旬に館山でヨット教室を開催している。これには毎回４０～５０名程度の参加があり、リピーターが出るほどの行事となっている。

5. 役員（１９９８年度）

（相談役）

顧　　問（運営全般）	桜井紀史
技術顧問（技 術 面）	斉藤威
監　　事（会計監査）	小林宗平

（実行部門）

部　　長	吉田茂
副 部 長（総務担当）	伊藤亮一
副 部 長（県連担当）	剣持光信
副 部 長（事業担当）	椎名勝也・矢部真也
ヘッドコーチ（技術指導）	笠井貞義・山本茂

千葉市社会教育育成団体
千葉ヨットビルダーズクラブ(略称CYBC)について

総務委員長:平安隆雄

歴史：１９６１年（昭和３６年）から６４年にかけて稲毛海岸では、現在の千葉市稲毛海岸１丁目から５丁目にいたる長さ１９００ｍの埋め立て事業が行われていた。この埋め立て地に海洋公民館「こじま」が６６年（昭和４１年）に開館し海洋思想の普及と海事関係青少年団体の育成が図られるようになった。海洋公民館「こじま」は陸上に建設されたものではなく、埋め立て地に接する海岸に曳航され固定された元海上保安大学校の練習船（戦時中は旧帝国海軍海防艦「志賀」）を改造・改築したものである。船の公民館として全国的にも有名になった海洋公民館「こじま」では設立趣旨に基づく様々な海洋教室が公民館事業として開催された。まだ海に囲まれていた「こじま」の周辺でカッター訓練・ヨット帆走講習会・ヨット製作教室が行われて地域住民に親しまれるようになった。

千葉ヨットビルダーズクラブは７０年（昭和４５年）にこの千葉市海洋公民館「こじま」主催の「第１回市民ヨット製作教室」で一人乗り用の小型ヨットを製作した受講生の有志たちが設立したクラブである。この当時製作した小型ヨットは２．３プラム級と称されるヨットで船長２．３ｍ　船幅が１ｍ弱のものである（形がグッピー級に似ていたのでグッピーともよんでいた）。

製作教室受講生達は設計図をもとにして、地面に船台を築き、ただの一枚の合板・一本の角材から加工していき、木製２．３プラム級を５月の初旬から約３ヶ月かけて（土日を利用）作り上げるという作業をおこなった。まさに小さいながらも造船（ship building)を地でいくものだった。

製作場所は海洋公民館の北側に位置する海岸べりの木造家屋内であった。第１回の卒講生の有志たちは修得した木工技術・製作技術を翌年の受講生に伝授しようということで、自らをＹａｃｈｔ　Ｂｕｉｌｄｅｒｓ（ヨット製作者）と称しクラブをつくった。これが千葉ヨットビルダーズクラブの名前の由来となる。

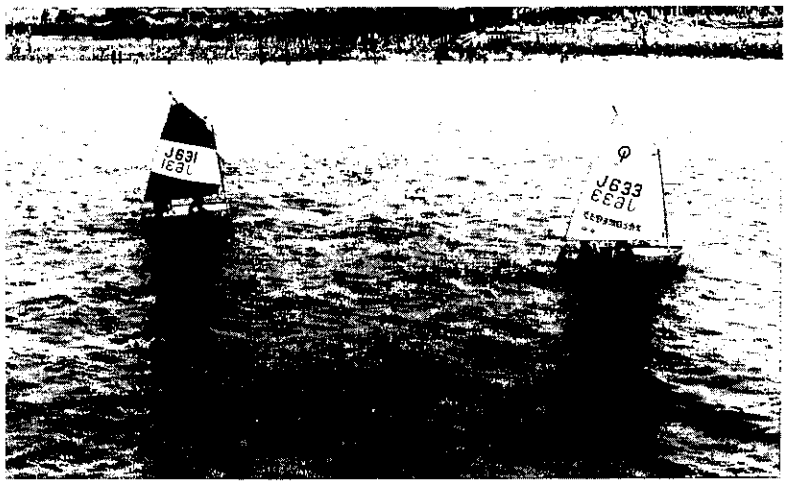
卒講生の一部（千葉ヨットビルダーズクラブ会員となったもの）が、ボランティアで翌年の受講生の先生になっていくというこの方式は市民ヨット製作教室が存続する限り続いていった。クラブ員たちは自分の経験をふまえて、翌年の受講生の先生になって教えていく（一緒になって作り上げる）という目に見えない財産を作り上げていった。

もっとも、クラブ員の多くが木工技術に長けているというのではなかったが、人数がある程度いればよくしたもので、プロ顔負けのクラブ員が毎年のように現れて彼らがリーダーとなっていった。

千葉ヨットビルダーズクラブの当初の目的はそうした技術の伝授、２．３プラム級以外の木造帆船の製作ということの他に、自分たちで作ったヨットを自分の子どもや地域の子どもたちに乗せて楽しませ、海に親しめる場を提供したいというものもあった。これはやがて千葉ヨットビルダーズクラブ・ジュニアの活動という形で発展していくことになる。

クラブは艇庫とよんでいた木造家屋を活動場所とした。ここにクラブ員たちがヨット製作に必要な工具・資材などを少しずつ提供し、ヨットの係留場も確保して一つの有形財産をも形成していったのである。

７３年（昭和４８年）まで２．３プラム級を製作していたが、７4年からはスタイルはほとんど変わらないがそれより少し大きくて（船長２．３ｍ　船



幅１．３ｍ）、規格が世界標準になっていたオプティミストディンギィー（ＯＰ級）を製作するようになった。市民ヨット製作教室は千葉市民に好評で毎年５月に受講生の募集を行っていたが、定員２０名を大きく上回る応募があったと言われている。製作教室は、ヨットを自作するというのと、その先生たちが前年度の受講生であるといったことからユニークな公民館主催行事としてマスコミにもたびたび取り上げられた。

１９７７年（昭和５２年）には海洋公民館北側の艇庫が手狭になり、また、稲毛臨海事業整備による艇庫敷地の縮小ということから、クラブは活動拠点をその艇庫に置きながら、製作教室の現場を現在の京葉線稲毛海岸駅北側（現稲毛構内タクシー所在地）に移した。ここに製作教室用小屋とクラブハウスが移設されたのである。当時この周辺は埋め立てされたばかり（埋め立て完了は７４年）であった。勿論京葉線も未開通で、道路も舗装されておらず、住宅公団の団地がわずかに点在するといった荒涼たる風景が小屋を取りまいていた。

１９８２年（昭和５７年）９月に正式に稲毛ヨットハーバーが開港されるまではクラブ員のヨットの帆走訓練場所は開港前のヨットハーバーや千葉港、船橋の海岸、幕張の浜などであった。このころには既に内陸部になっていた艇庫や製作小屋からヨットや後に述べる救助艇を海岸にまで移動させるのは一苦労であった。海に出る、ヨットを走らせるといった今ではごく当たり前の行為が限りなく貴重な営みであるとさえクラブ員たちは思っていたのである。

稲毛海岸駅北側の製作小屋では８１年（昭和５６年）まで市のＯＰ製作教室が催されていたが、クラブ員の手によって他の艇種の自作も行われていた。このころ製作された艇種ではストリーカー級、ブリット級、Ｋ１６級、フライングキャット級（ＦＣ級）、キャットジュニア級（CJ級）、Ｙ１５級、Ｋパント級などがある。また、クルーザーのＪＯＧ級なども改装をした。更に海洋公民館所有のＡ級ディンギー、ミラー級などの補修も行われた。

海洋公民館主要行事と位置づけられていた市民ヨット製作教室は、しかしながら稲毛海岸駅周辺の都市開発で製作教室用小屋とクラブハウスがなくなると一時中断を余儀なくされた。

製作教室が再開されたのは８９年（平成元年）である。場所は稲毛ヨットハーバーの艇庫内であった。この時はＯＰ級ではなくトム級を製作した。トム級は３年間（９１年まで）製作された。

だが、ハーバー内で製作体制が確立されると思ったのも束の間、製作場所の問題等もあり、また、海洋公民館自体も閉鎖されたということもあって再び製作活動中止に追い込まれた。残念ながら今日に至るまで市民ヨット製作教室そのものは再開されていない。

１９９２年（平成４年）にはクラブは海洋公民館北側にあった艇庫を引き上げた。そして、千葉市教育委員会社会教育課の助言で、稲毛ヨットハーバー内にある艇庫の一部を千葉ヨットビルダーズクラブの活動拠点として置くこととなったのである。

千葉ヨットビルダーズクラブは、現在では製作と共に青少年及び市民のヨット帆走訓練にも力をいれている。とりわけ、ＯＰ級の千葉ヨットビルダーズクラブ・ジュニアは帆走訓練を通じて日本選手権代表・世界選手権日本代表を育て、１９９０年の中国で開かれたアジア大会では金メダル獲得者（関一人君）を出すという千葉県にとっても誉れ高い実績を得てきた。１９８０年の栃木国体では開港前の稲毛ヨットハーバーが会場として使用されたが、このとき会場に御臨席された現皇太子の前で幼いジュニア達が「沈起こし」のデモンストレーションを行い拍手喝采を賜ったというのもクラブ員の一つの思い出である。近年においてはこうしたジュニアの卒業生たちがクラブの後継者に成長し、千葉市スポーツ振興財団や千葉県ヨット連盟主催の「ジュニアヨット教室」や「県連

ヨット教室」の講師を務められるようになってきた。

当クラブの最近の大きな行事としては９４年（平成４年）の千葉市政令指定都市移行記念行事としての日本ＯＰ協会主催東日本ＯＰ級ヨット選手権大会の運営、９８年（平成１０年）の同大会の運営、９３年（平成５年）のＦＪ級世界選手権大会での運営手伝い（通訳・救助監視活動など）ある。

千葉ヨットビルダーズクラブはかつては市民ヨット製作教室を終了したものに入会を限定していたが、現在では海を愛するもの・ヨットを愛するものすべてに門戸は開かれている。

組　織：総務委員会、製作委員会（舟艇、船台の製作・補修・管理）、帆走委員会（レースの運営、各行事への参加）、救助委員会（救助艇の運航）、Ｊｒ委員会（小中学生ジュニアのＯＰ指導・教育）、会計部、広報部（広報誌「短信」の発行）等が現在ある。

過去においてはハム委員会（無線による海上交信担当）、資料部（会・行事に関する資料記録保存）、土曜講習委員会（土曜日に行う会員・市民を対象とした海洋関係講習会の開催担当）等があった。

活　動：基本的に土曜日曜に帆走訓練をおこなう。毎年春季・秋季に千葉市長杯ＯＰ級オープンヨットレースを開催。１９９９年度は２８回目を迎える。随時千葉市社会教育育成団体として、県連・稲毛ヨットハーバー等の各種行事に参加・協力している。広報誌「短信」を発行。

会員数：５０名、ジュニア会員１５名

役　員：顧　　問　宮路大作
会　　長　福田寿夫
副 会 長　板垣孟彦　小笠原義博
総務委員長　平安隆雄
製作委員長　富田篤
救助委員長　小松勝治
帆走委員長　大谷内利夫
広報委員長　外村三帰也
会計委員長　高山征勝
Ｊｒ委員長　多田裕一

（１９９９年度役員）

救助艇：当クラブでは以下の救助艇が稲毛の海岸を遊弋していた（いる）。

第１旭洋＝船種の正式名称は「東レ レスキュー２１」。三河ヨットから搬送されてきた船で、栃木国体（１９８０年）のとき千葉ヨットビルダーズクラブの救助艇として進水。クラブ員が速力をもっと出せるようにと船首をバルバス・バウにしたのでユニークな船形をしていた。

第２旭洋＝１９７１年に進水した千葉大学ヨット部の救助艇（房総１号）を払い下げてもらった木造船。三菱のジーゼルエンジンを搭載していたが、８５年（昭和６０年）に和船の改造を得意とするクラブ員が漁船のエンジンに積み替えた。

手動のスターターでエンジンを動かすときには大変な力がいった。テクニックも必要であった。スターンがスロープ状になっていたのでヨットの救助艇としては最適の船であった。

第３旭洋＝シーガル社製のカタマラン艇（定員５名）。全国で活躍するＯＰ級の子ども達のレスキュー艇としてシーガル社が製作販売したものを購入。この船は９７年から稲毛ヨットハーバーで活躍しているテーザー級のグループが専用救助艇として使用している。

旭洋５＝英国製のＧＩＧ（ギグ）で英国から直輸入した。乗船定員が１８名で２本マストのラグキャットである。帆走・機走・漕艇も出来るというマルチ救助艇である。１５馬力エンジン搭載。なおＧｉｇとは船側外板が鎧ばりの快速ボートという意味である。

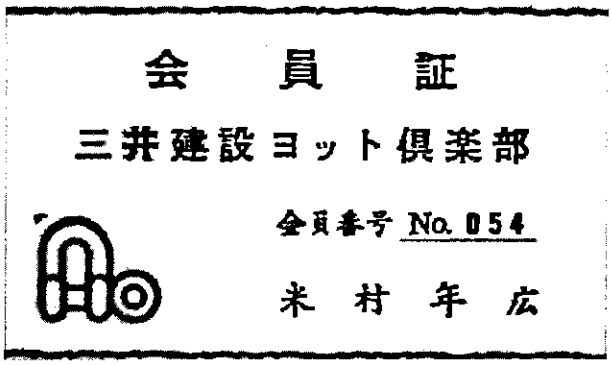
旭洋６＝日本ジュニアヨット連盟から配艇されたアキレス社製ゴム製救助ボート（定員８名）。
３０馬力エンジン搭載。

ローズベイⅡ世＝３０フィート・スループのクルザーで、ニュージャパン社のエスプリ・ド・バンである。１８馬力（定員12名）。１９９１年（平成３年）に購入された。

第１旭洋、第２旭洋は既に廃船され、第３旭洋は他団体で使われており、現在は旭洋５、旭洋６、ローズベイⅡ世をレース運営艇・帆走訓練救助艇、ハーバーの監視協力艇として運航させている。

三井建設ヨット部

米村年広



第１条（名称）当部は三井建設株式会社ヨット部と称する。

第２条（所在地）当部は千葉市栄町３５番１４号三井建設株式会社東関東支店に事務所を置く。

部の発足を知ることは、こう記された規約と幾つかの議事録によって知ることができる。もっとも、当部を紹介するのは、幾人かの長老の自慢話をまとめることが近道ではあるが、より事実に近い内容とするためにこのファイルを頼りにまとめさていただきたい。この記録は昭和５２年から始まる。

この頃、本店ヨット部が、既に葉山、由比ガ浜を中心に活動していたので、社内的には平成２年に１つの部になるまで、その前身は東関東支店ヨット部として活動して行く。

第３条（目的）当部はヨットと海に親しみ会員相互の親睦をはかり、かつ体力及精神を研磨して、社会生活をよりよいものにすることをその目的とする。

第４条（活動）当部は目的達成の為に次の活動を行う。

その１．ヨット技術向上の為の練習教育。

その２．前項に伴う各種講習会等への参加。

その３．各種検定の受講。

その４．各種競技会への参加。

その５．その他目的達成の為の必要な事項。

第５条（会員）当部は三井建設株式会社の社員をもって構成する。

又、当部に貢献し、又は功績有る者を準会員とする事ができる。

会員は、誓約書にサイン捺印して行っていた。

会員には会員番号氏名が記された会員章をもらうことができた。

シャックルがデザインされていた名刺サイズのこの会員章は皮製でできている。

私が入部したのが１９８５年のことであるが会員番号にはNo.054と記されている。その後何番までこの会員章が使われていたか不明だ。

第６条（役員）当部は下記役員をおく。会長１名　部長１名　顧問　．．．．．

初代会長に山崎正三、役員には、宮川東、遠藤裕造、越茂明等で構成され主将有居東海男。会員名簿に記されているかぎり会員は１５名程度だったようだが、この名簿は年々とその行数を増やしていった。

持ち艇は、Ｙ－１５、レーザーが２艇、ヤマハ１５、シーホッパーが各１艇。部としての充実に伴い、普及活動にも協力していくことが出来る様になっていく。古くは昭和５２年８月１３、１４日に行われた「市民ヨット教室」への参加の記録がある。安房水産ヨットハーバーで行われ、カリキュラムとしては現行のものと同じで、初級バッジ検定を目的としている。１泊２日であるにもかかわらず、参加者名簿には５０名載っていることから、この頃ヨットに対する関心度が伺える。

昭和５３年の第４回実業団ヨットレースも、レース海面は館山湾と記録されている。この頃活動の拠点は合宿を含め館山を中心としていた。時間的な流れの中でも年中行事として変わらなかったものは実業団レースであり、部の存亡の危機にある現在もその支えとなっている。最も高順位だったまだ６社１８艇で競われていた第５回大会実業団ヨットレースで当部は４位。３位になれば、「銀座で飲ませてやる」２代目越会長。本店関係のメンバーが参加する様になった平成３年に漸く悲願を達成する。

ドルフィン・クルージング・クラブ(D.C.C.)
四半世紀のあゆみ

会長('９８年度):茂田佳博

千葉県セーリング連盟５０周年記念誌発行に際し、『ドルフィン・クルージング・クラブ(D.C.C.)四半世紀のあゆみ』と題してその歴史を振り返ると共に、当クラブの紹介をさせて頂きます。

ドルフィン・クルージング・クラブ（以下D.C.C.）は、１９７５年に誕生したと聞いております。当時、木更津内港に係留していた数艇のヨットが集まり、任意団体としてのクラブを組織し、活動を開始しました。２年後の１９７７年には中の島に木更津ヨッテルがオープンし、係留能力が飛躍的に拡大すると共にD.C.C.の会員数も増加し、ピーク時には１２０名（５０艇）を超える様になりました。千葉県ヨット連盟の加盟団体としては、数少ないクルーザーのクラブとして、今日まで活動して参りました。クラブの設立やその後の運営に当たり、千葉県ヨット連盟、木更津市ヨット協会、セントラル株式会社等にいろいろ応援を頂いたと聞いております。

D.C.C. は主として木更津ヨッテル及び木更津マリーナに籍を置く艇のオーナー及びクルーにより構成されているヨットクラブです。

クラブ規約第３条『シーマンとしての道徳やマナーを守り、自然環境の保全と小型船の安全な航行を確保し、これらの健全な普及を通じて地域社会に寄与し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。』に謳われているように、会員相互の親睦のみならず、自然環境の保全、安全な航行、地域社会への寄与等を目的として設立されたクラブです。

現在、会員数は約７５名、艇数は約３５艇です。ロケーション的には東京湾の丁度真中東方に位置し、東京湾横断道路（アクアライン）を目の前にしています。北方の東京方面、西方の横浜までは数時間のセーリングでカバーし、デイセーリングに好都合です。南の湾口を目指せば、館山、城ヶ島まで6～8時間、伊豆大島までは10～15時間のワンナイトセーリングを楽しむことができます。

活動としては、①年6回（4、5、6、9、10、11月）のポイントレース、②島回りロングレース（33マイル）の浮島回航レース、③1泊2日のクルージング、④地元の子供達を乗せてあげる招待クルージング、⑤木更津市民クルーザー教室、⑥安全やレースルールの講習会、⑦年末の忘年会等、楽しいイベントがいっぱいです。会員のコミュニケーションの手段として、手作りの広報誌『D.C.C.通信』や『アニュアルレポート』が有ります。

クラブ主催の活動以外にも、気の合う会員同志でアイランドホッピングのクルージングに出かけたり、テニスやスキーを楽しんでいる会員もいます。東京湾内の他のヨットクラブとの交流もあり、他流試合のレースに参加する会員も沢山います。

活動の中味について、少し詳しく述べていきます。地域社会との活動ではまず、『招待クルージング』があります。これは木更津金鈴ライオンズクラブとの共催、木更津市ヨット協会の後援を頂き、ほぼ毎年おこなわれてきました。１９９７年で１８回を重ねることになりました。木更津周辺の子供会や学園の子供達がD.C.C.会員のヨットに分乗して、木更津防波堤沖をクルージングするものです。初めて乗るヨットに最初は戸惑っていても、すぐに慣れてジブシートを引いたり、ティラーを握ったりする元気な子供達や船酔いでぐったり、桟橋につくと元気になる子供達もいました。クルージングの後では、ライオンズクラブの皆様の手作りの

カレーライスを子供達と一緒に食べ、子供達の目の輝きを見、この子供達中から将来のセーラー誕生を期待しながら、また来年も参加しようという気持ちが湧いてきます。もう一つの活動は『木更津市民クルーザー教室』です。木更津市ヨット協会の後援、木更津市教育委員会生涯教育部に広報協力を頂き、１９９５年からスタートしました。目的は木更津市民とヨットを通しての交流、セーリングの普及、余暇の過ごし方の提案などです。卒業生はまだ少数ですが、これからを期待しています。

次にクルージングについてです。東京湾、相模湾、伊豆七島などの近場はもとより、アメリカまでセーリングしてしまった艇や（あの操船技術とあのヨットでよくアメリカまで行けたなーとの後日談もありますが）、南半球のニュージランドから新造のヨットを回航してきたり「七つの海をまたにかけ」とまではいかなくても、インターナショナルな活動もしております。

次にレース関係についてです。クルーザー乗りなら１度は参加したい『鳥羽レース』、最近では伊豆大島で行われる『トウキョウズカップ』などにはたくさんの艇が参加してきました。また遠く『小笠原レース』や日韓を結ぶ『アリランレース』に参加する艇もありました。

D.C.C.主催のレースでは『浮島回航レース』があります。毎年７月下旬に行われ、君津の新日鉄沖をスタートし、勝山の浮島を回り、帰ってくる約３３マイルのロングレースです。２０回以上を重ね、参加艇の半数はビジター艇で多いときは５０艇からのエントリーがあり、東京湾のビッグレースの一つになっています。こんなレースもありました。１９９３年８月におこなわれた『「やっさいもさい」踊りヨットレース』です。キャッチフレーズは『祭は、人々をつなげる最も素晴しいイベントなのです。祭は、一緒に参加するものです。祭は、歓喜の叫びなのです。祭は、参加した人々に一体感を与えます。』

こんな活動もしています。「海難遺児救援募金運動」です。海難事故で大切な一家の主を失った遺児の少しでも助けになればと募金をはじめました。浮島回航レースの前夜祭のバザーの売り上げ、アルミ缶の回収、趣旨に賛同してくれた人の寄付など地道な活動でを続けています。

広報活動について述べます。会の広報誌『D.C.C.通信』が毎月会員の元に送られてきます。クルージングに行った艇の泊地情報、これは最新の情報なので、非常に役立ちます。レース結果、通信／ナビゲーション機器情報、怪我をしたときの応急手当、レースルール、操船技術、艇長心得などセーリングライフに役立つ情報が満載です。他のヨットクラブにも送ったりして情報交換の一翼を担っています。また数年に１回アニュアルレポートも発行しています。

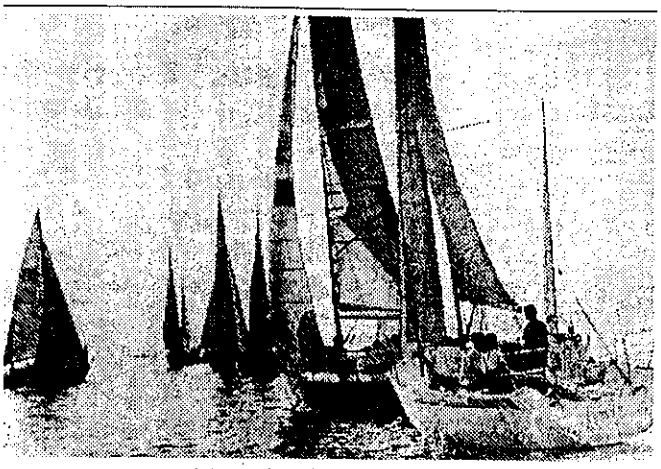
D.C.C.の前会員で木更津以外の泊地に移動された艇も少なからずいます。北は浦安、夢の島、西は横浜、浦賀等です。彼等が東京湾のあちこちにいることはD.C.C.会員にとって大変心強いことです。昔同じクラブで活躍したメンバーは気心もしれ、クラブ間の交流にも少なからず貢献しています。

１９９９年（財）日本ヨット協会と（社）外洋帆走協会が一つになりました。船の大きさと楽しみ方の違いは少々ありますが、『セーリング』の

千葉日産自動車ヨットクラブの歴史について

顧問：森田芳樹

キーワードの前には全て同じだと思います。日本ヨット界の益々の発展と、 D.C.C.のこれからの四半世紀の活発な活動を祈念して、当クラブの紹介を終わります。



一斉にスタートするクルーザー

ヨットマンたち
80キロの帆走競う
浮島回航レース

東京湾内で島を回る唯一のレース「浮島回航レース」（ドルフィンクルージングクラブ主催）が十七日早朝行われ、ヨットマンが富津沖から鋸南町沖の浮島を回って帰る約八十キロの帆走を競った。二十年間続いているクラブの夏季恒例のビッグイベントには、千葉、東京、神奈川などの四十二隻が出場。富津沖に集結したクルーザーの群れは午前五時四十五分、本部艇のマストの「ゴー」の信号旗を合図に一斉にスタート。南東の風一メートルの超微風という悪コンディションに、ヨットマンは躍起となって風を拾いながら色鮮やかな帆に潮風をはらませ、約十時間の爽快なレースを展開した。

木更津市内のセントラル駐車場で前日、開かれた前夜祭では海難遺児募金バザーが行われた。

'94（読売新聞 7/18 朝刊）

今から３０年以上前、稲毛海岸が国道１４号線から約２００メートル位しか埋め立てられていなかった頃、立大ヨット部の払い下げの木造スナイプ、持ち運びが出来るグッピーと本格的なＫ１６とで発足した。

海は、塩干狩りが出来るよう残された時で、引き潮の時は、みおと呼ばれる船の行き来が出来るよう幅１０メートル位、長さ２００メートル位の川のようなところを通って沖に出て帆走するような海で遊び始めたのがキッカケであった。

南の向かい風で　千葉大ヨット部のスナイプをタックタックで小さなグッピーで後から出て先に沖に出る優越感は堪えられなかった。

もっともその頃の千葉大ヨット部はデンギークラスのレベルは低かったと記憶している。

しばらくしてから「こじま」が海岸まで引っ張ってきて、そして第二次埋め立て工事が始まり稲毛海岸でのヨットは出来なくなってしまった。

千葉市で艇庫を作り船を格納していたが、艇庫だけ残り、海は今の海岸まで伸びて遥か遠くになっていった。

しかし何年間はＫ１６を主体に市原埠頭まで大勢乗せて海を楽しんだのも大変良い思いでになり、夏になると岩井海岸に船を運び多くの人達と楽しんだが、残念ながら遊びでヨットに乗るだけだけではヨットの面白さの半分も解らないと思い、いつかレースの面白さを教えたいと思いながら、自分の情熱が年と共に薄れてきたことが、今でも大変残念である。

なお木造スナイプは国府田先生の情熱に負けて、磯辺高校に寄付させられた。

千葉市役所セーリングクラブ

部長：小林晋

私ども、千葉市役所セーリングクラブは昭和５６年有志により同好会を発足致しました。

当初は、ハーバーが出来るまでの間、陸上での勉強会（座学）を実施し海洋への準備をしハーバーのオープンを待ち望みました。今思い起こしますと、市広報課より、海に関する映画を借りたり、仲間同士でヨットに関する勉強をしたことが思い出されます。

発足時は、クラブに船はありませんでしたのでクラブ員所有の艇を借り、海洋実習を致しました。

そして、昭和６０年に念願のクラブ艇を購入することが出来ました。進水式も稲毛ヨットハーバーで盛大に行い、初めは、かなり熱の入った練習の日々が続いたかと記憶します。

その後、対外試合への興味も旺盛になり、クラブの中で検討を重ねまして、平成３年に実業団へ加入させて頂くこととなりました。そして、なんとこの年は全日本自治体職員ヨット競技大会まで参加することとなってしまいました。成績の方は報告するまでもなく、参加することに意義があるということでした。

歴代部長の紹介

安達　薫　昭和５６年～平成 元 年

松木琢三　平成 元 年～平成 ９ 年

小林　晋　平成 ９ 年～現在

クラブの経過

●昭和５６年４月有志による同好会が発足する。発足当時の部員数は、１３名です。

●同年５月旗揚げ総会により発足する。陸上トレーニング、市広報課より映画を借り海洋学の勉強会（座学）を実施する。

●昭和５７年１２月稲毛ヨットハーバーオープンにより、本格的活動にはいる。

●昭和６０年４月クラブ艇を購入する。盛大に進水式を行う。

●平成３年４月千葉県実業団加盟が承認され、本年の第１７回大会が初参加となる。成績は６位であった（ちなみに加盟団体数は、７社である。）

●平成３年１０月第１９回全日本自治体職員ヨット競技長野大会へ初参加をする。成績は、１７チーム中９位であった。

●平成４年第１８回実業団ヨット選手権において、総合3位となる。

●平成４年９月第２０回自治体職員ヨット競技山形大会へ参加する。成績は、１６チーム中８位でした。

●平成５年第１９回実業団ヨット選手権ではなんと最下位となる。

●平成６年以降、下位を低迷する。

そして、なお、今も活動が続いているということは、県連事務局及び実業団の方々のご指導があってのことと感謝申し上げます。今後も、引き続きご指導の程よろしくお願い致します。

千葉大学ヨット部のあゆみ

OB会幹事長：大浜博利
監督　　：斉藤威
コーチ　　：佐藤耕一

千葉大学ヨット部の誕生は、戦後の昭和２４年医学部の水上部（競泳、ボート、カッター）の部員であった関野［昭和２６年卒］、石川［２６年卒］、鵜飼［２６卒、OB会会長］が山中寮のオリンピアヨレ「ネプチューン」を譲り受け、千葉港でセーリングをしたことから始まった。同期の和田［２６卒］や下級生の大浜［２７卒、OB会副会長、県連顧問］、町沢［２７卒］などが加わり、また古い釣り舟を改造し大学病院のベットの古シーツを縫い合わせたセール？のヨット「バラクーダ」なども加わりヨット部に発展して行った。普段の活動は亥鼻の医学部の部室に泊まりながら都川を下って船を千葉港に出し、セーリングを楽しむ毎日であった。

当時ヨット部員は、夏は医学部の学生の運営による山中湖と勝山の夏季寮の寮委員としてその経営にあたり、活動の資金稼ぎも順調で、部員も増加しヨット部の活動が本格的になってきた。昭和２６年５月には正式に「千葉医科大学ヨット部」が誕生した。この間昭和２４年に千葉県ヨット連盟が、発足鵜飼が理事に就任し、昭和２７年千葉県ヨット競技初出場の東北国体（第７回大会、ヨットは松島で行われた）には、成年男子に大浜、町沢、中野［２９卒、県連顧問］が、成年女子には鈴木［２９卒］、熊倉［中野夫人、２８年卒］が出場した。

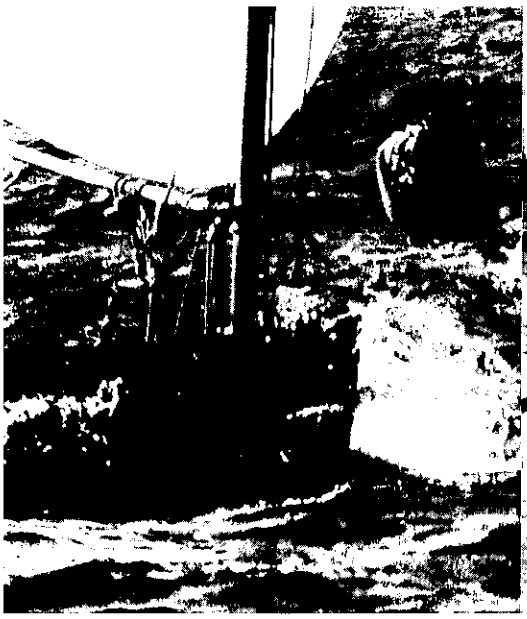
また、部活動は医学部だけでなく全学のヨット部とすべく中野が中心となり大学当局との話合いが持たれ、昭和２７年６月現千葉大学ヨット部が出来上がったのである。

活動の拠点が千葉港（寒川、通船事務所脇）に確保され、艇庫とクレーンも設置された。部員の更なる増加と活動の充実は、県連の発展にもつながり、毎年の国体には数人の部員、OBが千葉県代表として出場し、昭和３１年の兵庫国体（第１１回大会、ヨットは西宮で行われた）では、成年男子に平嶋［３２年卒］、村上［３２年卒］、鈴木［３１年卒］、大友［宮内、３０年卒］、若菜［２９年卒］の５人が、成年女子には鈴木、鶴岡［２９年卒］、神田［盛、３３年卒］の３人が、計８人もの部員が参加した。艇もスナイプやA級ディンギーを購入し（中央大学より中古艇を購入）学生連盟に加盟、当時横浜の市民ハーバーで行われていたインカレに出場するまでとなった。当時千葉県からは唯一学連に加盟しているヨット部であり、関東では古参となっている。

しかし。昭和２４年９月９日には千葉港から横浜港への夜間回航中に天候が悪化、５人乗りのヨットが転覆し、救助を求めに泳いだ１名が亡くなり、昭和３３年６月２８日には千葉港から勝山への夜間回航中に天候が悪化、転覆したA級ディンギーのクルーが川鉄沖の防波堤に頭を打ち付け亡くなるという悲しい事故が発生してしまったことは、まことに残念な出来事であった。

一方、部の活動はディンギーだけでなくクルーザーでの活動も始まり、「くろしお１世」は大島回航中レースを始めとするNORCの数多くのレースに優勝、または常に上位に入賞するなど社会人の中にあってもその活躍は顕著であった。「くろしお」育ちの多くのクルーは現在もなおクルージングやレースを楽しみ、NORCの組織を支えるポジションに就いている者もいるところである。

創設期の昭和２０年代、充実期の昭和３０年代を経て、昭和４０年代は飛躍期を迎えることとな



◀昭和46年愛知県常滑での全日本インカレ。A級ディンギー決勝（スキッパー斉藤）

◀昭和46年 関東インカレ
2部戦準優勝のあと記念
撮影。（4年生の7人）
下段中央が斉藤

った。

大学は医学部と園芸学部（松戸）を除き西千葉キャンパスに移転、統合され、１年２年生は全員西千葉で教養学部に属するというカリキュラムとなり、クラブ活動が更に大きくその輪を広げて行った。当時、館山での夏合宿までの１年生の新入部員が３、４０人にも達する時代であった。

ディンギーの活動はすでに千葉港から稲毛の埋め立て地に新設されたヨットハーバー（「こじま」という元海防艦が稲毛海洋公民館として利用されていた）に移り、春季、秋季の合宿は稲毛浅間神社の隣の公民館を宿舎として行われていた。インカレも富岡を経て葉山森戸海岸に移り、千葉県では千葉工大とともに学連に所属、２部と３部（関東学連では部制を採っており、当時は１部１０校、２部１０校、３部１０校前後であった）を行ったり来たりであった。

しかし、昭和４６年の春季インカレでは３部で優勝、２部では２位となり念願の全日本選手権を賭けての１部戦に駒を進めることができた。数年かけて艇やセールを充実させ、４６年にはスナイプ２隻、A級ディンギー１隻を購入、セールは各艇ニューセールとしたことの結果であった。果たして１部戦でも好調で、８位、７位で全日本出場の権利を取得、２部落ちることなく１部校となったのである。更にその夏斉藤主将［４７年卒、監督、県連副理事長］率いるチームは愛知県常滑市の鬼崎ヨットハーバーで行われた全日本インカレで、A級ディンギーは予選３位で決勝に、最終的には全日本６位入賞となった。

ヨット部誕生時期に生まれた、いわゆる戦後のベビーブームの申し子達の築き上げた栄光の時代は、次の小島主将［４８年卒］の時には秋の関東インカレで総合優勝、次の田中主将［４９年卒］の時にはスナイプ級、新たに導入された４７０級両クラストとも葉山で行われた全日本に出場、決勝進出となって花が開いた。レスキューボート「房総」が入り、より安全な環境で練習できるようにもなった。

一方「くろしお」は昭和４２年１２月２世が進水。大学とOB会の協力で造られた３３フィートのシャープなバウの新艇は、進水間もない４３年の鳥羽パールレースではラダートラブルによる遭難に遭ってしまった。しかし、この時は高山艇長［加藤、４４年卒］の好判断などで全員無事救出、放棄された艇も回収され修理された。以後は１世にも増して活躍し、神子元島レースで優勝するなどビッグレースで好成績を修めることが出来た。

また、現役時代だけではなく卒業してもヨットを続ける者も多くなり、斉藤とともに県連に所属し、館山での若潮国体に千葉県代表選手となった笠原［４７年卒］は、その後千葉県の国体監督に、そして故郷の諏訪湖に戻り桔梗［４９年卒］、青木［掛川、５２年卒］下島［５５卒］などとともに長野国体を成功させたのである。

創部以来４分の１世紀が過ぎてOBの数も２百人を超し、「くろしお」の建造基金や全日本インカレ出場の寄付を集めることによりOB会の結束が強くなってきたのもこの時代であった。昭和４９年には会の名称を「ほたて会」とし、会の本部を千葉市松波の大浜医院に置き、規約も再整備、会費も基金の運用で賄う方式とするなど、現役の支援とOBの親睦を図る体制が出来上がった。

続く５０年代の始めには斉藤が上田監督［４５年卒上田の兄、上田セール研究所］からその任を

ほたて会行事、OBクルージング。大浜副会長（平成11年8月15日）

OB会（ほたて会）行事OBレースの表彰。「優勝カップで一気。」

引き継ぐこととなったが、レーサーの方は男子部員がいない年代もあり、最初から苦労を強いられることとなりそうであった。しかし、一方では女子部員の活躍が目立った時代でもあった。内山［赤松、４５年卒、国体３回出場］以来の女子部員宇野［太田夫人、４９年卒、神奈川県代表国体選手］、村木［吉田夫人、４８年卒］、森迫［藤原、４８年卒］から始まり、宇留野［中川、５０年卒］、永田［川尻夫人、５１年卒］、前原［能星、５１年卒神奈川県代表国体選手］、青木、林［大塚、５２年卒、千葉県代表国体選手］、岩崎［八代、５３年卒、千葉県代表国体選手］などの活躍で関東女子インカレの連覇をなし得た。

その後昭和５５年稲毛で行われた国体では、森山［宮木、５７年卒］、坂田［５７年卒］が成年女子に出場し、皇后杯準優勝に大きく貢献した。また、光岡［５８年卒］は３７回国体以後４１回国体まで連続５大会千葉県代表として出場、安定して入賞を果たした。

この女子の活躍に引っ張られ、５２年のインカレでは加瀬川、中迎［５３年卒、千葉県代表国体選手］率いるチームが久し振りに江の島で行われた全日本インカレに出場。スナイプ級は決勝進出となった。

この他個人的には優秀な選手も多く育ち、また、高校からの経験者も入部して来るようになり、部活動は安定期を迎えていたが、今一歩のところで関東インカレを勝ち抜くことが出来ず、全日本インカレ出場の夢を果たすことは出来なかった。

また、山中湖の医学部夏季寮（学生による運営、診療所兼用）の寮委員を中心に医学部ヨット部が再び作られ、６１年の山梨国体では体育会ヨット部に代わって運営の手伝いをすることとなった。以来千葉大学には２つの学生クラブが共存している。いずれのクラブも５７年からは稲毛ヨットハーバーを中心に活動している。

一方、「くろしお」は５５年３世（なかよし３３フィート）が進水した。このころから日本のクルーザー界はオフショアレーサータイプのボート（細いマストに中間リグ、薄いハルの軽量艇）が多くなってきたが、当部では学生ヨットの練習、レースにおける安全の確保が第一であるとし、従来のクルーザータイプの艇を導入することとなった。このため社会人チームの中にあっては、以前ほどレースで好成績を挙げることは出来なかったが、強風下でのトレーニング、九州、四国、紀伊半島、伊豆諸島などへのクルージングも安心して行うことが出来、結果としてはこれと言った事故もなく、学連のレースでは優勝を重ねることができた。

続く６０年代、平成時代は更に部員の数も安定し、（ただし北爪［６２年卒］主将の代は１人だけであった）、女子部員の中には国体の千葉県代表、東京代表などの選手も育ったが、相変わらず関東インカレを勝ち抜いて（予選突破、決勝進出はするものの）全日本インカレに出場することが出来ないままである。新たに佐藤［平成１年卒］をコーチに専任、選手強化を図りスナイプの全日本選手権には浅井［６年卒］、山本［６年卒］が出場し、６年の春の関東インカレでは小寺［７年卒］主将率いるスナイプ級が決勝で日大、関東学院に次ぎ３位となったが、全日本インカレを賭けての秋のインカレでは全日本出場権を得ることは出来なかった。

しかし、稲毛ヨットハーバーで開催されたスナイプ、FJ級全日本のレース運営などでは、毎回支

部員数の減少。今部員の確保が一番の課題。

援部隊の中心メンバーとして県連の活動には大いに貢献しているところである。特に'９３FJワールドではレース運営、大会運営（竹内［６年卒］は通訳として）に大活躍であった。

ところが、８年からは部員の確保が出来ず、４７０、スナイプ両クラスのインカレ出場は出来なくなってしまった。また、１０年の春のインカレはついに欠場。現在部員は３年生が１人、２年生３人、１年生２人の６人のみとなってしまったのである。捲土重来を期し佐藤コーチ、卒業したての若いOBでヨット部の立て直しを図っている昨今である。

この体育会のヨット部とは裏腹に、医学部のヨット部は３０数名の部員を擁し、１０年夏には江の島で行われた東日本医科生体育大会を主管し、チームは団体６位入賞、個人戦は横井（６年生）が圧倒的な強さで優勝、その勢いで全日本医科生大会でも準優勝となった。本年は練習につぐ練習で実力をつけた深谷、加藤、山田の３人の５年生中心のメンバーで、遂に３０年ぶりに優勝するまでに至った。

一方、「くろしお」のメンバーは多くなり、週末の練習ではメンバー全員が艇に泊まることが出来なくなってしまい、合宿所を借りての活動となった。クルージングも行く先々でメンバーが交代しながらとなってしまった。

また、艇も１０年が過ぎ、そろそろリギン類だけでなく艇体にも損傷が多くなり、４年には「４世」（ツボイヨット製、スイング３４）が建造され５月に進水、千葉港に回航し新艇のお披露目となった。今回もまた学生ヨットの基本である安全第一を考え、ハルはFRPをもう１層重ね艇の堅牢化を図った。

しかし、６年夏鳥羽から小網代に帰途の途中、またもや遠州灘で座礁事故を起こしてしまった。部員が多く、十分な経験を積むことなく上級生になった部員の力不足、判断ミスにより起こった事故と言ってもよいものであった。幸い人身事故にはつながらず、艇も堅牢に造ってあったことで最小の損傷でことなきを得た。

この「くろしお」に元年、フランスのポールエコール工科大学からクルーザーのヨーロッパ選手権（その後、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、韓国等も参加し、ワールドチャンピオンシップになった）に参加されたい旨の話が舞いこみ、学連で協議の結果千葉大学が日本代表として参加することとなった。OB会挙げての支援で藤井［２年卒］艇長以下フランスへ、地中海のル・ラバンドウへの遠征となった。結果は１６か国中１３位であった。その後は国内予選を開催、５年に藤森［6年卒］艇長、１０年には平塚［１１年卒］艇長以下で再度のチャレンジとなったが、世界の壁は厚く、また高く１０位以内の目標にはなかなか届いていないのが現状である。

最後にOB会の活動状況であるが、バブルがはじけ、経済状況が悪化し、低金利時代を迎え、基金の運用は厳しい状況となり、会の台所は大変苦しくなってきた。あわせて８年にはOB同士の親睦を再度より一層活発化することとし、会を再建することが検討され、規則の改正、年会費の徴収、行事の開催などが検討された。これより毎年行われていた総会の他に、夏にはOBレースが復活し、OB合同クルージングも再開された。

現在４２０名に上るOBと少ない部員の一致団結で、千葉大学ヨット部の再建が現在の最も大きな課題であり目標であるが、これを乗り越え再度黄金期を迎え、千葉県セーリング連盟の今後の発展にも今まで以上に貢献したいと思っているところである。

千葉工業大学体育会ウインドサーフィン部
発足から今日までのあゆみ

監督・OB会会長：秋葉清美

1981年
富浦市
南無谷合宿所

この度は、千葉県セーリング連盟５０周年事業に際し記念誌発行おめでとうございます。この記念誌に掲載いただけること誠に光栄です

我がウインドサーフィン部は、１９７９年に当時、私が千葉工業大学に入学したことに始まります。早いもので、発足後２０年を迎えることができました。これも千葉県セーリング連盟の皆様をはじめ、ご指導頂いた皆様方に感謝申し上げる次第です。

ウインドサーフィンは、今日ボードセーリングと言う名称で広く浸透しております。１９８４年のロスアンゼルスオリンピック、１９９４年愛知国体より正式種目に採用されていることは、皆様の記憶にも新しいことかと思われます。現在では愛好者の多い海洋スポーツに発展普及して来ました。

当部は、発足後の翌年、１９８０年に体育会に正式加盟することができ現在に至っております。毎年開催される学生選手権大会を主に練習・合宿に励んでおります。

発足当時の状況を振り返ると、今では到底考えれない程の状況でした。２０数年前には、国内で活動していたメンバーも少なく、県内のメンバーも良く知られていない状況でした。もちろん千葉県内で活動している大学等はありませんでした。

千工大に入学し、その直後にあるサーフィンショップで見つけた一枚のウインドサーフインニュースという新聞との出会いに始まります。当時、日本ウインドサーフィン協会内に学生連盟が誕生し、学生達を中心に学生選手権大会やら、新人戦等の競技会が開催されておりました。当時の私にとってこの記事は大変興味深いものでした。早速問い合わせると、やる気があり大学単位で活動していること、学内で認知されている部であれば加盟はＯＫとの返事でした。

しかし、学内でウインドサーフィンを活動しているクラブはなく、心細く体育会本部を訪ねたのは、昨日の様に思い出します。今でも覚えているのは、「ウインドサーフィン、なにそれ。そんな事やっている連中はいないよ。」との冷たい返事でした。

とにかくウインドサーフィンをやりたい。この想いだけでした。アルバイトで得たお金はボード、セール、ウエットスーツとグッズに全て注ぎ込み、授業に出かけながらも、行く先は海に直行するまじめなウインド学生でした。
このまじめな修行の成果も実り、何とか帆走できるまでとなりました。

また、大学での活動実績を重ねる為に、社会人チームで練習させてもらいながら、毎月活動レポートを体育会本部へ提出しました。このレポートが大変充実していたのか、あまりのしつこさに理解を示して貰えたのかは判りませんが、この１年間の格闘の末、１９８０年の１２月に愛好会として、体育会に正式加盟することができました。これが、発足時から創部までの経緯となります。

その後、学生連盟と体育会より、部として活動する為には、顧問の先生を御願いする旨の指導がありました。海にご理解のあるヨット部の顧問である、篠田先生に御願いすることができました。先生には、現在も顧問をお引き受け頂いております。当時より、県連の役員を兼任されおり、ルール内容、レース戦術、海洋知識全般に至るまで、事細かに今日までアドバイスを頂いております。特に安全に対する指導がことのほか厳しく、海の怖さ等をヨットの体験を談通じて説明頂き、印象深いものでした。安全とは自己責任であり、レスキュー艇

1987年8月　創部15周年記念

を持つ必要性等も指導頂ました。現在でも、学連加盟大学の中でも、船舶免許を取得しレスキュー艇を配備しているのは、千葉工業大学だけです。この指導のお陰で、２０年無事故でこれましたことに感謝しております。

また、学内での提出書類の書き方から始まり、言葉使いはもちろんのこと、服装 、髪の毛など風紀上の問題に至るまで懇切丁寧にご指導を頂きました。私にとっては、この時に学んだ事が後に、後輩を得た時の指導に大きな自信となりました。この時の厳しさは、良き伝統として現在も引き継がれております。

この頃、篠田先生より「ウインドサーフィンもオリンピック種目に採用されることであり、ヨットの位置づけとして、県連に加盟しなさい。」とこの一言で県連に加盟することになりました。早いもので、１８年を迎えることになりました。

当初、一人から始まり、２人、３人と仲間が増え、活動も３年目を迎えた頃には、部員も１５人になっておりました。練習用のボードの調達、運搬車の調達・維持と悩みは尽きることはありませんでした。大学からの部費は認めてもらえず、全員のアルバイトで車を買い、自ら車の錆を落としてペイントしたり、少ない部費でやりくりしました。この車で、県内はもとより全国の大会にまで遠征し、成績も上位を狙えるまでとなりました。１９８０年度新人戦では７位に入賞し、１９８１年度全日本スラローム大会では、堂々３位に入賞することができました。

また、学内では体育会本部に委員を派遣したり、第５期の学生連盟執行部に私が選出される等、学内はもとより、学外での活動も認められる様になってきました。第７期の学生連盟執行部には副委員長が選出されるまでとなりました。

４年に進級した頃、篠田顧問より、同好会に昇格させてからでないと卒業させない。この厳しい言い渡しがあったことを今でも、覚えております。１９８２年１２月、同好会に昇格させることが出来き、掟どうり、１９８３年３月、無事卒業させて頂くことができました。しかし、卒業後もこの呪縛の様な言葉は続き、後輩の指導はもちろんの事、県連のボードセーリング委員会の方にまで発展？してしまい、週末には稲毛ヨットハーバーへ通う身となり、ご指導を頂く様になりました。

我々千葉工業大学ウインドサーフィン部では、創部時より日本ボードセーリング協会に所属し、傘下である学生連盟に加盟して活動してきました。学外では県連に加盟して参りました。

しかし、１９８９年に日本ヨット協会内に新しいボードセーリング学生組織ができて以来、我々学連のボードセーラーを取り巻く環境は、一変致しました。しかし、我々の目指すボードセーリングの方向性は従来と何ら変わらないもであることから、日本ボードセーリング協会学生連盟に残り、県内での活動としては引き続き県連に加盟する今までの方針を貫いております。この１０年を経た現在でも変わっておりません。今後とも、ご指導・ご鞭撻の程、御願い申し上げます。

千葉工業大学体育会ウインドサーフィン部 経歴

１９７９年 6月 ウインドサーフィンチーム発足
１９８０年 9月 日本ボードセーリング協会
学生連盟 加盟
１９８０年１２月 千葉工業大学体育会加盟
愛好会 昇格　創部
１９８１年　４月 千葉県ヨット連盟 加盟
１９８２年１２月 千葉工業大学体育会同好会昇格
１９８６年１２月 千葉工業大学体育会 部 昇格
１９９２年　８月 創部１０周年記念事業
１９９７年　８月 創部１５周年記念事業
２００２年　　創部２０周年記念事業（予定）

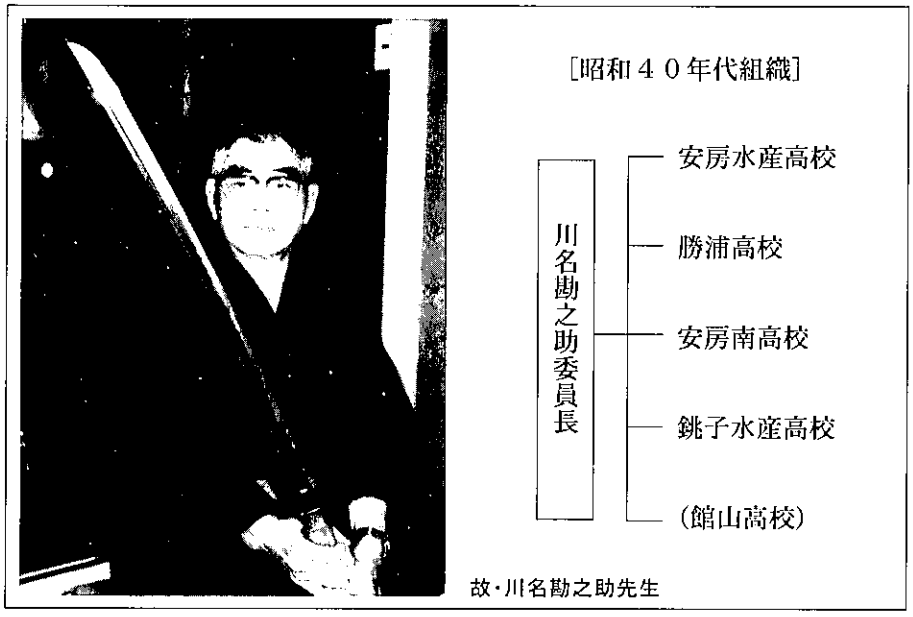
千葉県高体連ヨット専門部のあゆみ

高体連ヨット専門部顧問：國府田由隆

沿革

（１）安房水時代　(昭和32年～昭和52年)

三方海に囲まれた海洋県千葉に、昭和４１年千葉県高等学校体育連盟のヨット専門部が生まれた。その礎となったのが安房水産高校であり、その指導に携わった故川名勘之助先生にある。昭和３２年伊東国体に使用したスナイプ２隻が、千葉県ヨット連盟より安房水産高校に貸与され、短艇部員の一部の生徒が中央大学ヨット部の特訓を受け、その年の秋、滋賀県大津を会場として開催された第１３回国体ヨット競技に初出場したのが始まりで、その後、部員も増え、昭和３５年４月、短艇部と分離独立しクラブとして誕生した。



故・川名勘之助先生

昭和３５年８月、宮城県塩竈で開催された第１回全国高校ヨット選手権大会に関東予選を通過した２種目（Ａ級ディンギー，スナイプ）で出場、初出場にして３位入賞を果たす。以来昭和５２年度第１８回大会まで連続出場の栄誉に輝いている。

昭和３７年、安房水産高校から赴任された南田先生のご尽力により勝浦高校にヨット部が生まれる。先生は、部員と共にスナイプ艇２隻を自作し、部員を安房水産高校ヨット部の合宿に参加させ、力をつけ、昭和４１年より関東大会に出場した。

千葉県高等学校体育連盟にヨット専門部が認められたのはこの頃である。

昭和４７年、勝浦高校南田教諭が銚子水産高校教頭に栄転し、同校短艇部にもヨット班を設けヨットの指導にあたられ、昭和４８年に本県で開催された若潮国体の使用艇が払い下げとなってから新たに迎えた田村顧問の熱意溢れる指導で急速に力を付けた。この年、安房南高校にもヨット同好会が誕生、安房水産高校ヨット部顧問山口正則先生の指導のもとに安房水の練習・合宿に参加し、実力を付け、昭和４８年度関東大会に初出場し、安房水、安房南そろって予選を突破、８月に三重県伊勢市で開催された第１４回全国高校ヨット選手権大会に出場、女子スナイプ級で安房水優勝、安房南第３位入賞の快挙を遂げた。

昭和４９年、関東大会では安房水優勝、安房南第３位で予選を通過、全国大会に駒を進めるが安房南高校が二年連続第３位の成績を収めたが、その後安房南高校ヨット同好会は廃部となる。

昭和４９年の安房南高校の廃部が契機となり、本県高校ヨット界は氷河期に入る。

千葉県高等学校総合体育会ヨット競技　開会式

（２）磯辺高校の台頭　(昭和53年～平成9年)

昭和５３年、千葉市の埋め立て地に千葉県立磯辺高校が創立、同校の開校と同時にヨット部が誕生、丁度その頃、それまで全国で常にトップの座に君臨していた安房水産高校が、川名先生のご退任と生徒減により衰退し、ヨット専門部の氷河期を迎えていた。磯辺高校の台頭によりヨット専門部に新風吹き込み、かって全盛を誇った安房水にかわり磯辺高校が全国のトップの座に君臨するようになった。

昭和５３年以降ヨット専門部長も神子誠一安房水産高校長から廣川善任磯辺高校長に代わり、ヨット専門部委員長も佐藤正直先生から磯辺高校教諭でヨット部監督、顧問兼指導者の私、國府田由隆に引き継がれた。

磯辺高校は、昭和５３年７月に早くも長野国体千葉県予選に出場、少年女子スナイプ級で千葉県代表となり、長野県諏訪湖で開催された関東水域予選に出場したが本大会の出場権は獲得できなかった。この年の新人戦から磯辺高校の破竹の勢いは止められず、全種目優勝する。

昭和５４年４月第３５回栃木国体のヨット競技が千葉県で開催されることとなり高校生種目の少年男女スナイプ級の選手強化に入る。同年５月県高校総体に出場３種目制覇、男子スナイプ級に前田義明・三浦明夫・大和久貴・小川昭一、女子スナイプ級に高沢正子・東軒博美・宍倉優裕子、女子ＦＪ級に高山恵・河野容子・加藤なぎさ・千村恵子が出場しそれぞれ優勝し、種目優勝と男女総合優勝をする。続く６月に開催された関東大会では女子種目２種目優勝、初の全国総体出場を果たす。勝浦高校男子ＦＪ級３位、女子スナイプ級３位、８月、滋賀県で開催された全国高校総体に磯辺高校女子２種目に出場するが惨敗。

９月宮崎国体に磯辺高校より少年男女２種目出場

１１月県高校新人大会にて磯辺全種目完全優勝する。

昭和５５年６月磯辺高校ヨット部創部三年目にして関東高校ヨット大会４種目完全優勝、関東高校ヨット史上初の快挙。勝浦高校女子スナイプ級２位、８月香川県高松市で開催された全国総体に全種目参加、一校２６名の選手団は全国でもトップ。結果は女子ＦＪ級３位、女子スナイプ級４位、男子スナイプ級７位、男子ＦＪ級１１位と３種目入賞果たす。９月第３５回国民体育大会ヨット競技が稲毛で開催される。少年男女の両種目に磯辺高校が出場し、少年女子スナイプ級(高沢正子・東軒博美・宍倉裕子)で優勝(初の全国制覇)する。１１月県高校新人大会にて磯辺高校総合優勝Ｖ２達成。

昭和５６年６月関東高校ヨット大会にて磯辺高校女子２種目優勝、男子２種目３位入賞。全種目で全国大会へ。勝浦高校女子スナイプ級２位。８月江ノ島で開催された全国高校総体で磯辺高校女子スナイプ級２位（松永香・中村博美）となる。９月少年女子（磯辺高校松永香・中村博美）の活躍により皇后杯２位となる。

昭和５７年５月県高校総体磯辺高校Ｖ３達成。

県総体大会レース・運営風景

６月江ノ島で開催された関東大会にて男子スナイプ級２位、男子ＦＪ級４位、女子スナイプ級２位、女子ＦＪ級優勝する。８月鹿児島で開催された全国高校総体では女子ＦＪ級４位入賞する。

昭和５８年５月県高校総体完全Ｖ達成。この年、愛知県蒲郡で開催された全国高校総体で磯辺高校女子ＦＪ級（青木恵子・並木あきよ）優勝する。９月あかぎ国体では少年男子スナイプ級（磯辺高校阿部龍介・猿田真尚）優勝し天皇杯２位となる。１０月勢いにのった磯辺高校は県高校新人大会でも活躍、総合優勝Ｖ６達成する。１１月東京夢の島で開催された第一回全日本ＦＪ級ヨット選手権大会で磯辺高校（並木淳・小林雅春）が初代チャンピオンに輝く。

昭和５９年関東高校ヨット大会で優勝した磯辺高校女子スナイプ級（高師牧子・浪越百合子）は秋田県本庄市で開催された全国総体第２位となる。

昭和６０年磯辺高校は、男女スナイプ級・男女ＦＪ級の４種目で全国高校総体に出場し、男子スナイプ級（関根恒久・並木明）で優勝する。全国総体での優勝２回目となる。１１月千葉市で開催された第三回全日本ＦＪ級ヨット選手権大会で磯辺高校（太田雅彦・田中俊也）第３代チャンピオンとなる。

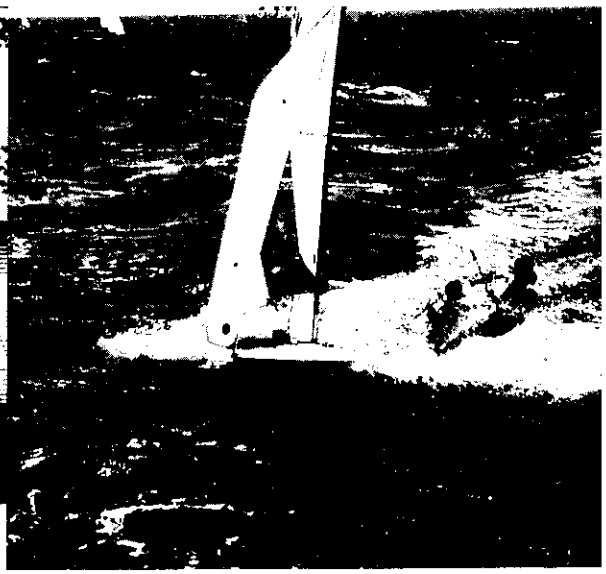
昭和６１年６月関東大会で磯辺高校女子スナイプ級で８年連続優勝を飾る。８月鳥取県境港市で開催された第４回全日本ＦＪ級ヨット選手権大会で磯辺高校（小寺・野口）３回目の優勝飾る。同月全国高校総体にてスナイプ級男子が全国４位となる。つづく第４１回甲斐路国体では少年男子ＦＪ級優勝（磯辺高校）少年種別に優勝する活躍を見せた。

昭和６２年５月、県高校総体で男女４種目完全優勝する。６月、千葉市稲毛で開催された第３９回関東高校ヨット大会では、女子スナイプ級で磯辺高校（田中佳代子・笠野智子）が優勝、女子ＦＪ級で２位、男子ＦＪ級では勝浦高校が３位入賞を果たす。８月に行われた全国高校総体では関東を制覇した磯辺高校の女子スナイプ級の田中佳代子・笠野智子が全国２位となる。同月、鳥取県で開催された第１３回ＦＪ級ヨット世界選手権大会に本県より磯辺高校・勝浦高校が参加、勝浦高校の島津孝行・長谷川貢一の両君が日本高校生初の世界チャンピオンに輝く。９月沖縄県で開催された国体で少年女子ＦＪ級（山本貴代・野口明美）千葉県に貢献。１０月に山梨で開催された第４回全日本ＦＪ級ヨット選手権で磯辺高校（久保・丸山）優勝、第４代チャンピオンとなる。

昭和６３年６月、江ノ島で開催された第４０回関東高校ヨット大会では磯辺高校が男女スナイプ級・女子ＦＪ級で優勝、男子ＦＪ級３位で男女４種目関東水域代表となり全国総体の出場を決める。
８月兵庫県西ノ宮で開催された全国総体では女子ＦＪ級２位・男子ＦＪ級５位となる．この年に北海道江差で開催された第５回全日本ＦＪ級ヨット選手権大会で磯辺高校（三浦航志・松倉祥夫）が優勝、第５代チャンピオンとなる。磯辺３年連続４回目の優勝。１１月第２回資生堂カップ４７０女子国際レースに全国高校生初のバルセロナオリンピック候補選手として磯辺高校の葛西美恵子・土屋理加が参加、国内２位となる。３月、ナショナルチームの選手として沖縄での強化練習に参加。本県初のヨット競技におけるオリンピック選手の輩出が期待される。

平成元年６月茨城県霞ケ浦で開催された関東大

平成3年全国総体優勝の磯辺高校



'97FJ級ワールドの日本チーム・磯辺高校（高橋・吉田）

会で磯辺高校女子スナイプ級優勝、男女ＦＪ級２位となる。８月香川県高松で開催された全国総体に関東代表として磯辺高校出場、結果不振、全国１２位に終わる。９月北海道国体では全国総体の不振を嘗らす。少年種目男女に出場した磯辺高校は大活躍、少年男子ＦＪ級で優勝、少年男子スナイプ級６位、少年女子ＦＪ級７位の成績を挙げ、天皇杯３位獲得の原動力となる。千葉県にとって秋季大会につなげる大健闘。

平成２年５月、県高校総体開催（稲毛）。磯辺高校１３年連続男女総合及び種別優勝。６月関東高校ヨット大会を稲毛で開催する。本県から出場した磯辺高校は男子Ｓ級３位、ＦＪ級４位、女子Ｓ級優勝、女子ＦＪ級４位、男女Ｓ級が全国高校総体に。勝浦高校不振。
８月宮城県七ヶ浜で開催された全国高校総体では男子Ｓ級２位、女子Ｓ級７位と磯辺高校二種目入賞する。同月稲毛で開催された全日本ＦＪ級ヨット選手権大会において磯辺高校第３位・５位・９位入賞する。１０月県高校新人大会では磯辺高校が総合優勝の連勝記録を更新。男子ＦＪ級で勝浦高校が優勝する。

平成３年４月千葉県高体連ヨット専門部の復活と低迷の続いた千葉県のヨット競技を全国のトップレベルに押し上げた実績及び本県の高校ヨット競技の技術・競技力向上並びに発展に寄与したヨット専門部委員長で磯辺高校監督の小生は、千葉県教育委員会に栄転。本県高校ヨットの復活にかけた１３年間。５月県高校総体開催。本年も磯辺高校の活躍は続く。男女総合優勝をはじめ、男女３種目制覇。男子ＦＪ級は勝浦高校優勝する。この種目新人大会に続く２大会制覇。
６月、江ノ島で関東高校ヨット大会開催。磯辺高校がＦＪ級・Ｓ級の３種目優勝を飾る。勝浦高校も大健闘、男子Ｓ級２位、男子ＦＪ級３位で本県から２校が全国総体に出場するのは久々である。
７月、イタリアで開催されたＦＪ級ヨット世界選手権大会に磯辺高校より、葛西美恵子・小杉美恵子の二人が日本代表として参加、総合第２位、レディスで優勝する。８月静岡県三ヶ日で全国総体が開催される。関東水域代表として参加した磯辺高校が女子ＦＪ級完全優勝（鷹野・小杉・奥田・湊・藤本）・女子スナイプ級２位（土屋（美）・尾島・土田・土屋（淑）・古田・竹原）、男子ＦＪ級１３位。優勝した磯辺高校は３回目の全国制覇となる。１０月県高校新人大会を開催。男子スナイプ級勝浦高校優勝（通算３回目）。男子ＦＪ級勝浦高校優勝（通算２回目）。女子スナイプ級磯辺高校優勝（通算１３回目）。女子ＦＪ級磯辺高校優勝（通算１４回目・連続１２回優勝）

平成４年５月県高校総体（稲毛）男子スナイプ級勝浦高校優勝。男子ＦＪ級勝浦高校初優勝。女子スナイプ級・女子ＦＪ級は磯辺高校の連勝記録更新。
６月茨城県霞ケ浦で開催された関東高校ヨット大会には本県より二校出場。女子スナイプ級で磯辺高校優勝。女子ＦＪ級磯辺高校２位、勝浦高校３位。男子ＦＪ級では磯辺高校が５位入賞する。７月宮崎県日南市で開催された全国高校総体では女子スナイプ級惨敗。女子ＦＪ級では磯辺高校が全国２位に入賞する。１０月県高校新人大会開催。男女共磯辺高校が優勝する。

平成５年５月第４６回千葉県総合体育大会開催。ヨット競技に関しては２５回目となり記念すべき大会となる。男女ともに磯辺高校が制覇。

６月関東高校ヨット選手権大会を稲毛ヨットハーバーで開催。地元開催と言うことから磯辺・勝浦・銚子水産高校の三校が参加する。男子ＦＪ級で磯辺高校が全国大会に駒を進め、女子ＦＪ級も２位で関東通過する。その他不振。
７月２１日より千葉市稲毛ヨットハーバーを会場として１９９３年ＦＪ級ヨット世界選手権大会が開催された。６か国１３５艇の参加のもとに開催された本大会では磯辺高校出身の高木・浅利選手が第１４代世界チャンピオンに輝く。高校生では磯辺高校森下・鈴木組がレディース２位となる。
８月全国高校総体が茨城県霞ケ浦で開催された。この年より男女スナイプ級が無くなりＦＪ級の一本化となる。本県から参加した磯辺高校の男子ＦＪ級（仲村・岡本組）が５３位、女子ＦＪ級．森下・鈴木組）では１５位におわる。

平成６年５月、県高校総体は全国総体と同様ＦＪ級の一本化を図る。男女ＦＪ級で、磯辺高校の上位独占、完全優勝。男子総合優勝磯辺高校の３年連続通算１６回目、女子総合は同じく磯辺高校の８年連続８回目の優勝を飾る。
６月神奈川県江ノ島で開催された関東高校ヨット大会では本県勢の不振で唯一の男子ＦＪ級で磯辺高校（大西・小沢組）が７位入賞インターハイに駒を進める。
７月ＦＪ級ヨット世界選手権大会に本県より全日本チームの一員として磯辺高校の広瀬・真田の両選手が選抜されドイツに遠征、１３位に終わる。
８月鳥取県境港で全国高校総体が開催され、磯辺高校８位入賞する。
１０月県高校新人大会開催。男女両種目で磯辺高校が圧勝する。１１月、この年より関東高校選抜ヨット大会が開催される。第１回大会は山梨県山中湖で開催され本県からは磯辺高校が参加、男子ＦＪ級で３・５位。女子ＦＪ級では同じく磯辺高校が２位・３位となる。

平成７年６月艇種変更となって２年目の関東高校ヨット大会は茨城県霞ケ浦で開催される。磯辺高校男女両種目で全国切符を手にいれる。男子７位、女子２位・３位となる。８月山梨県山中湖で開催された全国高校総体では本県勢不振。１０月県高校新人大会では勝浦高校が男子シングル・デュエット競技で優勝。磯辺高校２・３位。女子シングル・デュエット競技では磯辺高校上位独占、総合優勝の記録を更に更新する。

平成８年５月県高校総体稲毛で開催。男女ＦＪ級ともに磯辺高校優勝独占。６月神奈川県江ノ島で開催された関東高校ヨット大会に勝浦高校・磯辺高校参加、惨敗。１０月県高校新人ヨット大会男子ＦＪ級デュエット競技勝浦高校制覇。女子ＦＪ級デュエット・ソロ競技の両種目磯辺に凱歌。本県のレベルダウン。

平成９年３月第３回関東高校選抜大会を稲毛ヨットハーバーで開催。女子種目で磯辺高校（吉田・高橋組）２位。５月千葉県高校総体開催。男子ＦＪ教ソロ・デュエット競技で勝浦高校優勝。女子競技では両種目磯辺高校独占する。
６月関東高校ヨット大会では女子ソロ競技で磯辺高校優勝、全国大会へ。７月ＦＪ級ヨット世界選手権大会に本県より日本高校選抜チームに磯辺高校から２チーム選抜され、アメリカ・サンフランシスコに遠征、本県勢健闘し、高橋路子・吉田祥緒第４位。
８月京都府宮津で開催された全国総体では女子ソロ・デュエットで１７位におわる。続く９月大阪府で開催された第５２回国民体育大会少年女子ＦＪ級で第２位、天皇杯得点に貢献する。
平成１０年３月第４回関東高校選抜大会が神奈川県逗子で開催される。本県より磯辺高校参加、男子ＦＪ級で第３位入賞。５月県高校総体開催。男女両種目で勝浦高校活躍。男子優勝。女子優勝磯辺高校。６月関東高校ヨット大会が山梨県山中湖で開催。本県より出場した勝浦高校大健闘、男女両種目でインターハイ出場を決める。磯辺高校の連続全国総体出場の伝統の灯が消え、勝浦高校の活躍する時代到来か？

高校ヨット
- 磯辺高校
- 安房水産高校
- 勝浦高校
- 銚子水産高校
- （稲毛高校）
- （検見川高校）

JISマークは信頼の証です

JIS認定工場

建築工事用シート・メッシュシート・各種テント工事一式
ネット・親網・仮説ゲート・建築・土木仮説資材機材一式
木製建具・外壁タイル・内壁タイル・石材

明治商工株式会社

東京支店
☎ 03 (3494) 6211(代)　FAX 03 (3494) 6855
東北支店
☎ 022 (258) 8891(代)　FAX 022 (258) 8904
大阪支店
☎ 0726 (69) 5311(代)　FAX 0726 (69) 5310
札幌営業所
☎ 011 (372) 7508(代)　FAX 011 (372) 7509
盛岡営業所
☎ 019 (652) 1074(代)　FAX 019 (652) 8709
青森出張所
☎ 0176 (58) 1027(代)　FAX 0176 (58) 1032
福島営業所
☎ 0244 (24) 5148(代)　FAX 0244 (24) 5310
北関東営業所
☎ 048 (760) 1055(代)　FAX 048 (755) 3120
東関東営業所
☎ 0474 (93) 2151(代)　FAX 0474 (93) 2152
名古屋営業所
☎ 0587 (95) 8516(代)　FAX 0587 (95) 8518
札幌工場
☎ 011 (372) 7508(代)　FAX 011 (372) 7509
東北工場
☎ 0244 (24) 5333(代)　FAX 0244 (24) 5310
関東工場
☎ 048 (797) 1085(代)　FAX 048 (798) 9565
関東第二工場
☎ 048 (798) 9192(代)　FAX 048 (798) 9193
関東第三工場
☎ 048 (797) 0021(代)　FAX 048 (798) 9565
関西工場
☎ 0726 (69) 5311(代)　FAX 0726 (69) 5310

本社　〒141-0031　東京都品川区西五反田1-25-1　KANOビル
☎ 03 (3779) 4615(代)　FAX 03 (3779) 9855

磯辺高校ヨット部 ――「歴史をひもとく」――

千葉県立磯辺高等学校ヨット部OB会
会長：三浦明夫

昭和53年、初代磯辺高校ヨット部顧問である国府田由隆先生が千葉県立磯辺高校に赴任が決まり、初代校長の廣川善任先生(故人)と、将来の磯辺高校の目指す方向について、新設高校であること、近隣の伝統校に追いつくこと、高校の前面に東京湾が一望できることなどから、運動部の活動では、海洋スポーツの特にヨット競技を取り入れ、「特色ある学校」を目指す事を熱く語りあわれたそうです。今から5年前に教育委員会が押し出された「特色ある学校づくり」の先取りであり、それを成功させるには3年間で全国大会(国体を含む)で優勝することを、決意され、当然、部を指導していかれる国府田顧問にも、大きなプレッシャーとなったそうです。

現在、千葉県セーリング連盟の理事長、インターナショナルFJ級の協会常任理事（ワールド担当）等々を歴任され、日本ヨット界の発展に貢献されている国府田先生であるが、磯辺高校に赴任される前からヨット競技の世界で活動されていたわけではない。昭和42年、大学を卒業され、すぐに教員となられ、高校、大学を通じて培ってきた陸上競技の指導に体力的限界を感じ、新たなスポーツを模索していた時、木更津の海を白帆が優雅に走る光景を目の当たりにしてからヨットに憧れ、それまで20年間親しんでこられた陸上競技からヨット競技に転換されたそうです。ヨットといえば、高級感漂うスポーツであるという印象は今も昔もかわらないそうであるが、当時自分がヨットに親しむためには安月給では到底不可能であると考え、自分で作るしかない。作るためには設計図を手に入れ、材料を調達するしかないと、横山設計事務所から図面を取り寄せ、材料を集め、自作に取り組まれた。そして、約半年かかりY－15を完成させ出来上がった艇で、千葉港から船橋沖までのクルージングで、すっかりヨットの虜となられた。陸上競技をやっていたころの体力と脚力は自信があり、特に帰りの南風は船橋から千葉港までの三角波の中のフルハイク、この時の感動が今に繋がっているそうです。

海への愛とあこがれを持つ部員が、「自主性を持ち海上・陸上共に厳しい練習を自らに課して日本一を目指していく」という磯辺高校ヨット部の部風は、初代顧問の国府田先生の競技スポーツにおける厳しい姿勢と、海と生徒への熱い情熱そして愛情が、育んだものに他ならず、磯辺高校ヨット部OB・OG215名の誇りと、一番大切にしているものだそうです。

昭和54年、6月、関東高校選手権大会が霞ケ浦で開催され，関東史上初の全種目優勝完全Ｖを達成、4種目全国大会に駒を進める。7月，総勢26名で高松にのりこむ。男女４種目中、３種目入賞を果たす。女子FJ級惜しくも優勝逃す。(高山恵・河野容子3位大健闘)

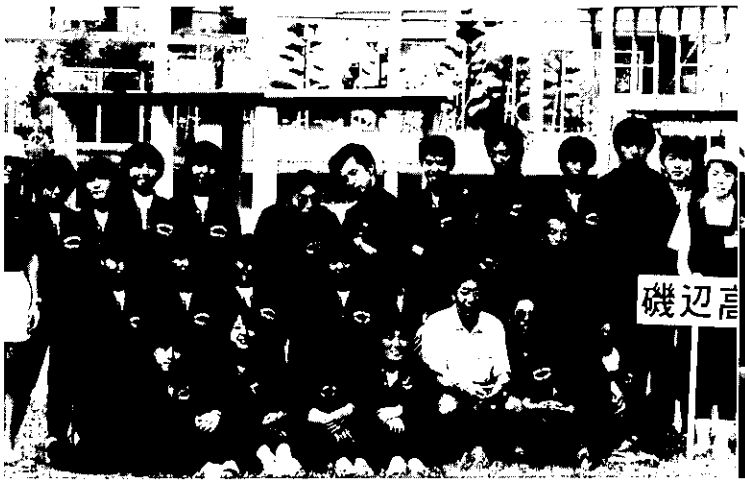
昭和55年、9月、第35回千葉国体が現皇太子をお迎えし、稲毛で開催される。少年男女で出場するが、少年女子で優勝、初の全国制覇。感激。[優勝の立て役者高沢正子・東軒博美・宍倉裕子の1期生]

昭和56年、7月、江ノ島で全国総体開催、男女4種目出場女子スナイプ級2位獲得。(松永香・中村博美健闘）9月、第36回滋賀国体では少年女子スナイプ第2位, 本県の皇后杯順位を第2位に押し上げる。

昭和57年、8月、総勢24名で鹿児島に遠征。男女三種目で鹿児島錦江湾で開催された全国高校総体出場，女子FJ級四位入賞。この年初めてOGで看護学校に進学した内田靖子(現鈴木)がコーチとして引

◀ 1期生。水たまりでの、練習。

▼ 1期生。



5期生。インターハイのメダルを胸に。

率、女子選手のコンディション作りに実績をあげる。9月、第36回島根国体が流人の島「隠岐の島」で開催される。3mを越える日本海の荒波の中で健闘、少年男子スナイプ級の神作聡・阿部龍介のペアは第3位入賞、少年女子スナイプ級内田法子・丹生麻子第2位、成年女子スナイプ級に出場したOG松永香・中村博子も2位入賞し、千葉県は皇后杯2位の成績をおさめ千葉県に大きく貢献する。

昭和58年、7月、まさに暑い夏の日、愛知県蒲郡で開催された全国高校総体では、男子スナイプ級に出場した阿部龍介・猿田眞尚組は最終レースまで優勝の一角にありながらコースミスで優勝を逃し3位となる。一方，女子FJ級の青木恵子・並木あきよ組は、8mの風の中，第二マーク回航後、三度の沈をし、大きく順位をさげたが後の追い込みでトップフィニッシュし磯辺高校はじまって以来初の全国総体優勝をする。

9月、あかぎ国体が東京夢の島で開催される。少年男女の4種目に出場し、少年男子スナイプ級で優勝。少年女子FJ級六位。成年女子スナイプ級に出場した松永香が6年連続優勝を重ねている佐賀県の諸井美保選手を破り優勝。佐賀の牙城を崩す。磯辺の活躍で天皇杯第2位となる。

昭和59年、中心選手は女子のみとなり、苦しい戦いをしなければならない年であった。この年の全国総体は秋田県本庄市で開催され、女子スナイプ級で第2位の成績を収める。続く第39回若草国体では，全国総体に出場できなかった女子FJ級の町田・藤井・兵藤組が第3位となり、皇后杯3位の成績を収めた。

昭和60年，男女部員が40名を越える第二期黄金時代を迎え最強のチームができあがる。

特に、男子スナイプ級の関根恒久・並木裕の県高校総体・関東大会・全国総体・国体の四冠は全国でも評価され、日本ヨット協会より優秀選手賞を受賞するなど各賞を受賞する。一方山中湖で開催された、第3回全日本FJ級ヨット選手権大会で太田雅彦・田中俊也が全日本チャンピオンとなるほか上位独占する等、全国ではトップの成績を上げ、磯辺高校ヨット部の第二期黄金時代を築いた。

昭和61年、9月、第41回甲斐路国体が山中湖で開催され、少年男子FJ級で小寺・野口組優勝，女子FJ級第2位、少年男子スナイプ級15位。少年種別優勝を飾る。天皇杯2位。

昭和62年、7月、鳥取県境港で第13回FJ級ヨット世界選手権大会が開催され、磯辺高校から6チーム参加する。最終日に勝浦高校に大逆転され優勝を逃す。8月北海道江差で全国高校総体が開催され，女子スナイプ級に出場した田中佳代子・笠野浩子組が第2位となる。続く第42回海邦国体が沖縄で開催され、少年女子FJ級に出場した山本貴代・田中佳代子・野口明美組が、皆既日食の中、大逆転の優勝を飾り、天皇杯6位、皇后杯2位に大きく貢献する。

昭和63年8月全国高校総体が兵庫県西宮で開催される。コーチにOBの並木淳同行する。宿舎六甲山の山頂。毎日山頂から西宮ヨットハーバーへ。

女子FJ級で葛西・土屋組が第2位入賞。男子FJ級で三浦・松倉組が第5位入賞。女子スナイプ級は島田・高田組で第8位入賞。優勝候補にあった男子スナイプ級は木戸・寺田組不振，14位に終わる。

9月，第43回国民体育大会が京都宮津で開催された。優勝候補の筆頭に挙げられていた少年男女(男子 S級。男子FJ級・女子FJ級)は全レーストップフィニ

◀ 創部10周年記念式典にて談笑する歴代校長。

▼ 昭和63年FJ級ヨット世界選手権大会(オランダ)表彰式。

ッシュしてPMS。沖縄国体に続く失格。
10月、北海道江差で開催された全日本FJ級ヨット選手権大会に4チーム参加。三浦航志・松倉祥生組優勝第４代チャンピオンに輝く。全日本女子470級選手権に葛西・土屋組出場し第4位。バルセロナオリンピック強化選手に選ばれる(快挙)。

平成元年、3月、神奈川県佐島で開催された資生堂カップ女子470級国際レースに葛西・土屋組招待参加、第9位の成績を収める。このころから磯辺高校ヨット部の目標を国際レース派遣に切り替える。
8月、全国高校総体が香川県高松市で開催され，國府田監督千葉大で研修中のため千葉県ヨット連盟強化委員吉田豊氏をコーチに依頼，石井敏弥先生初の監督。男子FJ級11位，女子スナイプ級(山口・成瀬・尾島・土屋・土田・土屋淑子)は12位と振るわず、悔しい思いで帰郷する。9月第44回国民体育大会が北海道江差で開催され、少年男女の活躍で天皇杯第3位に輝く。この年、國府田先生は12年連続千葉県チーム監督となる。少年男子FJ級優勝，少年男子スナイプ級6位，少年女子FJ級７位。天皇杯得点72.5点獲得し第2位となる。

平成2年、8月、宮城県七ケ浜町で開催された全国高校総体には石井・二瓶両顧問以下12名で遠征する。男子スナイプ級は、木村・市川組で出場し第２位、女子スナイプ級では第7位に入賞する。9月，第45回国民体育大会が福岡で開催される。少年男女それぞれ活躍、男子スナイプ級で第7位、男子FJ級で第７位、少年女子FJ級で第8位に入賞する。

平成3年、3月、第三期黄金時代到来か。同じく６月に第46回国民体育大会千葉県選手選考会に出場，少年男女3種目で優勝，磯辺高校チームで国体出場決定。7月、イタリアで開催されたFJ級ヨット世界選手権大会に磯辺高校から小杉美恵子。OGの葛西美恵子がコンビを組み海外遠征する。レディース優勝で帰国。8月、静岡県三ヶ日で全国高校総体開催、本校より女子FJ級に鷹野・小杉・奥田・湊・藤本が出場、昭和60年以来3度目の高校総体で優勝する。大金星、賞賛。女子スナイプ級では土屋・尾島・土田・土屋淑子・古田・竹原のメンバーで第2位。男子FJ級は出だし失敗し、最後まで浮上できず13位に終わる。
9月石川県羽咋で開催された第46回国民体育大会では少年男女微風に悩まされて成績不振、得点に結び付かず無念。

平成4年、7月、宮崎県日南で開催された全国高校総体では、結果が出ず、惨敗。9月，第47回国民体育大会では、少年女子FJ級に出場した海宝・高山組は，第2位と健闘，全国総体での悔しさを晴らす。

平成5年、この年は、千葉県ヨット連盟が誘致した1993FJ級ヨット世界選手権大会が稲毛で開催された年である。7月、2年間の準備期間を経て開催される1993世界FJ級ヨット選手権大会がいよいよ開催，IFJO加盟国六か国に日本の高校FJセーラーを集め、総数138チーム参加のもとレースが行われた。磯辺高校からは６チーム。OB のレースチームである磯辺YCから4チーム出場以下のような結果に終った。
高木克也・浅利桂一（磯辺YC）優勝。
森下朋子・鈴木育子（レディース）8位。
中村　純・岡本正義（磯辺高校）81位。小高光絵・井上綾子（同）26位、高橋信昭・木崎剛志（同）71位、田中義衛・中島　基（同）90位
8月，全国高校総体が茨城県霞ケ浦で開催され、男子FJ級の中村・岡本組は53位、女子FJ級は18位に

終わる。続く香川県仁王町で開催された国体でも，森下・鈴木組が出場したが15位に終わる。

平成 6年、8月富山県新湊市で開催された全国高校総体では、男子FJ級（机・矢野・菅野・真田）は41位に終わる。9月、愛知県蒲郡で開催された第49回国民体育大会では、少年女子FJ級（高橋・門馬）は13位，男子シーホッパー級（瀬戸）は15位，女子シーホッパー級（榊原）は19位に終わる。なかなか結果の出ない年であった。

平成7年、7月ドイツで開催されたFJ級ヨット世界選手権大会に日本代表として広瀬・真田が出場し13位。帰国後、鳥取県境港市で開催された全国高校総体に出場した真田・広瀬組は 8 位に入賞する。9月に福島県いわき市で開催された第50回国民体育大会少年男子FJ級で優勝、少年男子シーホッパー級に出場した瀬戸の8位と合わせて少年種別優勝をする。千葉県の天皇杯 2位に大きく貢献。

平成8年、8月、山梨県山中湖で開催された全国高校総体では、男子FJ級が22位，女子FJ級は23位と30位に終わる。8月末に山口県光市で開催された全日本FJ級ヨット選手権大会では．男子FJ級の倉富・吉村組が10位になり、国体へのぞみを繋げる。9月第51回国民体育大会が広島県呉市で開催，少年男子FJ級は健闘して第4位入賞、同じく少年男子シーホッパー級では菅井が第5位に、少年男子で天皇杯第8位に入賞する。一方、少年女子FJ級もプレッシャーを感じながら、第4位に入賞するなど千葉県に大きく貢献する。

平成9年、7月、全日本高校選抜チームに、高橋路子・吉田祥緒・八角綾子・富田真奈美の 4人が選ばれ、アメリカ・サンフランシスコで開催されるFJワールドに参加する。吉田・高橋組が第4位入賞したが、八角・富田組は15位に終わる。日本では経験出来ない風とコースの長さ、選手層のレベルの高さ等を経験して帰ってきた。9月、第52回国民体育大会が大阪府堺市で開催され、少年女子FJ級では吉田・高橋組が見事な成績，第 2 位に入る。(立派)

こうして、この20年間の磯辺高校ヨット部活躍を紐解いてみましたが、選手諸君に忘れてほしくないことがあります。それは、昭和53年にヨット部が創部されてから毎年マネージャーが実に良く頑張って、選手の陰となり日向となり、選手のサポートに奔走してくれたこと。その活躍している姿を見ていると涙の出る思いがする。特に、桜井由美乃初代マネージャーが大変な活躍をしてから，以来つぎのような人々がマネージャーとして代々活躍してくれた。その陰の力が20年にわたる磯辺高校ヨット部の歴史と千葉県ヨット連盟の歴史に色を添える原動力となってきた。

[マネージャー一覧]

昭和53年～55年　桜井由美乃
56年～58年　渡辺純子
58年～60年　福沢幸代
60年～61年　森万希子 山本さおり
61年～62年　森万希子 小野口啓子 中西純子
63年～平成元年　峠薫
平成元年～ 2 年　高橋千尋
2 年～ 3 年　平野幹子
3 年～ 4 年　河島清美
4 年～ 6 年　山崎千代乃
5 年～ 7 年　辛木志穂 杉谷繭美

〈後に〉

昭和53年に学校創立と同時にヨット部が創部、故広川善任校長の一言があって今日のヨット部が続いてきた。勿論、学校創立当初，準備委員でもあった松井衛先生(現在成東町助役)のスポーツに対する助言も大きく、一方、資金面では初代事務長であった故高橋事務長、さらに、横浜国立大OBの白鳥氏(現在エバラ電気社長)や千葉県ヨット連盟及び地元クラブCYBCの諸氏、さらに千葉県教育委員会・千葉県体育協会の支援あって今日に至っている。また、多くの父兄のなみなみ成らぬご理解とご協力あっての賜物と感謝する次第であります。

磯辺高校ヨット部は、こうした方々のご支援あって、創部3年目にして全国にその名を高め、歴史と伝統のある高校と対等の、いやそれ以上の戦いをしてきた結果、今日に至っているわけであります。

時代は変われど、学校体育のそれも教科外活動とはいえ、スポーツを志した以上全国で戦えることが芯の喜びを味わうことであり、少しでも良い成果をあげれば、それが誇りにつながるはずであります。今、学校を取り巻く環境は大きく変わろうとしていますが、スポーツそのものはそう大きな変化があるとは思いません。これを機に、多くのOB・OG諸氏にお願いしておきます。伝統と歴史を是非守ってくださいと！

磯辺第一中学校
ヨット部の始まりと今

顧問：水嶋義次

現部長が1年生の時の春の大会（浜名湖に）

本校は、千葉海浜ニュータウンの開発に伴い、昭和55年（１９８０）に埋め立て造成地に開校し、本年（１９９９）で２０年目を迎える。全校の生徒数は330名である。学区は人工海浜に最も近く、東京湾に接し稲毛ヨットハーバーを近くに擁し、加えて高校ヨット界の名門校である磯辺高等学校が近くにあり、ヨットに適した環境条件を具備していたのである。この恵まれた環境条件のもとに、磯辺高校に協力支援いただくとともに、千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、日本ヨット協会、ヨット会社の協力のもとに、中高一貫ヨット部の推進をということで、昭和６１年に千葉県では初めて中学校にヨット部が設立された。

設立当初は、ヤマハ東京株式会社よりシーホッパー１０艇ライフジャケット２０個を貸与され、西村保広監督コーチ、山浦上次顧問のもと１年生２９名、２年生２名（自力帆走可）の３１名で練習を開始した。当初、練習は主に陸上で、ヨットに関する基本的な内容を行った。例えば、ヨットで使う様々なロープの結び方の練習（ロープワーク）やヨットに実際に乗れるように、部品をヨットに組み立てること（艤装）などがある。ヨットに乗っての練習は、このようなことができて初めて始まるが、２年生の２人以外はヨットに乗った経験が無いので、乗り方（操船）については顧問が同乗して行い、陸上においてもヨット操作の練習を繰り返し行った。また、ルールや安全対策についての指導も同時に行われた。

このようにしてスタートした磯辺第一中学校のヨット部も今年で14年目を迎える。部員数の変遷をみると、１年目３１名、２年目３８名、３年目４８名（最大）、４年目３５名、５年目４０名、６年目４０名、７～８年目正式な記録不明、９年目１６名、１０年目１４名、１１年目１９名、１２年目２１名、１３年目２３名であった。学校は１年生から３年生までいるので、単純計算で考えても磯部第一中学校ヨット部を卒業していった生徒数は150名を越えている。ただ、学校の生徒数が１０００名を越えていた時代からすると現在は３７２名と３分の１程度に減ってしまい、ヨット部に入部する生徒も減少しているのが実体である。なおヨット部顧問としては西村保広先生が、創立１年目から１０年目までの１０年間、そして、１１年目から現在は水嶋義次が、１２年目からは久保田貴夫が加わり、２人の顧問で指導にあたっている。

ヨットの種類にはいろいろあるが、磯辺第一中学校で乗っているヨットとしては、シーホッパー１０艇を創部当初から乗り継いで、数年前からはＳＲタイプに変わりつつある。シーホッパーとＳＲでは、使用する船は同じでマストもローマストを代えるだけで済み、セイルを新たに用意すればＳＲとして使用できるので、現在はその移行中である。現在７艇ＳＲとして、出艇可能な状態である。ゆくゆくは１０艇ＳＲとして帆走させたいと考えている。なお、中学生の体力からするとシーホッパーはセイル面積が大きく、６～７ｍの風で倒されてしまう現状であり、ＳＲに乗せると８～９ｍ程度まで乗りこなせるので、生徒はシーホッパーに乗りたがらなくなっている。さらに新入生はどうしても体力が弱いのでＳＲよりも小型のミニホッパーに乗せようと考えている。これは、昨年の夏の大会で日本ジュニアヨット連盟から１艇貸与されたものを使用している。ただミニホッパーは、波にたいして弱くすぐに沈をしてしまいが

現在の指導者
水嶋義久　久保田貴夫　海品号と、部員達冬のある一日　第22回全国少年少女ヨット大会新潟県柏崎市の開会式場で　平成9年8月

ちであり、顧問としてはミニホッパーを増やそうか、思い切って“ＯＰ”の用意をしようか迷っているところである。

レースへの参加もまた、セーリングの楽しさを経験できる一つの方法である。もちろん、参加するためには、技術の習得はもちろん、レースで必要な知識もしっかりもっていなければならない。幸いなことに、初心者でも受け入れてもらえる稲毛ヨットハーバーでの千葉県ヨット連盟主催の大会に参加させてもらい、順位はほとんど下位であるが、レースとはどんなものか、１艇でも前にでるためにはどうしたらいいかなど、生徒は大会参加後に急速に腕を上げている実態がある。稲毛以外では、１年に２回ほど、大会に参加している。

１つは、夏に行われる全国少年少女ヨット大会もう１つは春休みに浜名湖で行われる大会である。どちらもシーホッパーＳＲで大会にのぞんでいるが高校生中心のためか上位に入る可能性がほとんどない実態である。何人かはミニホッパーにエントリーして競技しているがこちらは強敵山中湖中学校がいて、その牙城を崩すには、かなりハードな練習が必要である。参考までに、昨年の夏の大会での成績を紹介すると、ＳＲ級は２８艇中吉田裕太（部長）２１位、阿部博幸２２位、直江冬華（女子部長）２４位であった。ミニホッパー級では、３５艇中、小野寺未夏２８位、高科圭悟２９位、下田恭兵３１位、田中伸平３２位であった。

上のような成績ではあるが、生徒達は大会のその場で帆走テクニックを学んだり、新しい友達を見つけたり、修学旅行気分で仲間同士の友情を深め合ったりして、大いに楽しんでいる。

成績も上位に食い込めるようにするためには、やはり普段からの練習が大切であろう。２年前までは朝練として７時１０分から４０分程度マラソン腕立て腹筋背筋などを行っていた。ただ現代っ子は、塾の勉強も忙しく、朝の弱い子が多く今はそれをやめている。平日はハーバーの終了時刻の関係から、学校内で陸上トレーニングを行いヨットに乗るのは土曜日と日曜日そして祝日及び長期休暇の時だけである。それでも、平成９年度調査したら年間に８５回ほどヨットに乗る機会があった。年間の２割を越えるほど乗るチャンスがあるので、もっと上位に食い込ませるようにさせたいと考えている。ただ、ある程度乗れるようになった生徒にとって、『黄色旗では磯辺第一中の生徒はハーバーに戻りなさい』という指導は辛いものがある。強風が吹くことで有名な春の浜名湖の大会で、上位に入っていくためには、１０ｍ前後の風はどうしても練習しておかなければならないのに、８ｍ程度の風で練習ができなくなっているので、これを改めていきたいと考えている。

ただ、７ｍの風（含む波の状況）で、黄色の旗になるというのは賛成である。確かに練習させていると７ｍ程度の風で生徒のヨットはひっくりかえり始めるので、特に１年生が乗っているときには５～６ｍの風が吹き出して来たときは、早めの対応を心掛けている。ただ、そのときに、３年生は残して練習をさせていきたいと考えている。

千葉県ヨット連盟が発足して５０年になる中、磯辺第一中学校ヨット部は１４年の歴史しかないが、今後さらに発展していくためには、生徒数減少という厳しい実態の中、部員数を確保するとともに、一般生徒や保護者にもヨットを理解してもらう努力をしていきたいと考えている。

銚子ヨットクラブのあゆみ

理事:佐野收

●クラブの歴史と活動

「本会は、ヨットを親しむ同好会の集いとし、会員相互の親睦とヨット技術の向上を図り、併せてシーマンシップとヨットマンマナーを身につけるとともに、海洋スポーツの普及と育成振興を目的とする。」これは、銚子ヨットクラブ規約（目的）の一節である。

昭和４７年７月、初代会長山本佐次郎の呼びかけに、銚子市内在住の数名の会員が集まり「銚子クラブ」が発足した。当初の所有艇は、すべて個人所有艇で、自作のＹ１５などがあった。その後千葉県ヨット連盟へ加盟し、銚子市体育協会へも加盟した。

千葉県での国体開催を契機に、クラブ艇としてスナイプ２艇を譲り受け、毎年１回の市民ヨット教室を開催するようになり、市民のヨットへの関心を高め、会員拡大を図った。

昭和５０年代に入ると、会員は増え、近隣市町村からの入会者を含め３０名を越えるほどになった。しかし所有艇はスナイプが２艇、会長所有のＹ１５が１艇、他に自作艇が数艇というさびしいものであった。漁港（本城漁港）のスロープに艇を置き、漁港前の利根川で、細々とヨットに乗るというものであった。しかし、同じ頃利根川を活動水域としていた、銚子水産高校ヨット部と共に活動することで、ヨットレースへの関心を高めていった。

昭和５５年、銚子市により整備された「銚子ヨットハーバー」が銚子ヨットクラブの活動を大きく変えた。整備された場所は、クラブ発足時と同じ利根川で、当初の水域より２Km程上流の河川敷で、艇置場とスロープが整備されただけのものである。しかし、水産高校ヨット部との活動で関心の高かったヨットレースもクラブ内で開催できるようになり、艇置場とスロープが一体化したことで、艇の上げ下ろしが簡単になった。そのため会員数、個人所有艇の数も大幅に増えた。

現在、銚子ヨットハーバーに置かれている艇は、レスキュー艇が３艇、ディンギィーがクラブ艇を含め６０艇余りである。会員も市内はもとより近隣市町、遠くは埼玉県からの参加もあり、現在では６７名となってきた。

現在のクラブの活動期間は、５月から１０月頃までの６か月間である。主に、ヨットレース、ヨット教室を開催している。

ヨットレースは、毎月１回の開催で、「市民体育大会ヨットレース」、「銚子市長杯ヨットレース」等があり、毎回２０艇程度の参加がある。また、銚子市ヨット協会としては、県民大会へ選手派遣している。平成４年には、銚子市ヨットハーバーで初の県民大会ヨットレースを開催した。この大会で、銚子市が見事優勝を果たし、地元新聞を沸かせた。

ヨット教室は、子供向けヨット教室として「少年少女ヨット教室」と一般向け「市民ヨット教室」を実施している。少年少女ヨット教室は、銚子市などの団体から寄付を受けた、OPディンギィーを使用して行われている。参加募集は、地元公民館のアドベンチャー教室や、海洋少年団等と連携を図り、より多くの参加者を募っているが、なかなか参加者が増えないのが悩みである。もう一つの市民ヨット教室も、市広報紙等で募集を行っているが、こちらも参加者が少なく、思うように底辺拡大は進んでいないのが現状である。

平成１１年４月、銚子市名洗町に千葉県と銚子市で整備した「銚子マリーナ」がオープンした。こちらは、外洋クルーザーを中心としたマリーナであるが、スロープ、ディンギィーヤードも整備されている。５月にはオープニングイベントとしてシーホッパー級の東日本選手権が開催された。今後、この銚子マリーナを使用した数多くの大会等が開催されることを期待している。銚子ヨットハーバー開設の時と同様に、銚子マリーナのオープンが、銚子ヨットクラブにとってのよい転機となるよう、会員一同のクラブの発展に努めてきたい。

●役員

名誉会長　山本佐次郎（初代会長）
会　　長　渡辺　富夫
副 会 長　林　　誠
　　下谷　弘
　　高橋　貞雄
理　　事　宇野沢恒夫
　　越川　和政
　　飯島　良夫
　　田村　勇雄
　　竹腰　正義
　　江畑　和久
　　多部田義昭
　　佐野　收
県連担当評議員　渡辺　富夫
県連担当事務局　佐野　收

▲ 平成4年　県民体育大会艇長会議：▼ 銚子市長による号砲スタート

◀ 賞を渡す山本会長。右：故・富田発着水路部長

利根川に白帆が走る

第45回県民体育大会

ヨット競技、銚子が初優勝

千葉県、千葉県教委、財団法人県体育協会、銚子市教委主催、千葉県ヨット連盟（松戸節三会長）主管、健康で明るい県民づくり運動の第45回千葉県民体育大会ヨット競技が、二十三日午前十一時から銚子市松岸町のヨットハーバーの利根川で行われた。

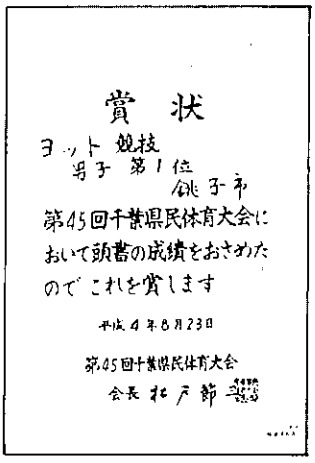
二十七艇が参加して午前十一時と午後零時三十分の二回発走の競技を行ったが、風が南寄りの微風と絶好のヨット日和とあってスムーズに進み、ヨットの白帆が夏の直射に映え、青い水面をスイスイと走るさまは、まさに利根風物詩の圧巻だった。

競技の結果

男子の部は、二回の競技のトータルで、銚子勢の岩瀬、竹腰組が並みいる強豪を押さえて初の優勝を飾った。

二位は千葉、三位館山、四位は安房郡、五位は松戸だった。

女子の部は二艇が参加千葉の長瀬さんが三年連続十回目の優勝をした。



賞　状

ヨット競技
男子 第1位
銚子市

第45回千葉県民体育大会において頭書の成績をおさめたのでこれを賞します

平成4年8月23日

第45回千葉県民体育大会
会長 松戸節

大会で初優勝した銚子市におくられた賞状

ヨットハーバー前の折り返し地点を曲がるヨット＝銚子市松岸町のヨットハーバーで

●平成4年8月27日常総新聞

千葉市セーリング協会

事務局：三橋茂樹

'97年 5. 千葉県民大会

Ⅰ　沿革

(1)創立から１９７５年まで

昭和27年、和田病院　和田平武氏、市教育課長　遠藤健郎氏等のご努力により、千葉市ヨット協会を設立し、昭和30年、千葉市体育協会へ加盟する。以後海洋公民館及び付属ヨット港(現在のこじま公園)をベースハーバーとして、実業団チーム(川崎製鉄・千葉銀行・東洋エンジニアリング・電通・千葉日産・県水道局・県警本部)クラブチーム(千葉ヨットクラブ)を精力的に展開し大きく前進した。

昭和43年より稲毛海浜ニュータウン造成計画により、海洋公民館の付属ヨット港が利用できなくなったため、昭和43年ごろより使用海面を館山に求め、市民ヨット教室、市民ヨットレース等の活動を進めてきた。昭和43年には館山市で開催された第28回若潮国体ヨット競技大会での優勝に、また、大会運営に大きく寄与した。

(2)１９７６年から現在まで

稲毛ニュータウン計画の埋め立ても終わった昭和53年より、新ヨットハーバー建設予定地で第30回市民体育大会ヨット競技の部を開催できることとなったが、ヨット教室、その他のレースは、昭和55年まで館山・大貫で行われた。

また、第35回国民体育大会(栃木国体)のヨット競技会場として、千葉市稲毛ヨットハーバー建設予定地での開催が決まり、昭和55年９月に第35回国民体育大会ヨット競技大会を浩宮徳仁親王殿下ご臨席のもと開かれた。

昭和55年、第33回千葉県民体育大会より、それまで公開種目であった競技が全て正式種目となり、常に上位の成績を収めている本協会は、千葉市の総合優勝に大きく貢献している。

昭和57年８月、待望の稲毛ヨットハーバー施設が完成した。千葉市にヨットハーバーが完成したことにより、優秀選手の育成のみならず、ヨットが市民の身近な海洋レクリエーションとして定着するよう、(財)千葉市スポーツ振興財団が主催するヨット入門コースや親子、ジュニア、職域の各ヨット教室に協力しているところである。その他千葉県セーリング連盟が主催する普及レース、安全講習会、指導者育成講習会にも協力している。平成11年、協会名を千葉市セーリング協会に変更。

Ⅱ　活動状況

(1)組織

本協会には、千葉市体育協会に所属し、他の競技団体との交流を図っている。加盟団体は千葉市に本拠地を置く以下の団体である。実業団チームとして、千葉市役所、千葉県庁、川崎製鉄・千葉銀行・京葉銀行・千葉日産自動車のチームが所属し、県連実業団チームの中心的な役割を果たしている。クラブチームとして、千葉ヨットクラブ・千葉ヨットビルダーズクラブ・ほたて会があり、それぞれが特徴ある活動を続けている。学校の部活動としては千葉大、東京歯科大、磯辺高校、磯辺第一中学が加盟し、若年層からのレベルアップを果たしている。

(2)開催行事

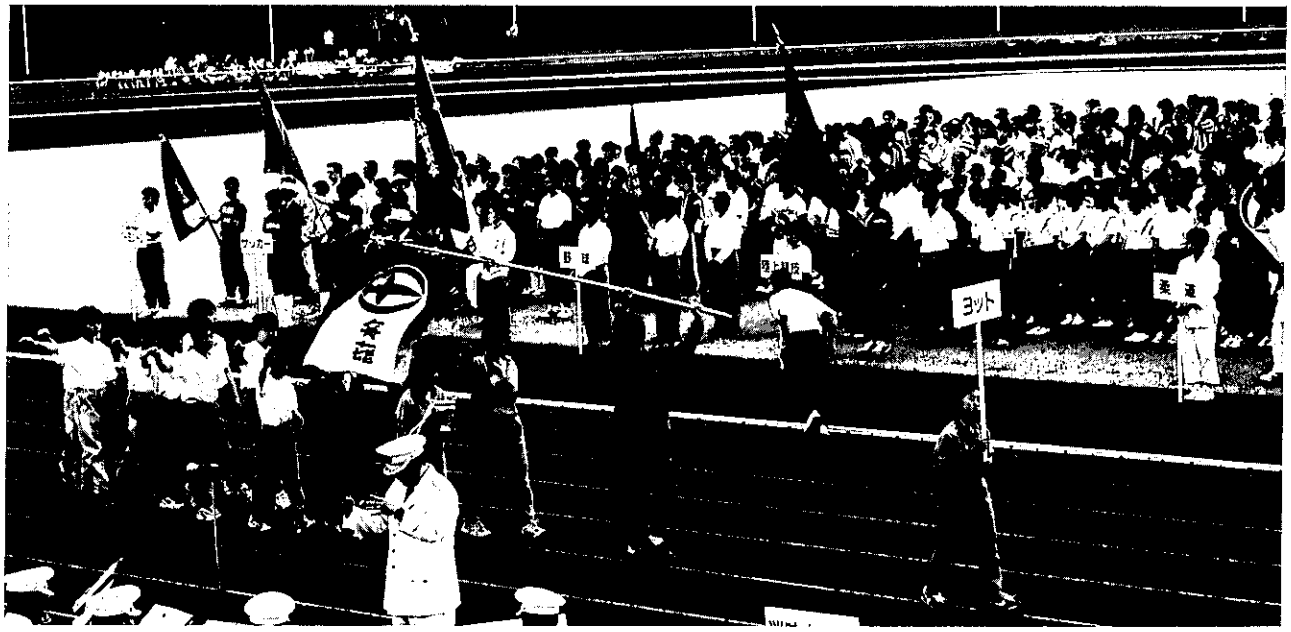
●千葉市総合体育大会ヨット競技の部
●千葉県民体育大会への選手の選考および派遣
●その他千葉県セーリング連盟との共催行事。

'98年 8.　県民大会　レース風景

'97年 8.　第50回県民体育大会開会式風景

III 歴代役員

年代	会長	副会長	理事長	顧問	市体協理事
昭和27年	和田平武	大浜博利		安達 薫	
昭和30年	↓	↓		↓	西川侃介
昭和36年	↓	↓		↓	加藤昌義
昭和37年	森田勝俊	↓		↓	今野睦男
昭和38年	↓	↓		三浦 浩	↓
昭和50年	↓	↓	千葉滋胤	↓	千葉滋胤
昭和55年	松戸節三	吉原章雅	↓	↓	高橋一夫
昭和57年	↓	千葉滋胤	森田芳樹	大浜博利	↓
平成6年	↓	↓	綿貫弘一	↓	土橋茂洋
平成11年	綿貫弘一		土橋茂洋		↓



'97年 5. 25　市民大会総合開会式「青葉の森」

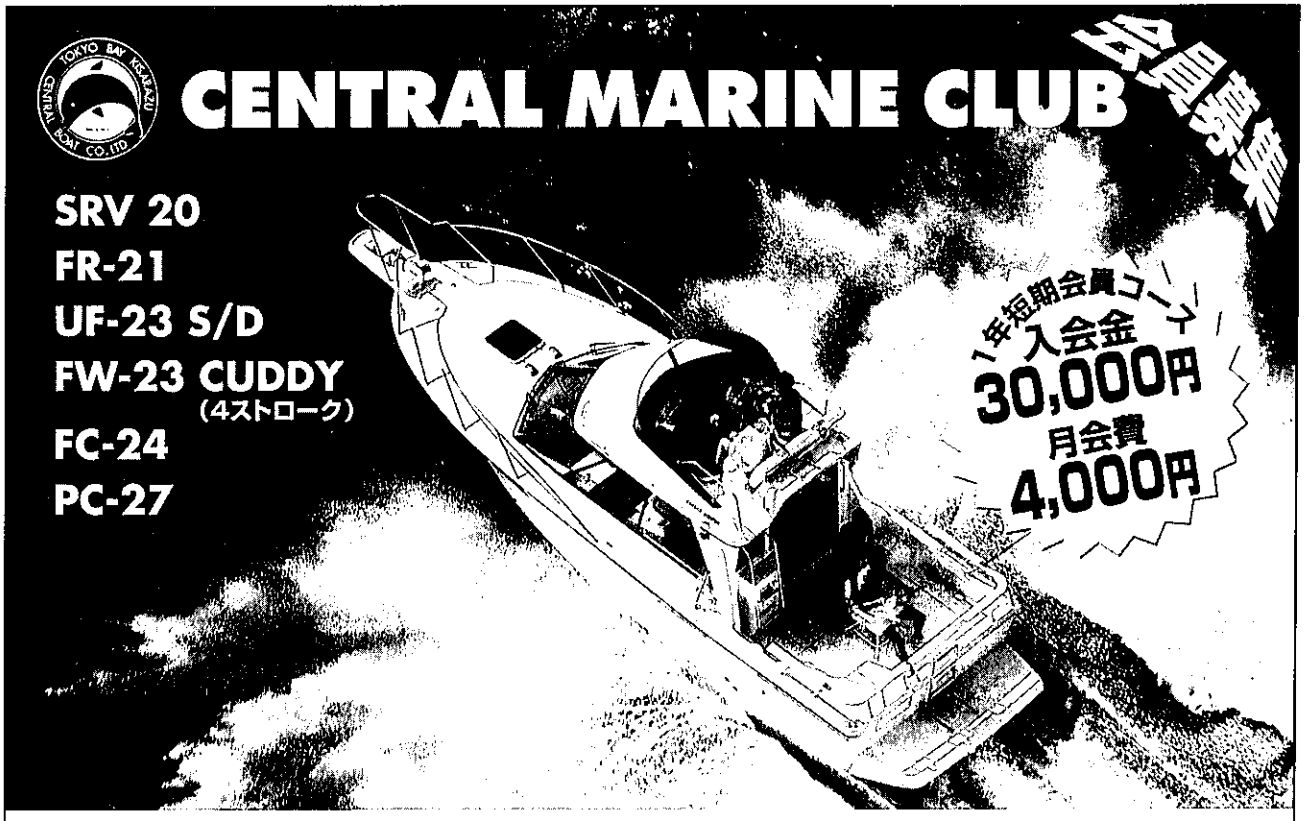
富津市ヨット協会

事務局：大山泰弘

富津市ヨット協会は、海の安全、知識、自然破壊を守る、海難の人命救助を目的としている。これからも海のマナー、海の安全を考えて東京湾のヨットセーリングをする事を考えています。

設　　立	１９７６年
会員数	１３名
使用艇	２１ヨットクルーザー、２４モーターボート。パラセール。マリンジェット等。
ポート港	金谷マリーナ
セーリングエリア	上総湊～大島
講習会	学校・会社に出向いて講習会を開催している。
講習内容	ヨットのいろいろ。構造。走るわけ。セーラーの服装。セーリングの種類。ヨットの方向転換。沈の原因とその対策。海の交通規則とヨットマンのマナー等。
年間活動計画	１月～４月は学科とウエイトトレーニング ５月～８月はセーリング ９月からは反省と来年の対策
役　　員	会長：平野和亮 理事：石井静夫　平野佳昭 進藤孝夫　奥雄一郎
事務局	富津市西大和田１０１２-２１ 大山泰弘 電話：０４３９-６５-３０７３

１９７６	４月富津市ヨット協会設立
１９７７	第１回富津市ヨットレース　準優勝
１９７８	第２回富津市ヨットレース　準優勝
１９７９	第３回富津市ヨットレース　優勝
１９８０	第１回大島クルージング
１９８１	第２回大島クルージング
１９８２	第３５回千葉県民大会　総合５位 第２回富津市ヨットレース デインギー１４クラス　優勝
１９８６	第３６回千葉県民大会　総合６位
１９８４	第３回富津市ヨットレース デインギー１４クラス　準優勝
１９８５	第１回東京湾ビッグヨットレース クルーザークラス　準優勝
１９８６	第４回富津市ヨットレース デインギー１４クラス　準優勝 カタマランクラス　準優勝
１９８７	第２回東京湾ビッグヨットレース クルーザークラス　準優勝
１９８８	第３回大島クルージング
１９８９	第４回大島クルージング
１９９０	第５回大島クルージング
１９９１	第６回大島クルージング
１９９２	第７回大島クルージング
１９９３	第８回大島クルージング
１９９４	第９回大島クルージング
１９９５	第１０回大島クルージング
１９９６	第１１回大島クルージング



楽しいマリン・ライフはセントラルから。

免許は取ったけど、乗る回数が少ないから買うまでは……使いたいときだけ船をかりたいのだけど……
そんな方々にお勧めのマリンクラブ。
1年間コースも登場でさらにリーズナブル。

木更津港に位置し、メインゲレンデは東京湾。

ヤマハディーラー運営のマリンクラブだから安心・安全・おトク。

●入会金・月会費

	1年短期会員コース	5年特別会員コース
入会金	30,000円	200,000円
月会費	4,000円	2,000円

●会員入会・資格

1.クラブの趣旨に賛同する20歳以上の有職者で、心身ともに健康な方。
2.小型船舶免許4級以上の所有者であり、マリンスポーツを愛する方。

●必要書類

1.海技免状　2.認印　3.住所または勤務先が証明出来るもの。

●利用料金

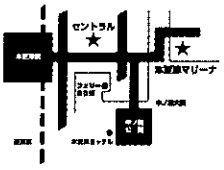
	土・日・祝日(半日)	土・日・祝日(1日)	平日(1日のみ)
SRV 20	7,500	15,000	10,000
FR-21	10,000	20,000	15,000
UF-23S/D	15,000	30,000	25,000
FW-23カディ	15,000	25,000	20,000
FC-24	15,000	30,000	23,000
PC-27	40,000	80,000	50,000

＊価格は予告なく変更されることがあります。

お申し込みご予約は…

セントラル株式会社

〒292-0831　千葉県木更津市富士見3-1-22
営業時間／9:00～18:00　定休日／月曜日
TEL0438-23-2091 FAX0438-23-1455
http:www02.u-page.so-net.ne.jp/kb3/central/



YAMAHA
特約店

千葉県セーリング連盟創立50周年
おめでとうございます

千葉ヨットビルダーズクラブ（ＣＹＢＣ）　　会長　福田寿夫

CYBC ジュニアー会員募集

対象　小中学生 使用艇　OP ディンギー　（クラブ艇 12 艇）

練習日 第一、第三 日曜日 専任コーチにより指導

創設以来３０年数々の実績を挙げました！

OP ワールド日本代表　３名

アジア大会 金メダル獲得

全日本選手権大会 優勝　等

次は君の番だ！

CYBC 一般会員募集　初心者・高齢者歓迎 レンタル料助成あり

お問い合わせ・申し込みは

０４３８－３０－４０５６ 平安雄（ひらやす たかお）まで

協賛　二葉空調（株） 代表取締役　小松勝治（11 期会員） 〒 263-0001 千葉市稲毛区長沼原 595—3 電話 043-250-2043 Fax　043-259-1251	協賛　（株）谷海苔店 代表取締役 谷光雄（14 期会員） 〒 260-0025 千葉市中央区問屋町１６－６ 電話 043-242-4252 Fax　043-242-0011

幕張新都心 ホテル ザ・マンハッタン

心身を快適にリフレッシュする、ワンランク上の環境とおもてなし。
マンハッタンヘルスクラブ新規会員募集中!!

会員タイプ	利用制限	年会費	会員特典
準会員 【個人・法人】	年間50枚の利用券発行	240,000円	●「ジュニアスイートルーム」ペア宿泊券を年間2枚贈呈(1泊朝食付) ●レストラン&バー10%割引
平日準会員 【個人・法人】	年間50枚の利用券発行 (土・日・祝日・8月除く)	120,000円	●「スタンダードルーム」ペア宿泊券を年間2枚贈呈(1泊朝食付) ●レストラン&バー10%割引
平日回数券利用 【個人・法人】	年間24枚の利用券発行 (土・日・祝日・8月除く)	40,000円	●レストラン&バー5%割引

＊その他に個人・家族・法人正会員もございます。 **(税 別)**

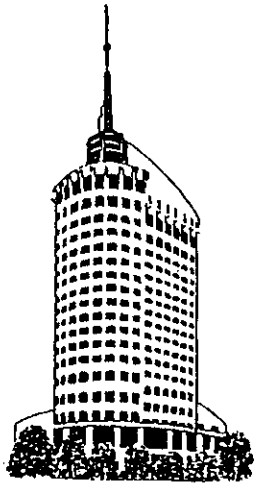
営 業 時 間：日～木・祝日　8:00～20:00
　　金・土・祝前日　8:00～21:00

一般利用料金：ビジター　¥4,000
　　宿泊客　¥3,000

施　　設：トレーニングジム　エアロビクススタジオ
　　スイミングプール　ジャグジー
　　サウナ　ウォーターバー
　　マッサージルーム　リラクゼーションルーム

TRANSPORTATION

ＪＲ―京葉線・海浜幕張駅より徒歩３分。
バス―成田空港より約３０分・羽田空港より約４５分。
　(リムジンバスをご利用下さい。)
お車―東関東自動車道―東京方面より湾岸習志野 I.C.約５分
　〃　―成田方面より湾岸千葉 I.C.約３分。
京 葉 道 路　―両方面より幕張 I.C.約８分。



THE Manhattan

Telephone : (043)275-1111
Facsimile : (043)275-0011
〒261-0021
千葉市美浜区ひび野２－１０－１

編集後記

平成１０年４月の総会に記念誌製作を議題にあげ、記念式典の記念品として、お渡ししようと理事会で決定した。８月に編纂委員会を設置し進行予定表と専用原稿用紙を発送した。締切は１１月末である。１０月には松戸会長が退院され、ご自宅とのこと、そろそろ巻頭の原稿をお願いしようかと。新年がこえた２月に訃報。先生のヨットへの思いを聞く事が出来なくなり、残念でならなかった。先生との出合いは県立美術館長就任の時であるが国体会場でのいつもの笑顔が忘れられない。
そして４月総会。荒川新会長就任、名称の変更、１１月を記念式典として会場仮キープ。
原稿の未着1/4。そこで６月２３日付けで原稿の督促状。もう時間がない！１１月２０日が印刷の納期。一方式典の準備の方も大変である。案内状に記念誌引換のコメントが入る。

最後の案内状には、式典の記録も収録することで後日お渡しすることになる。そんなことで１２年３月末の年度内完成で、おゆるしをいただいた訳であります。
本誌刊行にあたり関係団体はじめ、執筆者、加盟団体のみなさま、貴重な写真や資料をご提供いただき深く感謝申しあげます。そしてご協賛いただきました各社にも併せてお礼を申し上げます。

前川 清

千葉県セーリング連盟創立５０周年記念誌

発　行：2000年3月31日
千葉県セーリング連盟
〒261-0012 千葉市美浜区磯辺5-16-1-305 國府田山隆気付
編集長：前川　清
編集室：(株)イメージコズモス
長谷川　剛
印　刷：(有)サプコ
〒162-0801　東京都新宿区山吹町361

風、ともに50年。

千葉県セーリング連盟